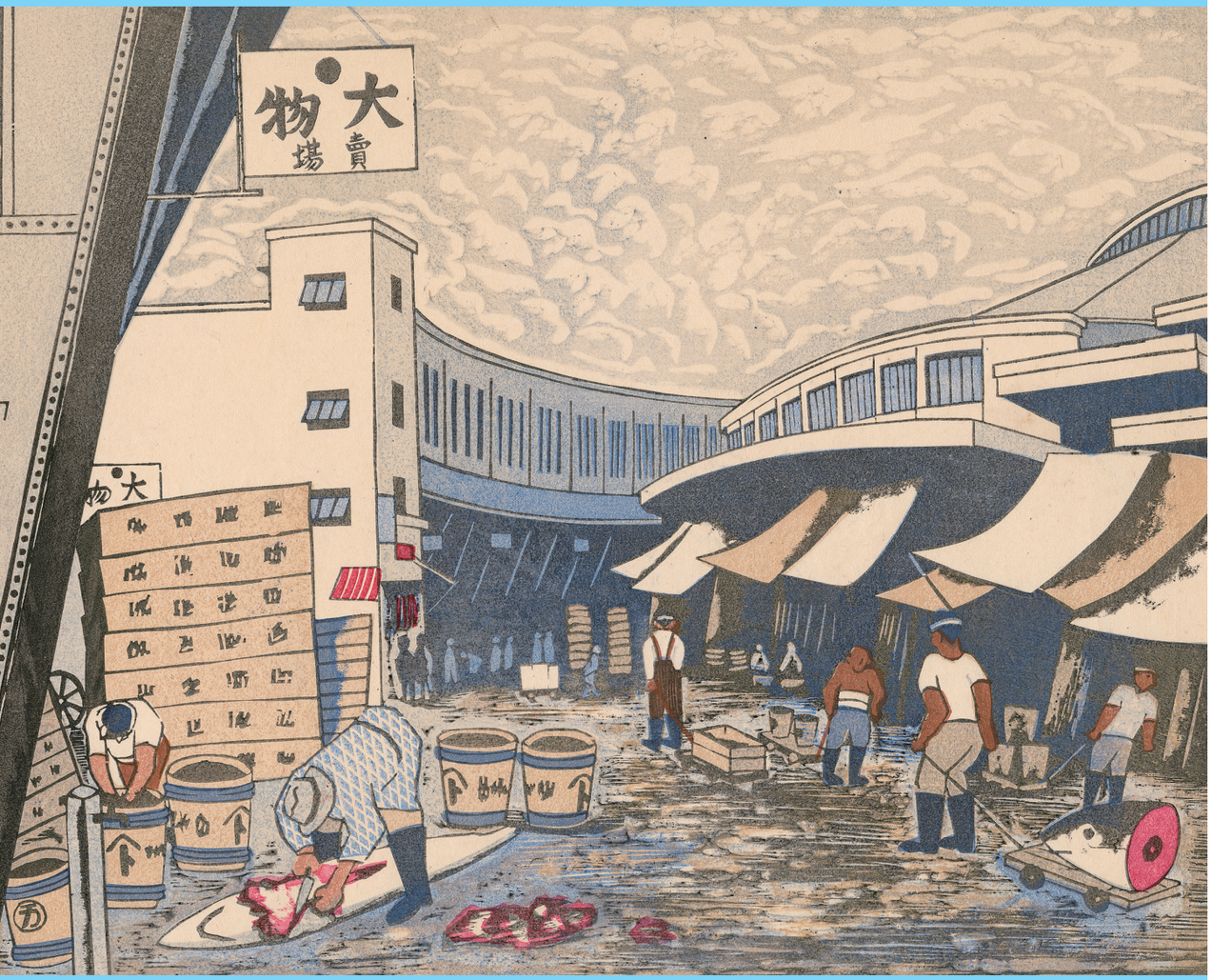
版画堂 116



ご注文の方法

●電話・Fax・メール・葉書にてお願いいたします。

Tel. ０３（３２１９）２０２７

Fax. ０３（３２１９）２０２６

ﾒｰﾙ：info@hanga-do.com

〒 101-0051　東京都千代田区神田神保町 1-12　雅樂川ビル 1F

●送料は実費を頂戴いたします。

●ご送金は下記口座にお振込みください。

①三井住友銀行　神田支店（普通）１０６４０９３

口座名　有限会社　版画堂

②郵便振替　００１８０－６－４１４８１２　版画堂

営業日　月～土（日・祝祭日休業）10:00am ～ 6:30pm

http://www.hanga-do.com/



ジョルジュ・ルオー　銅版画集『悪の華』

1926 年～ 27 年制作　1966 年刊行　限定 450 部

判型 47.5 × 36.5　銅版 14 枚　函少傷み

400,000



1　アンダース・ゾーン
「水浴（二人）」 1917年
17.3×11.5　サイン　銅版
全体に少ヤケ　マージン左上部に
2ヶ所水ジミ　裏面ヤケ
15,000



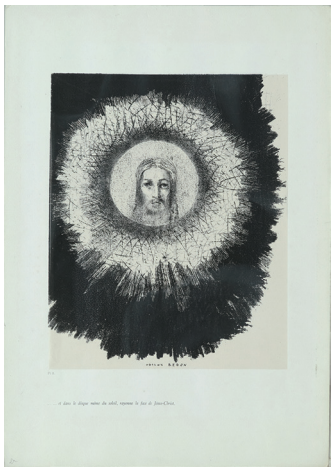
2　アンドレ・A.M.D・ド・スゴンザック
「シャヴィーユの森」 1924年
18.5×21.5　限75　サイン　銅版
マットヤケ
15,000



3　アンドレ・ドラン「裸婦」　30,000
34.5×46　限100　サイン　リトグラフ
マットヤケと全体に少ヤケ・少シミ
裏面少ヤケ　マージン上辺にテープ跡



4　フランソワ・ドービニー　40,000
「小麦畑の小径」 1921年
16.5×20.2（紙寸）　ガラスステロ版
少ヤケ



5　オディロン・ルドン　90,000
「まるい太陽のただなかに、
イエス・キリストの顔が光りかがや」
『聖アントワーヌの誘惑』第1集 X
1888年　28×23　限60　刷込サイン
石版　マージン僅かにシミ



6　オディロン・ルドン　55,000
「老婆ー何をおまえは恐れているのだ」
『聖アントワーヌの誘惑』第3集 XIX
1933年ヴォラール版（第2版）
16.5×10.5　限220　石版



7　バッティスタ・ピラネージ「カンピドリオ広場の眺め」　180,000
1774年　43.5×68　銅版　弱い中折　マージン下辺ヤケ　上辺少シミ



8　フランシスコ・デ・ゴヤ　15,000
「意見が合わない」『戦争の惨禍』17
1808～1814年作（刷年不詳）12.7×29.4
銅版　マージン少ヤケ　僅かシミ
裏面テープ跡



9　C・エミール・ジャック
「かわいい牛飼い」 14.3×10
銅版　レオナルド刷
全体にヤケ　保存やや不良
6,000



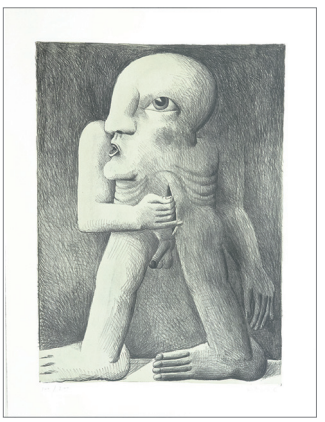
10　ジョン・マーチン　8,000
「誓約」『失楽園』より
1830年代　18.8×28.5　銅版
少ヤケ　裏面少ヤケ



11　ジョン・コンスタブル
「夏の朝」『イギリスの風景』より
1855年版?　14×21.5　銅版
ルーカス刻　少シミ
10,000



12　サルバドール・ダリ
「作品」 15×11　限95
サイン　銅版　全体にヤケ
25,000



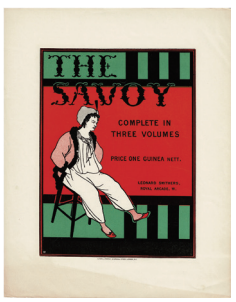
13　アンデス「作品」　50,000
62×45　限200　サイン　リトグラフ



14　パブロ・ピカソ　45,000
「セレスティーヌ」より　1971年
6.3×8.2　限400　銅版　マットヤケ



15　パブロ・ピカソ　100,000
「マックス・ヤコブとピカソによるデッサン」
1905年作　29×25　銅版　キャンセル版（廃版）
少ヤケ



16　オーブリー・ビアズリー
『The Savoy』より
1896年頃　23.4×17.5
リトグラフ　少ヤケ
下辺弱い折れ　左辺切れ1ヶ所
5,000



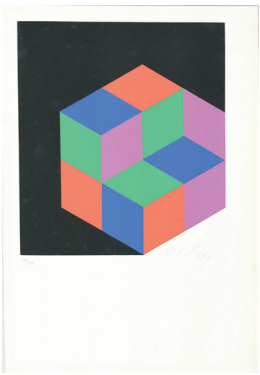
17　ジョルジュ・バルビエ
「火の鳥」『饗宴』より
24.7×19　刷込サイン
複製木版　ヤケ・シミ
上辺左右角・下辺右角折れ
裏面上辺テープ剥し跡
5,000



18　マリオ・アヴァチ
「アネモネと蝶」 23.5×29
限65　サイン　銅版
全体に少ヤケ　画面波打ち
13,000



19　マリオ・アヴァチ
「作品（CHAD-HUAMP)」
23×18　限55　サイン
銅版　少ヤケ
裏面天地にセロテープ跡
10,000



20　ヴィクトール・ヴァザルリ
「クリスタル」 40×28　限200
サイン　シルクスクリーン
画面少汚れ　全体に少マットヤケ
少シミ
20,000



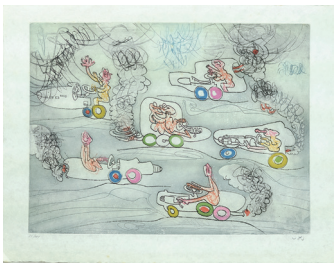
21　ジョセフ・エクト
「棕櫚の木々」
1920～1923年頃　限30
22×17　サイン　銅版
少ヤケ　テープ跡
ポーランド（1891－1951）
5,000



22　ジャン・カルズー
「NU FOND ROSE」
20.5×16　限200　サイン
リトグラフ
少マットヤケ　裏面ヤケ
5,000



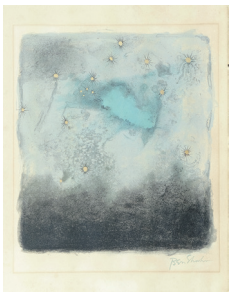
23　ジャン・カルズー　15,000
「作品」 36×52.5　限150　サイン
銅版　マージン中央右に汚れ2ヶ所
裏面全体に少ヤケ　少シミ



24　ロベルト・マッタ　25,000
「作品」 41.5×55.2　限100　サイン
銅版　マージン少シミ　和紙刷り



25
ベン・シャーン
「海辺の朝」
『マルテの手記』より
1968年　47×40
刷込サイン
リトグラフ
全体にヤケ
裏面ヤケ
保存不良
15,000



26
ベン・シャーン
「星くずとともに消し去った旅寝の夜々」
『マルテの手記』より
1968年　43×39
刷込サイン
リトグラフ
全体にヤケ
裏面ヤケ
保存不良
15,000



27　ジョアン・ミロ　30,000
「プロバーブ」 瀧口修造『手づくり諺』より　1970年　37.5×55　限1000
サイン無　リトグラフ　少ヤケ



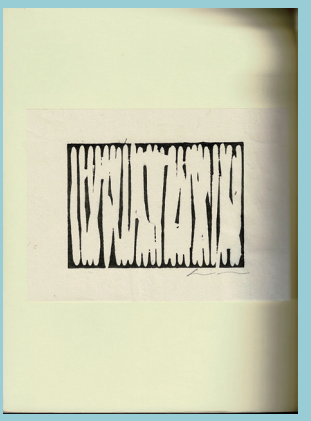
28　ジョアン・ミロ　12,000
「ジャック・プレベール」
『ホアン・ミロ画集』より　1956年
18.5×34　リトグラフ　中折

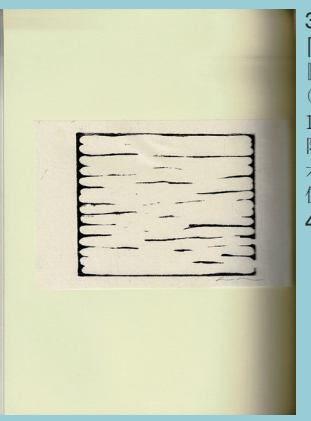




（サイン）

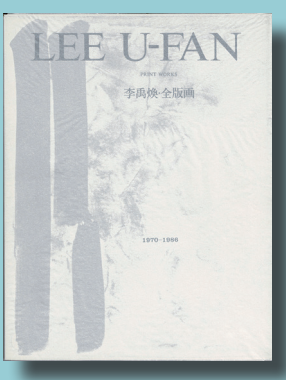
29　ジョアン・ミロ「EIS GOSSOS Ⅷ」　500,000
1979年　113×71（額付136×93.5）　限30の番外　サイン　銅版



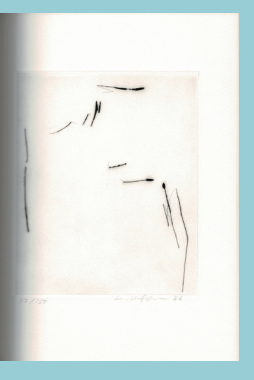


30　李　禹煥
「削りによる場面」
『版画藝術』21
（オリジナル手摺り木版画3連作）より
1978年　7×9.8
限8875（3種合計）　サイン
木版　僅かにシミ
台紙に上辺部貼付によるシワ
40,000

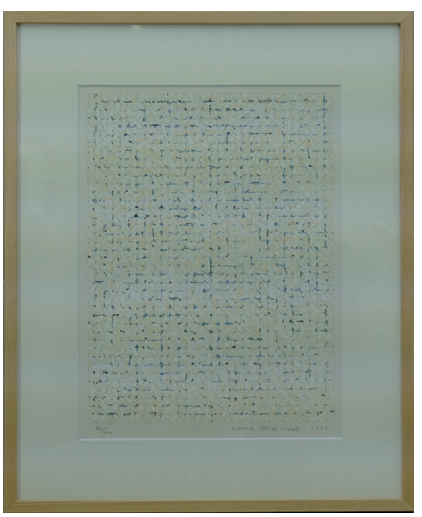
31　李　禹煥
「削りによる場面」
『版画藝術』21
（オリジナル手摺り木版画3連作）より
1978年　8×10
限8875（3種合計）　サイン
木版　台紙に貼付
僅かにシミ
40,000







32　李　禹煥・全版画『LEE　U-FAN』　**230,000**
1986年　シロタ画廊　判型27.7×21.7　銅版2点入（各17.8×14.5）　限50　サイン



33　鄭　相和「作品」　**150,000**
1988年　40×30　限100　サイン　木版



34　フアン・グリス
「Le　Syphon」
1920年代頃　54.5×46　限50
サイン　リトグラフ
スピッツアー版
元額裏板に「ミナミ画廊」
シール付
少マットヤケ
（1887－1927　スペイン）
200,000

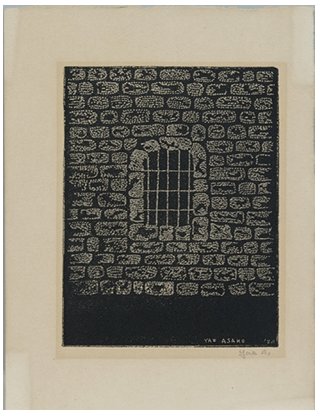


35　靆嘔　　**20,000**
「富嶽噴火」　1982年　限30　サイン
木版



36　秋葉生白
「花」　2008年
90×30.5
アクリルに墨
共シール
77ギャラリーシール付
10,000

37　浅野弥衛「作品」
1974年　11.8×8.8　サイン
銅版　全体に少ヤケ
マットヤケ
裏面四角セロテープ跡
50,000





38　相笠昌義 石版画集『スペイン風景』（2点欠）　　**50,000**
昭和58（1983）年　彩鳳堂画廊　判型52×67　限65のHC　サイン
リトグラフ6点入（「Ⅲ トレド遠望」「Ⅵ バルセロナにて」2点欠）
マージンにシミ



39　相笠昌義 銅版画集『女・時の過ぎ行くままに』（1点欠）　　**50,000**
1979年　77ギャラリー　判型40.5×44　限77　サイン　リトグラフ7点入（『公園にて』1点欠）



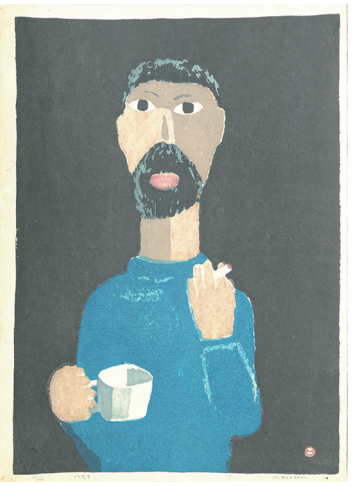
40　朝賀卍廊　『創作版画』（1点欠）　50,000
昭和31年　各48×30（紙寸）　限30　「羽衣」「握裂邪綱」「銀かんざし」「戻り駕」の木版4点入（「猩々」1点欠）　作品少シミ　元函（65×43）傷み



41　畦地梅太郎　23,000
「鳥とともに」　1969年　27.3×16.2
サイン　木版　マージンヤケ
裏面ヤケ　汚れ1ヶ所



42　畦地梅太郎　28,000
「八が岳山ろく」　1955年　18×18
限50　サイン　木版　自摺
全体に少ヤケ　マージン上辺ヤケ
少シミ



43　畦地梅太郎「山男」　90,000
1953年　39×28.5　限50　サイン　木版
自摺　全体に少ヤケ　マージン左上角に折れ　裏面少シミ　四角にセロテープ跡



44　畦地梅太郎
「山の窓」　18.5×14.5
サイン　ガラス絵
250,000



45　麻生三郎「横顔」　25,000
1976年　24×17.8　限10　サイン
銅版　台紙に上辺貼付



46　麻生三郎「裸婦」　20,000
1976年　21.7×5.8　限10　サイン
銅版　裏面上下辺に紙テープ



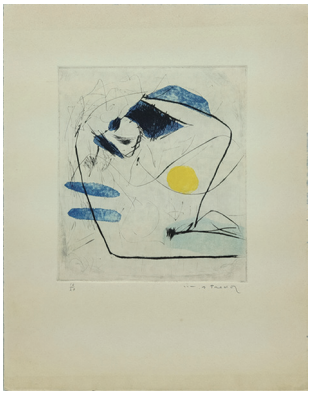
47　麻生三郎　28,000
「裸婦立像」（仮）　40×26.5
サイン　銅版手彩入
秀島由己男献呈版　少マットヤケ
裏面少ヤケ

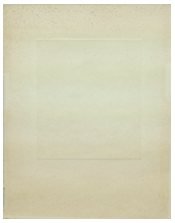


48　伊藤倭子　3,000
「銅版賀状4葉組」
1973/1975/1976/1979年
少ヤケ　少シミ　汚れ
3葉にサイン
1葉は絵のみをカット



49　飯野農夫也　50,000
「炊事」　2000年　52×32　サイン
木版　全体に少シミ
マージン上辺に折れ　右辺水ジミ





（裏面）

50　池田満寿夫「子供」　90,000
1960年　18×15.8　限20　サイン　銅版　全体に少ヤケ
裏面ヤケ　汚れ



51　池田満寿夫「彼女の会話」　300,000
『ロケーション・アンド・シーン』より　1970年　53.5×76
限100　リトグラフ　少ヤケ



52　池田満寿夫「黄色い顔」　350,000
1965年　39.5×36　限1/20　サイン　銅版
僅かにマットヤケ　裏面少ヤケ



53
池田満寿夫
「私は眠りつづける」
1969年　59.5×49.5
EA　サイン　銅版
マージン少マットヤケ
少シミ　裏面少ヤケ
下部に少汚れ
90,000



54　池田満寿夫　20,000
「黒い衣裳」　1980年
65.5×50.5　限50　サイン
リトグラフ



55　石井柏亭　8,000
「下谷」『東京十二景』より
39.4×26　刷込サイン
木版　四辺破れ　穴
少ヤケ　少シミ　上辺弱い
折れ　裏面マットヤケ



56　石井柏亭　4,000
「金剛山麓」
『日本風景版画第八集　朝鮮之部』より
大正7年（1918）　17×23.8
刷込サイン　木版　台紙上辺に貼
付　少ヤケ　少汚れ　少シミ
台紙破れ　ヤケ汚れ



57　石川寅治「風景」　25,000
油彩SM（23×16）　サイン
キャンバス　保存不良
全体に少ヤケ　汚れ
画面中央下にアタリ（傷）有



58
石川寅治
「踊り」
『裸婦十種』より
1934年
37.5×29.5
サイン　木版
漆原栄次郎摺
全体に少ヤケとシミ
裏面上辺右角と
下辺左角に汚れ
75,000



59　石原寿一？　10,000
「静物」　61×43
刷込サイン　木版　少ヤケ



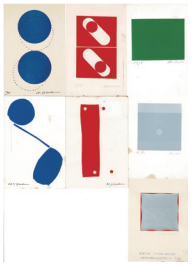
60　井野英二　5,000
「静穏の渚（安房勝山）」
『内房海岸』より　2017年
10×14　限80　木版



61　井野英二　5,000
「木更津夕景」『内房海岸』より
2017年　10.2×14　限80　木版



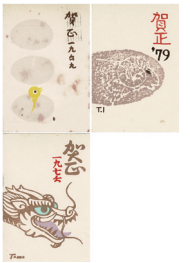
62　井野英二　5,000
「松林富士（館山）」
『内房海岸』より　2017年
10×14　限80　木版



63　飯塚八朗　3,000
「シルク賀状6葉組」
1973～1981年　サイン
少ヤケ　一部にシミ・汚れ
裏面ヤケ　シミ　汚れ



64　岩田覚太郎　3,000
「木版賀状6葉組」　1969～1979年
ヤケ　汚れ　アルバム台紙より剥
した汚れや破れ　裏面一面に剥し
跡　汚れ　破れ



65　稲垣知雄　3,000
「木版賀状3葉組」
1969/1976/1979年
少ヤケ　1葉にシミ大



66　稲垣知雄「かぼちゃ」　20,000
34.5×45　刷込サイン　木版　少ヤケ



67　板　祐生『板 祐生繪暦』
昭和25（1950）年　黒板荘
判型31×20.5　9.5×5/7.5×3/6.8×6.1他　孔版　12ヶ月の暦の上にそれぞれ貼付
暦の和紙の下方に折れある月有
版画は良好
28,000



69　岩橋英遠「流氷」　25,000
39×54　限200　サイン　リトグラフ



68　板　祐生『繪暦』　30,000
昭和21（1946）年4月　判型31×20.5　6×7/8.3×4.7/9×6.7他　孔版　12ヶ月の暦の上に貼付
序文付　表紙少汚れと少虫食い　1点僅かにシミ



70　梅原龍三郎　35,000
「二人裸婦」　1940年　限50
22×18.8　印　木版合羽摺
加藤潤二版　少シミ　タトウ汚れ
裏面上辺左右角テープ剥し跡



71　梅原龍三郎　60,000
「髪をとかす女」（仮）
昭和5年　求龍堂　42×30　限70
印　木版合羽摺　僅かにシミ
四角にコーナーシール跡



72　岩田　賛　3,000
「濠端風景」　14×17.8
台紙裏面に刷込サインと
タイトル　木版
台紙に上辺を貼付
台紙ヤケ　シミ　切れ



73　上野山清貢　45,000
「白百合」（仮）
油彩5号（37×26）　サイン無
板　**額無**



74　上野山清貢　40,000
「黄水仙」（仮）
油彩4号（33.2×23.7）　サイン無
板　**額無**



75　上野山清貢　50,000
「畔の花」（シネウリヤ）
大正14年2月　油彩4号（33×24）
サイン　板　**額無**



76　上野山清貢「三里塚にて」　60,000
大正15年3月　油彩4号（23.7×33）　サイン　裏面にもサイン　板
裏面「生涯人手に渡すべからざる快心の作也」の記述有　**額無**



78　上野山清貢「風景」（仮）　38,000
1925年2月　油彩4号（24×33）　裏面に鉛筆サイン　板　**額無**



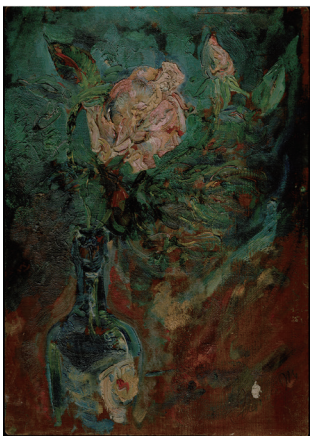
79　上野山清貢「野尻湖」　50,000
1925年11月　油彩4号（24×33）　裏面にサイン　板　**額無**



81　上野山清貢「Charan　Kawoo」（サイパン）　45,000
1925年2月　油彩4号（24×33）　裏面にサイン　板　画面右辺中央上に小穴　**額無**



82　上野山清貢「風景」　60,000
1925年　油彩5号（26.5×37）　サイン　板　**額無**



77　上野山清貢　50,000
「花」（仮）　1925年頃
油彩5号（37×26.1）　**サイン無**　板
額無



80　上野山清貢「花」　60,000
大正14年　油彩6号（41×31）
サイン無　板　裏面為書「大正十四年二月東京市大田区・・・」
額無



83　上野山清貢　65,000
「木立ちの中の家」（仮）　昭和3年
油彩6号（31.4×40.9）　裏面にサインと年代　板
画面左辺に1ヶ所小穴　**額無**





（裏面）

84　上野山清貢「魚」
油彩4号（24×33.5）　裏面にサイン
キャンバス　元額汚れ
50,000





（裏面）

87　上野山清貢　**15,000**
「水仙」（表）「横たわる裸婦」（裏）
油彩0号（18.2×13.5）　**サイン無**　「水仙」画面剥落有
額無



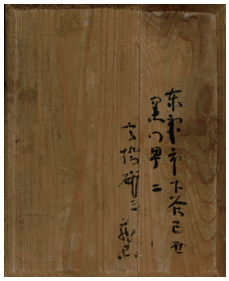
85　上野山清貢　**60,000**
「バラ」　大正14年
油彩6号（41×31）　板
裏面に為書「大正十四年二月
東京市大田区・・」　**額無**



86　上野山清貢「水仙」（仮）
大正14年　油彩6号（40.8×31）
サイン無　板　下辺中央に破損有
裏面に為書「大正十四年二月　東京
市大田区・・」　**額無**
55,000

（裏面）





88　上野山清貢「花」（仮）　**28,000**
1925年　油彩4号（30.4×24）　サイン
中央左部分縦に割れ、継ぎ合わせ跡有　**額無**



89　上野山清貢「人魚」　**180,000**
油彩15号と20号の間（50×69）　キャンバス　画面縮み　汚れ・傷み修復



90　瑛九「素描作品」　280,000
28×23　印　鉛筆に水彩　少ヤケ　少シミ



91　大久保作次郎「日光中禅寺湖」　50,000
油彩SM（16×23）　サイン　キャンバス



92　大沢昌助　10,000
「曲線の静物」　1980年　40×55
限75　サイン　リトグラフ



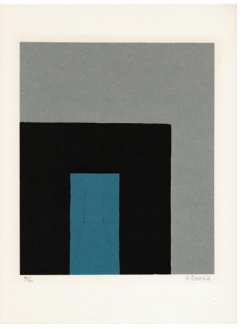
93　大沢昌助　7,000
「作品」　28×38　限125
サイン　リトグラフ



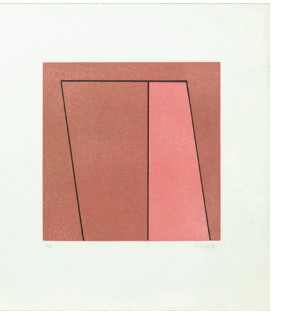
94　大沢昌助「作品」　6,000
43×54　限50　サイン　リトグラフ
マットヤケ　**裏面板ヤケ**



95　大沢昌助　6,000
「作品」　27.7×22.5　限120
サイン　リトグラフ
かすかにシミ1ヶ所



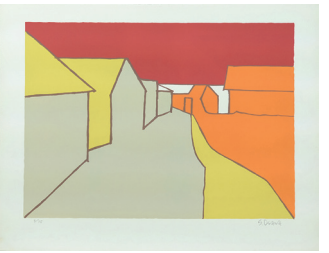
96　大沢昌助　6,000
「作品」　27.4×23　限120
サイン　リトグラフ



97　大沢昌助　8,000
「町の直線」　1982年
29.5×29.5　限35　サイン　銅版
マージン少汚れ　少シミ



98　大沢昌助　25,000
「海辺の町」（仮）　1980年頃　30×40
限100　サイン　**リトグラフに彩色**



99　大沢昌助「街」（仮）　10,000
40×55　限75　サイン　リトグラフ
マージン少シミ



100　大沢昌助「堂」　15,000
1980年　40×55　限75　サイン
リトグラフ



（裏面）

101　大野五郎「ばら」　90,000
1964年　油彩8号（46×38）　サイン　キャンバス



102　岡本唐貴「風景」（仮）　40,000
1935年　油彩4号（24×33）　キャンバス　サイン
少汚れ



103　大薮雅孝　50,000
石版画集『季四題』第2集
昭和61（1986）年　判型51.5×39.7　限50
サイン　リトグラフ4点入（各18×27.5）
元タトウ少汚れ



104　大野隆司　2,000
「おちこまないで」
2017年　20×15.4　サイン
木版



105　岡本よし美　15,000
木版画集『花女童』　昭和57（1982）年
沖積舎　判型44.5×60　限163　サイン
木版5点入（各51×35）　全体にマージンシミ・
少ヤケ



106　小川原　脩「ラサの人」　60,000
1988年　油彩3号（22×27）　サイン　キャンバス



107　小城　基「島景　6枚組」　20,000
各20×26.5　サイン　ペンと水彩　一部に少シミ　台紙に貼付　一枚を除きカバー付き



108　恩地孝四郎「壺」　450,000
1929年　20.5×15　木版　自摺　少ヤケ　少汚れ
裏面少ヤケ　テープ跡1ヶ所



109　恩地孝四郎　200,000
「Lyrique No.2　楽曲によせる抒情のうち
ボルディン〝スケルツオ〟」　1932（昭和7）年
24×16　右下にサイン　限30　木版　自摺
少ヤケ　少シミ　右辺少剥がれ跡
左上辺から左辺の中頃へかけ斜めに弱い折れ有
裏面上下辺にテープ剥し跡



110　恩地孝四郎「Poème　no.4　五月の風景」　600,000
1948年　35×45　限5/10　木版　自摺　額裏板に共シール貼付
少ヤケ　少汚れ　マージン下辺に2ヶ所セロテープ跡　裏面右辺中央上にセロテープ跡　下辺両角にセロテープ剥し跡と少切れ



（裏面）



111　恩地孝四郎　15,000
「抒情（私は信ずる）」
『版藝術』創刊号より　昭和7年4月
19.7×12.3　木版



112　織田一磨　50,000
「モデルの女」『東京生活の内』より
大正11年　29.5×21　サイン　石版
少ヤケ　少シミ



113　柿崎　兆「海岸」　20,000
1992年　15×21　限8　サイン　木版



114　加山又造　35,000
「横になる裸婦　Ⅰ-2」　1977年
25×49　限95　サイン　リトグラフ
少マットヤケ　僅かにシミ



115　香月泰男　75,000
「サラミス沖の太陽」
石版画集『ギリシャ』より　1972年
41×29.5　限75　サイン　ヤケ修復有



116　香月泰男　300,000
「雪・窓」『シベリアシリーズ』より
1969年　43.5×30　限50　リトグラフ　サイン
少マットヤケ



117　柄澤　齋　25,000
「パウル・クレー」
『肖像XXⅡ』より　1984年
19×6.7　EA　サイン　木口木版



118　川上澄生「婦人と南蛮船」　10,000
1972年　42.5×58.5（紙寸）　木版　少ヤケ
全体にシミ有



119　川上澄生　45,000
「前向き南蛮船図」
1963年　52×40　木版手彩入
マージン少マットヤケ・シミ



120　川上澄生　60,000
「横浜山手之図」 1923年作　18.2×26
ロサンゼルス国際版画展出品作　木版
ヤケ　僅かにシミ　カバー付台紙に貼付
台紙カバー少ヤケ　少シミ



121　川上澄生　40,000
「AT VICTORIA B.C.CANADA 春ノ坂路」
1925年頃作　15.5×22.3　印　木版
少ヤケ　画面僅かにシミ
左マージンに水ジミ



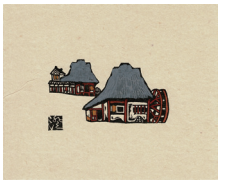
122　川上澄生　13,000
「アラスカ風景」 1970年　21.5×31
木版　少ヤケ　少シミ　マージン左上に
弱い折れ　裏面少ヤケ　インクジミ



123　川上澄生　50,000
「紅毛女人之圖」
1923年　14.7×10　木版
少ヤケ　少シミ　裏面ヤケ
汚れ



124　川上澄生　50,000
「紅毛人之圖」 1923年
14.5×9.3　木版　少ヤケ
少シミ　少汚れ　裏面左下角
に神戸版画の家「山口久吉」
印有



125　川上澄生　5,000
「水車のある家」
1953年頃　7×11.8
木版手彩入　摺りジワ
少ヤケ



126　川上澄生　35,000
「的　三部作の内　放つ」 1928年
22×31.5　印　木版　少ヤケ　シミ
裏面シミ　保存やや不良　所有者印



127
川上澄生
「木版小品3枚組」
1970年頃
「樽前山遠望」(10.5×11.5)
「小鳥とみかん」(8.3×12.5)
「時計台」(9.5×10.5)
木版手彩入　少ヤケ
シミ
9,000



128　川上澄生　20,000
「洋燈と遊女」 1960年頃　12×27.7
木版手彩入　少シミ　摺りジワ



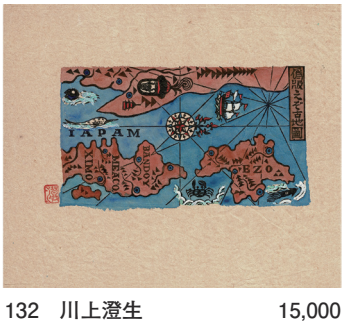
129　川上澄生「女と洋燈」　65,000
1959年　29×42.5　印　木版多色刷
台紙に銀紙を貼付　全体にシワ　裏面少ヤケ



130　川上澄生「偽版古地図」　65,000
年代不詳　43×52.5　革に空押彩色　少ヤケ
シワ　少褪色



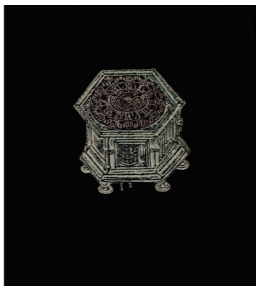
131　川上澄生　18,000
「偽版GIPANG古地図」 1956年
20.5×27.5　木版



132　川上澄生　15,000
「偽版えぞ古地圖」 1955年
12.3×21.5　印　木版手彩入　紙面少ヤケ



133　川上澄生　18,000
「一角獣と一角魚」
27.3×22.3（紙寸）
木版手彩入　黒艶紙
右下角折れ　裏面ヤケ



134　川上澄生　15,000
「時計図」 1965年
27.4×24.2（紙寸）
木版手彩入　黒艶紙
裏面少ヤケ　シミ1ヶ所



135　川上澄生　23,000
「作品」 1965年頃か？
27.2×24（紙寸）　木版手彩入
黒艶紙　裏面少ヤケ



136　川上澄生　15,000
「聖母子」 年代不詳　12×11.8
木版手彩入　黒艶紙



137　川上澄生　20,000
「マヌカンと酒林」 1965年
12×11　木版　黒艶紙
右下角に折れジワ
裏面少ヤケ



138　川上澄生　45,000
「女と洋燈」 1953年
色紙（27×24）　裏面にサイン
空押彩色　裏面少ヤケ



139　川上澄生　6,000
「カピタン」（仮） 18×12
木版手彩入　僅かにシミ
縁が少ヤケ
左下角折れとインクシミ



140　川上澄生　5,000
「キセルを持った南蛮人」
年代不詳　12×7
木版手彩入　少シミ
少ヤケ



141　川上澄生　8,000
「カピタン四人」（仮）
1953年頃　10×16　木版手彩入
少シミ　少ヤケ



142　川上澄生　8,000
「カピタン三人」（仮）
12×11.5　木版手彩入
僅かにシミ　少ヤケ



143　川上澄生　6,000
「人物四人」（仮）
11.5×12　木版手彩入
少シミ　少ヤケ



144　川上澄生　6,000
「南蛮人三人」（仮）
1950年頃　12×12
木版手彩入　シミ　少ヤケ



145　川上澄生　5,000
「南蛮人食卓」（グリーティングカード） 1952年頃　7.6×12
木版手彩入　マージンに少シミ



146　川上澄生　6,000
「洋燈と女」 1956年
15.2×12（画寸）　刷込サイン
木版手彩入　少ヤケ
シミ　裏面少ヤケ・シミ



147　川上澄生「太閤様」 13,000
1957年　17×15.2　木版手彩入
全体にシミ　三角に弱い折れ



148　川上澄生　6,000
「太閤様」 1957年
16.5×15.8（画寸）　木版
51×36の紙に刷られ29×25の紙面に折りたたまれている　裏面テープ剥し跡2ヶ所



149　川上澄生　4,000
「お正月」 年代不詳　13×8
木版手彩入　少シミ
裏面少シミ



150　川上澄生　7,000
「明治写真館」 1956年
14×9.5（紙寸）
鉛筆サイン　木版手彩入
少ヤケ（特に縁に）
裏面テープ跡



151　川上澄生　6,000
「子供・草花・蝶」 1935年
18.3×22.2　木版手彩入
全体にシミ



152　川上澄生　20,000
「明治風俗」（仮） 1959年頃
29×37（紙寸）　印　木版手彩入
少シミ　中折
裏面折り目部分上下にセロテープ剥し跡



153　川上澄生　8,000
「着せ替えあねさま」 1945年
15×22　木版手彩入　少シミ
全体に少シワ



154　川上澄生「馬車」15,000
1925年　14×21.2　刷込サイン
木版　マージン左辺水ジミ
上辺少ヤケ　下辺虫穴1ヶ所
画面少シミ



155　川上澄生「作品」4,000
17×25（紙寸）木版　シミ



156　川上澄生　8,000
「アイヌ風俗」（仮） 11×17
木版手彩入　僅かに折れジワ
右上角に折れ



157　川上澄生　18,000
「男体山雪景」
『新日本百景』日本版画協会選
1938年頃　25.3×32.7（紙寸）
木版　ヤケ　摺りジワ　少シミ
裏面少ヤケ



158　川上澄生「白老の家」5,000
11.5×17.3　印　木版手彩入
少シミ　少折れジワ
マージン左辺に水ジミ



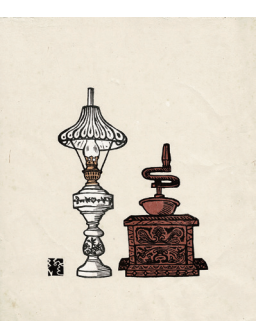
159　川上澄生　4,000
「白老の学校」 9.7×15.3　印
木版手彩入　ヤケ
マージン左辺に水ジミ
下辺左右角折れ



160　川上澄生　5,000
「呼鈴」 1945年頃　7.8×7
木版手彩入　僅かにシミ
少ヤケ



161　川上澄生　8,000
「本と時計」 1955年頃
17×21　木版　少シミ
折れジワ　少汚れ



162　川上澄生　13,000
「ランプとコーヒーひき」
1963年作　21×17.5（画寸）
36×29.5（紙寸）　栃拓版
限120　刷込印　木版手彩入
少シミ　少汚れ　少折れジワ



163　川上澄生　12,000
「髭徳利」 1960年
21.5×18　刷込サイン
木版手彩入　少インクジミ
折れジワ



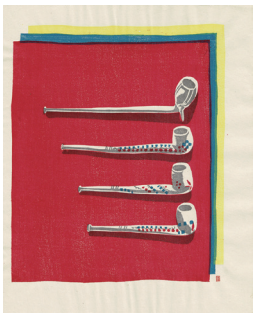
164　川上澄生　10,000
「ランプと南蛮壺」
1963年　27.2×24.3（紙寸）
木版手彩入　少ヤケ
摺りジワ



165　川上澄生「兵隊」8,000
16.2×15.7（紙寸）　木版
少ヤケ　下辺に少千切れ1ヶ所
右下角に折れ　裏面ヤケ
上辺・下辺に黒色テープ



166　川上澄生　5,000
「松前殿」 12×17.5（画寸）
木版彩色入　マージン右辺に汚れ



167　川上澄生　15,000
「煙管四本」 1927年
26×21.5　木版
上下マージンに波打ち



168　川上澄生　40,000
「静物（夜の洋燈）」 1930年頃
23.5×29.5　印　木版　少マットヤケ
マージンにシミ　画面左部に縦に折り目
裏面少ヤケ・シミ・テープ剥し跡5ヶ所



169　川上澄生　7,000
「初夏の風」 17×10.6
印　木版　少ヤケ　少シミ
アタリ数ヶ所
三角に折れジワ



170　川上澄生　10,000
「日傘の女」（仮） 23×12
印　木版　マージンにインクジミとシワ　裏面インク汚れ



171　川上澄生　20,000
「仮装舞踏会」 1921年
23.2×11.8　印　木版手彩入
マージン全体に少シミ
マージン左上に1ヶ所水ジミ



172　川上澄生　7,000
「躍銅板」1953年頃
17.5×11.2　木版手彩入
下辺部やや変色



173　川上澄生「学生」　6,000
13×13　刷込サイン　木版手彩入
少ヤケ



174　川上澄生　3,000
「写真館」
『版画鑑賞会』より
16.5×12　限500　木版



175　川上澄生　25,000
「花」 27×20　印
木版手彩入



176　川上澄生　8,000
「枯れたひまわり」
1923年　25.5×17.5
第5回日本創作版画協会展
出品　木版墨刷　ヤケ
右マージンに汚れ
右下角千切れ
裏面少ヤケ
テープ跡1ヶ所



177　川上澄生
「マドンナとジュグラー」
1937年　27.2×32.5
サイン　木版手彩入
60,000



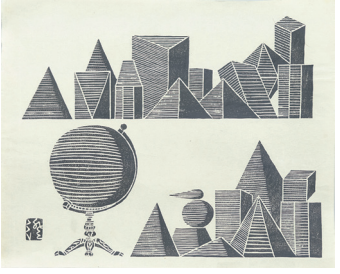
178　川上澄生　5,000
「花」（仮） 年代不詳
9.5×2.1.5　木版
赤艶紙に細かなシワ



179　川上澄生
「作品」
戦前　20×15.6　印
木版手彩入
マージンに水ジミ
25,000



180　川上澄生　和装本『横濱どんたく』　50,000
1947年　日本愛書会刊　判型13×18　限200　木版16頁　少ヤケ
少汚れ　背上下に擦り切れ



181　川上澄生
「静物（地球儀ノアル）」
1950年　30×36.5
刷込サイン　木版
28,000



182　川上澄生
「作品」 1944年
24×31.5　銀箔に木版
中折　右下角に折れ
20,000



183　川瀬巴水「吉田乃雪晴」　90,000
昭和15年　34×46.8　木版　斧銀太郎の印　全体に少ヤケ
少褪色　少汚れ



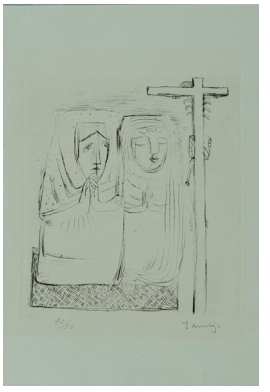
184　川島理一郎「花」 10,000
絹本色紙（27×24）　サイン
水彩　少ヤケ



185　菊池契月　3,000
『近松全集 挿絵版画』 より
1922年　39×28　木版
山岸主計彫・西村熊吉摺
全体に少ヤケ



186　北岡文雄「冬の農村」　13,000
1970年　40×55　AP　サイン　木版
全体に少ヤケ　裏面少ヤケ　テープ跡有



187　北川民次　12,000
「十字架」 1958年　18×15
限50　サイン　銅版　少ヤケ



188　北川民次　12,000
「トリオ」 1958年　32×23
限60　サイン　リトグラフ
少シミ　上下辺1ヶ所ずつピン穴
右上角折れ

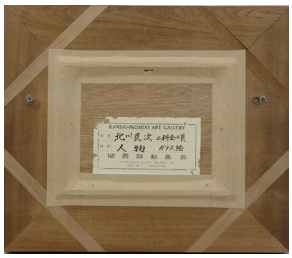


189　北川民次　70,000
「メキシコ田園風景　龍舌蘭の下」 1941年頃
33.4×44（紙寸）　裏面にタイトルとサイン　木版　**自摺**
少ヤケ　少汚れ　弱い中折れ



190　北川民次「浴み」　60,000
1941年頃　33.4×44.2（紙寸）　裏面にタイトルとサイン
木版　**自摺**　少ヤケ　水ジミ　少折れ





（裏面）

191　北川民次　ガラス絵「人物」
1950年　15×19　サイン
額裏面に関西日動画廊シール付
画面左部の上下に傷数ヶ所有
250,000



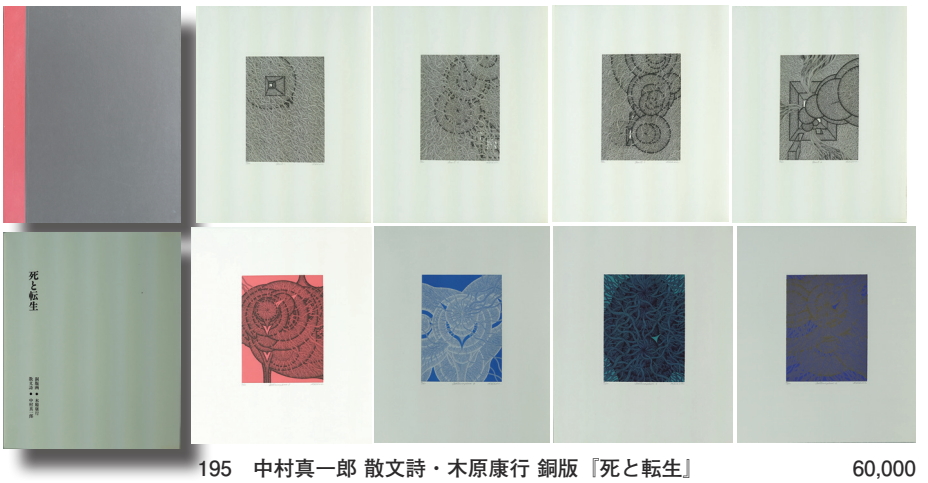
192　北川民次「タスコ風景」60,000
1941年頃　30×25.3　裏面にタイトルと
サイン　石版　ヤケ　汚れ
左辺2ヶ所水ジミ　裏面紙テープ



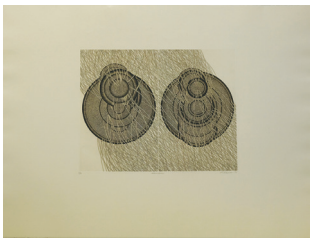
193　北川民次　20,000
「絵のある母子」 20.5×18　限100
サイン　銅版手彩入　手紙入



194　木原康行　10,000
「L'union」 1974年　23×17
ea7/10　銅版　少マットヤケ



195　中村真一郎 散文詩・木原康行 銅版『死と転生』　60,000
1977年　大阪フォルム画廊　限100　判型50×40.2　銅版10点揃（図版は8点のみ掲載）
各23×17　各サイン　各タトウ付



196　木原康行　8,000
「Coincedence」　1988年
29.5×38　限30　サイン　銅版



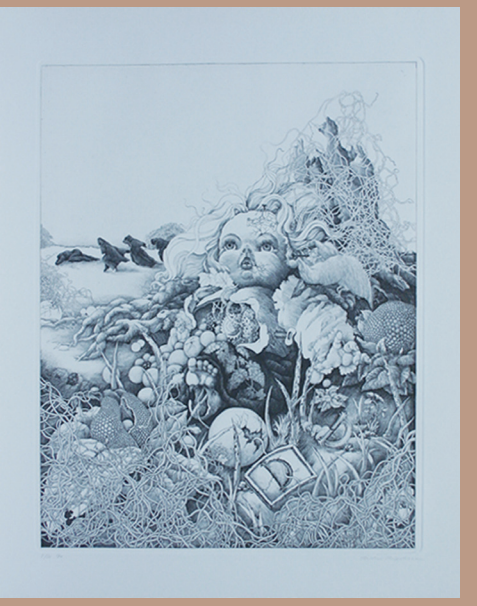
197
木原康行
「Transition 10」
1988年　30×19
限30　サイン
銅版
7,000



198　木村辰彦「桃とプラム」　25,000
油彩1号（16×22）　サイン　キャンバス



199　木村光佑　25,000
「Out of time T2-24」　74×52.5　限50
サイン　シルクスクリーン



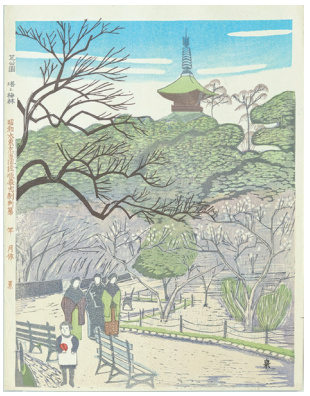
200　清原啓子「Dの頭文字」　280,000
1980年　49×32　限30　サイン　銅版
マージン左下角シミ



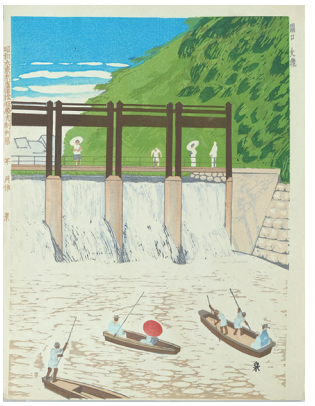
201　黒崎　彰　　50,000
木版画集『AMERICA』
1975年　シロタ画廊　判型54.8×39
木版10点入（各30×43）
全体にシミとヤケ有　外函少汚れ



202　黒崎　彰　木版画集『中国』　　80,000
1980年　シロタ画廊　判型60×45.8　限75　サイン
木版10点入（各45.2×32.5）　1点マージンに僅か折れ　元タトウ付



203　小泉癸巳男　25,000
「芝公園　塔と梅林」
『昭和大東京百図絵版画完制判』
第十一景　1931年　37×28
サイン無　木版　少ヤケ



204　小泉癸巳男　25,000
「関口大瀧」『昭和大東京百図絵版画完制判』第十五景　1931年
37.5×28　**サイン無**　木版　少ヤケ
左下角少折れ　僅かにシミ



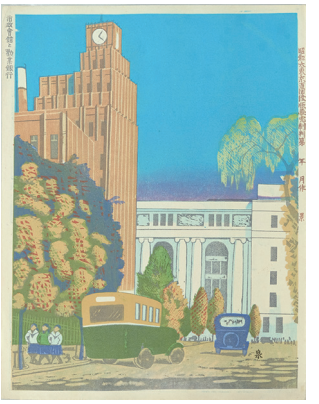
205　小泉癸巳男　28,000
「靖国神社・秋祭」『昭和大東京百図絵版画完制判』第十九景　1931年
37.3×27.7　**サイン無**　木版　少ヤケ
マージン僅かにインクジミ



206　小泉癸巳男　25,000
「あたごやまのJOAK」
『昭和大東京百図絵版画完制判』
第三十一景　1932年　37.5×28.4
サイン無　木版　少ヤケ　僅か折れ



207　小泉癸巳男　25,000
「羽田・穴守稲荷」『昭和大東京百図絵版画完制判』第三十二景
1932年　37.5×28　**サイン無**　木版
マージン僅かに汚れ



208　小泉癸巳男　25,000
「市政會館と勧業銀行」『昭和大東京百図絵版画完制判』第三十五景
1932年　37.5×28　**サイン無**　木版
少ヤケ　僅かにシミ　左上角に少折れ



209　小泉癸巳男　28,000
「築地・魚がし市場」『昭和大東京百図絵版画完制判』第九十八景　1937年12月
28.6×37　**サイン無**　木版　少ヤケ



210　小泉癸巳男　15,000
「塩山の不二」『聖峰富岳三十六景の内』
1944年　28.2×36.7　**サイン無**　木版
少ヤケ　マージン少インクジミ



211　小泉癸巳男　15,000
「龍頭の不二」『聖峰富岳三十六景の内』
28.3×37　**サイン無**　木版　少ヤケ
マージンに少シミ



212　小泉　清「肉筆色紙」
21×26.5　サイン　全体に少シミ
裏面少ヤケ　墨
15,000



213
コセキ・ヤスコ
「高速道路」
限30　サイン
木版　34.5×47
3,000





（裏面）

214　児島善三郎「フランスの田舎」　350,000
1925年頃　油彩4号（24×33）　サイン　板　画面下辺に弱い傷
児島善三郎作品鑑定書付



215　後藤又兵衛「赤兎馬」(仮)　5,000
1956年
19×24.3　サイン　孔版
裏面上辺に紙テープ剥し跡2ヶ所



216　古城江観「ネパールの女」
『古城江観世界風景及び風俗版画』より
1933～1935年
39.5×29.7　限150　印
木版　山岸主計彫
上辺マットヤケ
画面少ヤケ
右辺弱い折れ
下辺折れ1ヶ所有
35,000



217　児玉希望「室生寺の塔」　3,000
『現代作家デッサン集』より　22.5×16.5　木版



218　小林朝治「木版6枚組」　10,000
昭和7～9年　『白と黒』第43～第49号及び『彫刻刀』第12号に掲載の作品6点組（9×7.1　15×9.5ほか）　全作品台紙に貼付　少ヤケ　少シミ　汚れ

219　小林冬青「歩歩是道場」
1977年　26×35
サイン　水彩　少ヤケ
元額裏の紙に破れ
函無
50,000

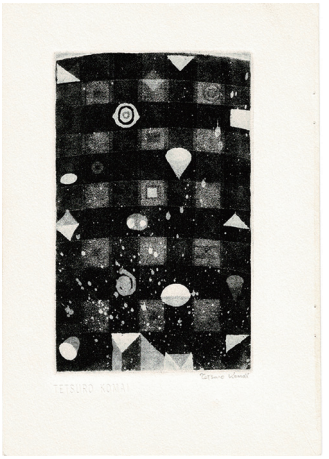




220　小林冬青「草閣春寒聴雨眠」　25,000
1977年　44×66
サイン　水彩　画面中央より下に水ジミ
保存不良



221　小林徳三郎「金魚」　100,000
1929年　油彩6号（33×41）　キャンバス
裏面の木枠にサインと題名　キャンバスに年代記載
少汚れ



222　駒井哲郎
「ある風景」
1969年　『季刊版画』第5号より
14.8×9　限500　サイン　銅版
右マージン縁にテープ剥し跡と
綴じ跡（ホチキス状ピン穴4つ）
45,000



223　駒井哲郎「独居」　**350,000**
1951年　11.5×7.7　限25（1/25 ～ 8/25印刷）　サイン
銅版　少ヤケ　マージン少汚れ・僅かにシミ
裏面セロテープ2 ヶ所



224　駒井哲郎「人形と小動物」　**500,000**
1951年　17.5×10　限25　サイン　銅版　マットヤケ　少シミ
少シワ　裏面天地にテープ剥し跡・少ヤケ



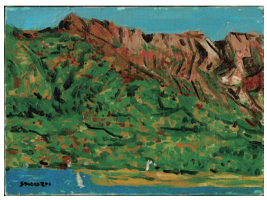
（裏面）



225　駒井哲郎「街」　**50,000**
『蟻のいる顔』より　1973年　22.5×20.8
限250（但し限定番号の記載は無し）
銅版



226　斉藤真一　35,000
「日傘」 45.5×35　限250
サイン　リトグラフ
少マットヤケ　函欠



227　桜井　一　10,000
「戸隠」 油彩4号（24×33.4）
サイン　キャンバス　額無



228　笹島喜平　35,000
「木版20枚」 10×8/8×9.4他
同じ図が2枚ずつ4種有　印　木版
4点僅かにシミ



229　笹島喜平　40,000
「不動明王　No.33」
1969年　60×45　限50
木版拓刷　少シワ





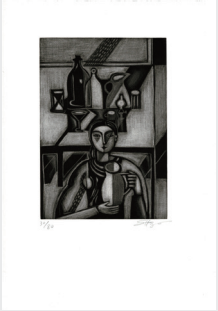


（裏面）

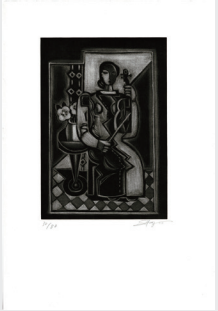
230　里見勝蔵「風景」　350,000
1924年頃か　油彩8号（33.5×45.7）　サイン
キャンバス　画面縮み有　日本洋画商協同組合鑑定書付　画面中央左部分に引っ掻き跡有（作者自身によると思われる）
洋画家・松島正幸の里見勝蔵宛手紙付



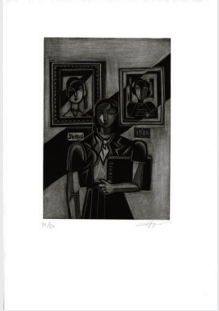
231　島崎鶏二「花」　230,000
1939年　油彩12号（62×40）　サイン　キャンバス
仮縁　少汚れ



232　島田章三
「壺を持つ」
『版画と随想と』より
1980年　25×17.3　限80
サイン　銅版　春風洞画廊+ギャラリーデコール
13,000



233　島田章三
「室内休息」
『版画と随想と』より
1980年　25.7×17.5
限80　サイン　銅版
13,000



234　島田章三
「画廊にて」
『版画と随想と』より
1980年　25.7×17.5
限80　サイン　銅版
13,000



235　清水　敦「家並」　13,000
1965年　23.5×33.3　限50　サイン
銅版



236　清水　敦「教会」　13,000
1965年頃　24.5×31.5　限1/50
サイン　銅版



237　清水　敦　13,000
「花」 44.2×24　限20
サイン　銅版
マージン少シミ
裏面少シミ



238　清水　敦　13,000
「三色すみれ」 1975年
28×25　限50　サイン　銅版



239　JEAN-CLARENCE LAMBERT
詩集『ACCIDENT』 Robert Lvdie Dutrov（パリ）
判型53.5×37.5　限135　菅井 汲のオリジナル銅版
7点入　各サイン入り　アトリエDotrou刷
プラスチックケース入　2頁に僅かシミ　背少汚れ
120,000



240　志村立美　35,000
「舞ひ始め」
『現代美人風俗五態』より
昭和28年　日本版画研究所
37.2×25　刷込サイン　木版
少シミ　左辺に綴じ穴2ヶ所



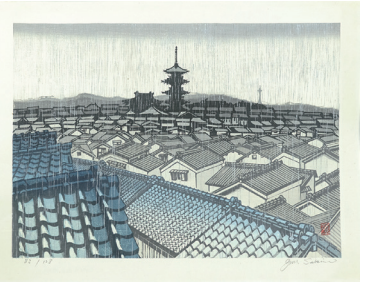
241　下川都一郎　15,000
「牛と少年」
油彩6号（32×41）
裏面にサイン　キャンバス
全体にヤケ・汚れ有



242　菅　木志雄「作品」　50,000
1980年　30×40　限1/10　木版



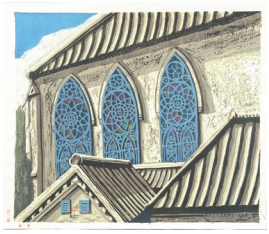
243　鈴木良三　15,000
「瓜木崎灯台」 油彩6号（32×40）
サイン　キャンバス　**額無**



244　関野準一郎「東寺白雨」　55,000
1970年　46×65.3　限128　サイン　木版
マージン少ヤケ　少シミ



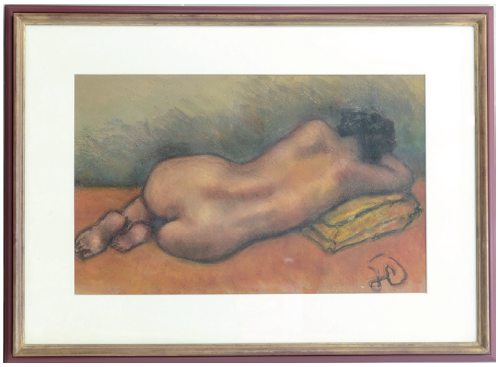
245　関根伸夫　35,000
「ドローイング」 1960年
35×25（紙寸）サイン　色鉛筆
裏面に1図有



246　田川　憲　15,000
「NAGASAKI」 1956年
29.5×35.5　AP　刷込サイン
木版



247　『版畫長崎』終刊号　25,000
昭和38（1963）年8月　編集・田川 憲　発行・版畫長崎の会
限200　判型29×21　36頁　田川 憲木版4点入



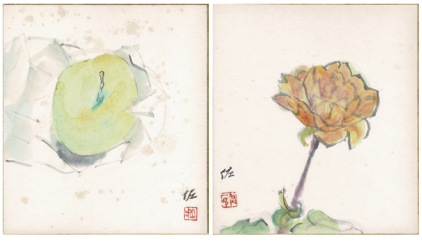
248　高田博厚「うしろ向きの裸婦」　150,000
1978年　36×56　サイン　パステル



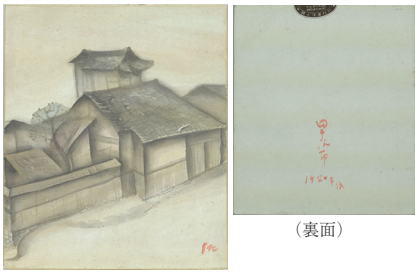
249　高田博厚「野菜と果物」　60,000
21×28.5　サイン　紙にパステル　全体に少ヤケ
台紙四角を裏打に貼付　元額汚れ



250　竹久夢二　10,000
「海邊の別れ」 30.5×22.5
刷込サイン　木版　加藤版
ヤケ　シミ



251　田中佐一郎「水彩色紙2枚組」　3,000
27×24　サイン　1枚多シミ　1枚少シミ



（裏面）

252　田中佐一郎「京都郊外」　10,000
1920年　21×17.8　サイン　小色紙（21×17.8）
水彩　少ヤケ



253　橘　小夢「婦女春秋」（2点組）
岩彩色紙（27×24）　サイン
2点とも少シミ・少ヤケ　木箱汚れ
台紙少剥がれ　「秋の女」4ヶ所剥がれ
木箱付（シミ）
120,000



254　田中　保
「ロンリー・ハウス」
1910年代頃（シアトル時代）か
油彩12号（48×60）　サイン
『ラプソディ・イン・パリ
田中保をめぐる画家たち』展
カタログに図版掲載
画面汚れ有
250,000



255　田端麻子「ねむい人」　10,000
2000年　22×17　サイン　水彩



256　田端麻子「赤い山」　25,000
2007年　油彩4号（24.5×33）　サイン
キャンバス



257　田端麻子　20,000
「こどもの夕方」　2000年
油彩3号（27.5×22）　サイン　キャンバス



258　田端麻子　25,000
「ぴょんぴょん人にのって　かいだんをのぼって」
2005年　油彩4号（24×33）　サイン　キャンバス



259　田端麻子「逃げる人」　20,000
2001年　油彩1号（14×18）　サイン　キャンバス



260　鳥海青児「ひらめ」　500,000
油彩8号（38×45）　サイン　キャンバス　東京美術倶楽部鑑定証書付　画面少汚れ



261　土田麦僊　40,000
「牡丹」（下図）
61×27.5（紙寸）　印
鉛筆に手彩色　中折
少ヤケ



262　土田麦僊　40,000
「花」（下図）
47.5×23（紙寸）　印
紙に水彩　全体に少ヤケ中折
裏打



263　土田麦僊　15,000
「舞妓」　1940年頃
49.5×37（紙寸）木版
マージン少ヤケ　少汚れ



264　土田麦僊　35,000
「舞妓」（仮）　戦前作品
51×38（紙寸）　木版
全体にヤケ　台紙四辺ヤケとシワ・切れ



265　鶴田吾郎「赤い実」　40,000
1929年　24×32　サイン　板に油彩
裏面にタイトル　画面縮み有　額無



266　鶴田吾郎「温泉」　20,000
23×22　サイン　紙にパステル
少ヤケ



267　鶴田吾郎「富士」　15,000
油彩1号（21×22）　サイン　板
額汚れ



268　鳥居清貞　3,000
「九世団十郎の武蔵坊弁慶」
明治29年　36.5×24.5　木版
マージン上部に薄紙剥し跡



269　鳥居忠清　3,000
「九世団十郎の賀古世赤右衛門」
明治28年　36.5×24.5　木版
長谷川壽美版
マージン上部に薄紙剥し跡



270　鳥居忠雅　6,000
「五世幸四郎の剣先隈」
38×25　木版　渡邊版
マージン左上角に剥し跡
左辺天地に小穴



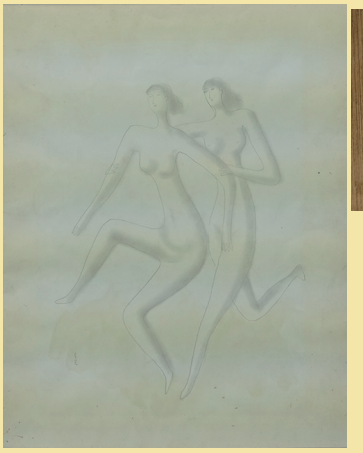
271　鳥居忠雅「作品」6,000
37.5×25　木版　渡邊版
少シミ

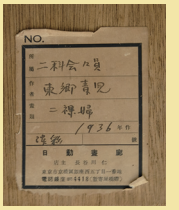


272　鳥居忠雅　3,000
「しばらく鎌倉権五郎」
『歌舞伎姿暦』十一月　24×34　木版
長谷川壽美版



273　富田渓仙　3,000
『近松全集 挿絵版画』より
1923年頃　38.5×29
木版　山岸主計彫・西村熊吉摺





（裏面）

274　東郷青児「二裸婦」　100,000
1936年　32×25　サイン　水彩　日動画廊シール付
台紙天地折れ　全体に少ヤケ　元額傷み



275　中川伊作　20,000
「京都のアンドレ・マルロー」
1974年頃　40×30.3　刷込サイン
木版　四角と上辺1ヶ所テープ跡
裏面四角と上辺1ヶ所テープ跡



276　中原淳一「ものをもひ」　25,000
1940年頃　日本創作社版　24.5×34.5　木版
少ヤケ　元台紙中央下辺に切れ有



277　中山正實「花」　28,000
油彩4号（32×24）　板　画面下部に小穴有



278　中澤弘光「題名不詳」　150,000
1917年　46×30　サイン　水彩　全体に少ヤケ　少シミ



279　中澤弘光　4,000
『近松全集 挿絵版画』より
1923年頃　39×27　木版
山岸主計彫・西村熊吉摺



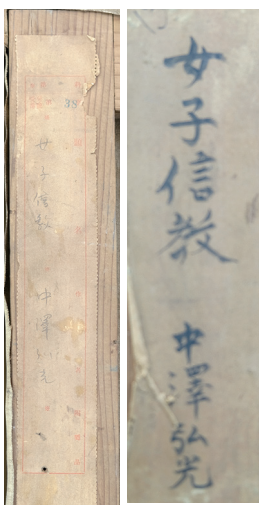
280　中澤弘光「松島」　150,000
1917年　46×30　サイン　水彩
全体に少ヤケ　シミ　裏面少ヤケ



281　中澤弘光「女子信教」　550,000
1950年　油彩30号（91×65）　キャンバス　第6回日展出品作　裏面出品シール付
『中澤弘光展』（三重県立美術館・そごう美術館　2014）カタログに参考図版として掲載有



（裏面）



（日展出品シール）



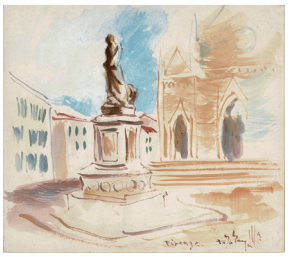
282　中村ミキオ　5,000
「男の肖像」
油彩2号（24×19）　サイン
キャンバス　画面汚れ
額無



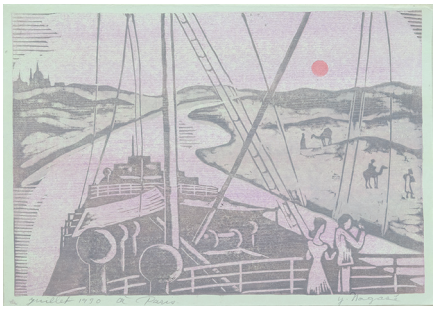
283　中山　巍　3,000
「顔」　色紙（26.8×24.2）
サイン　墨彩　少ヤケ　シミ多
裏面ヤケ



284　中山　巍　3,000
「女の顔」　色紙（26.7×24）
サイン　墨彩　少ヤケ　シミ
裏面ヤケ



285　中山　巍　6,000
「フィレンツェ」
色紙（27×24）　サイン　水彩
少ヤケ　少シミ　少汚れ
裏面テープ跡3ヶ所　少シミ



286　永瀬義郎「スエズの日没」　50,000
『東洋の旅』5　1930年　21×29　サイン　木版



287　永瀬義郎「ピラミッド」　50,000
『東洋の旅』6　1930年　21×30　サイン　木版





（裏面）

288　永瀬義郎「夕空」　50,000
油彩3号（27×22）　サイン　キャンバス　裏面共シール



289　難波田龍起　35,000
「黄色い家」　72×53　限87
サインリトグラフ



290　西原比呂志　30,000
「チロルの部落」　油彩6号（26×41）
サイン　キャンバス



291　西原比呂志　3,000
「木守り」　色紙（27×24）
サイン　水彩　少シミ



292　西村五雲
『近松全集 挿絵版画』より
1923年頃
28.5×24.7
刷込サイン　木版
上辺斜めにマット
少ヤケ
3,000



293　野田裕示　　**40,000**
「WORK 1353」　2000年
油彩1号（21×15）　キャンバス
裏面にサイン

294　野田裕示
「Work　549」
1989年
油彩12号（63×50）
裏面にサイン
ユマニテシール付
125,000





295　橋口五葉
「夏衣の女」
大正9年　43.7×28
木版　保存やや不良
全体に少ヤケ
画面上部左の雲母刷部分に12cm程のスレと少シワ
裏面少ヤケと上辺左辺に紙テープ跡
180,000



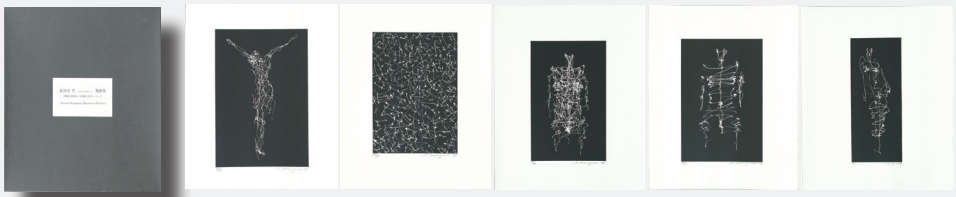
296　橋口五葉
「浴後の女」
大正9年　43.7×29
木版　裏面「五葉限定版」「摺今井男子」の印有　保存不良
画面上部と右部にシミと汚れとシワ　雲母刷部分の一部に剥落有
裏面天地に汚れ
150,000



297　長谷川　潔　　**230,000**
「コップに挿した野草（秋）」　1951年
28.6×23　限50　サイン　銅版　雁皮刷
マージン少ヤケ　少シミ　サイン下に弱い折れ



298　長谷川　潔「果物を持つ女」　　**120,000**
1924年　63.5×47（額寸97×79.5）　**スタンプ・サイン**
銅版　マージン右下角に少水ジミ



299　長谷川　哲　13,000
『長谷川 哲　シルクスクリーン版画集（視線の軌跡という意識によるドローイング）』
1987年　判型44×38　限75　サイン　シルクスクリーン5点入



300　浜西勝則『浜西勝則銅版画集 わらべ唄』　20,000
1976年　22.5×31（紙寸）　限30　A.P　サイン　「夜の森へ」「薄暮の風景」「夢想」
「夜更け」「海底の宴」「ひととき」のメゾチント6点入　保存やや不良
マージンと裏面にシミ多



301　張替正次『張替正次版画集』第二集　12,000
1982年　限100　サイン　「おてだま」「快晴」「演奏」「独楽」「鳥のうた」各14.8×19.4
シルクスクリーン5点入　各マット付　タトウ表のタイトルにシミ　作品は良好



302　原　精一「裸婦」　65,000
1984年　油彩SM（22×15）　サイン
キャンバス



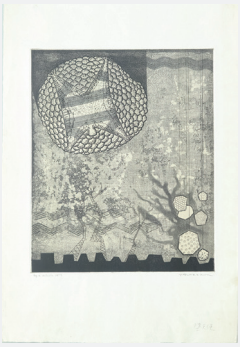
303　廣長威彦　20,000
「仙北の家(1)」　1982年　42×55.5
限50　サイン　木版　**全体にシミ**



304　平塚運一　30,000
「風景」（仮）　43.6×43.7（紙寸）印
木版　少ヤケ
裏面上辺3ヶ所テープ剥し跡



305　日和崎尊夫　50,000
「星雲・奈落・星より」 1964年　15.8×14.6
サイン　木口木版　マージン少ヤケ



306
深沢幸雄
「堕天使」
36×29.5　EA
サイン　木版
全体に少ヤケ
マージン少汚れ
38,000



308　深沢幸雄　12,000
「地底のうた」 1962年　12×22.5
限20　サイン　銅版
マージン少汚れ　裏面少汚れ



307　深沢幸雄　40,000
「埠頭を行く人」 2000年
69.3×36　限75　銅版
マージン左下面に少インクジミ有



309　深沢幸雄　28,000
「一片の書簡」 1982年
49.5×36　限50　サイン
銅版　マージン左右両辺に少折れ



310　深沢幸雄　12,000
「扉の外の人」 1982年
24×18　限50　サイン　銅版



311　深沢幸雄　10,000
「泳ぐ人」 23.5×18　限50
サイン　銅版



312　深沢幸雄　20,000
「仮面の上に降る」 1982年
30.5×30.5　限50　サイン　銅版



313　深沢幸雄　20,000
「青い通路」 1982年
35×25　限50　サイン　銅版
マージン左下角に少折れ



314　深沢幸雄　25,000
「十字のダレス」 1988年
49×36　限50　サイン　銅版



315　深沢幸雄　35,000
「ロック」 49.5×36　限50
サイン　銅版



316　深沢幸雄　28,000
「アングルの浴女の光芒」
1988年　49.5×36　限50
サイン　銅版　マージン上辺中央に1ヶ所折れ



317　深沢幸雄　銅版画集『中原中也　汚れちまった悲しみに』　135,000
1998年　判型50×39　限75　サイン　銅版12点入（各22.5×18）　深沢幸雄自筆（毛筆）詩文入



318　福井良之助「作品」　90,000
14.2×20.3　E.P.A　サイン　孔版　少ヤケ　少シミ

319　福永伊佐男「風景」
12.8×19.5　刷込サイン　木版
上辺を台紙に貼付　台紙ヤケ・シミ・左辺に切れ
3,000





320　舟越保武「りんどう」
24×20　限350
サイン　銅版
25,000



321　舟越保武「りんどう」　150,000
高14　巾9.5　奥行10　ブロンズ　刻名無
『舟越保武の世界』（岩手日報社）に掲載　箱無



322　藤島武二「蝶」　180,000
30×21　右下に武二の印　紙に水彩　シミ
裏面シミ



323　丸木　俊「鶏」　25,000
油彩4号大（21×33）　サイン　紙に水彩



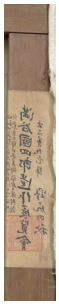
324　前田藤四郎　12,000
「生生」　30×21.5　印
木版　マットヤケ　多シミ
共シール　元額汚れ
裏面マージン上辺にセロテープ跡　函無





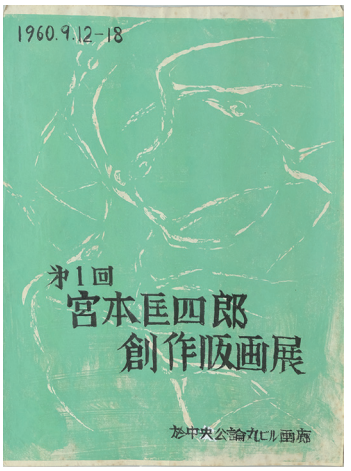
325　満谷国四郎「風景」　280,000
1918年　油彩8号（38×45.5）　サイン　キャンバス
日本洋画商協同組合鑑定証付　画面少汚れ





（裏面サイン部）

326　満谷国四郎「野尻の秋」
1925年　油彩20号（60×73）　サイン　キャンバス
裏面木枠に「遺作展覧会」のシール貼付
画面少汚れ　上部に裏の木枠による少傷跡有
400,000



327　宮本匡四郎　5,000
「第1回宮本匡四郎創作版画展ポスター」
1960年　62.5×46（紙寸）　木版
少シミ



332　宮本匡四郎　7,000
「三色のイメージ」 1978年　43×37
EA　サイン　リトグラフ



335　宮本匡四郎「空間」　5,000
58×44.8　サイン無　木版　少シワ



328　宮本匡四郎「空間」　10,000
1976年　37×51.2　サイン　リトグラフ
マージン少シワ



330　宮本匡四郎「作品」　10,000
1977年　40×54.5　限7/10　サイン
リトグラフ　マージン少シミ



333　宮本匡四郎「作品」　12,000
1961年　39×53　サイン　木版
マージン各所にインク跡



336　宮本匡四郎「虚点」　15,000
1968年　50.5×50.5　1/30　サイン　木版
全体に少ヤケ　マージン少シワ・少シミ



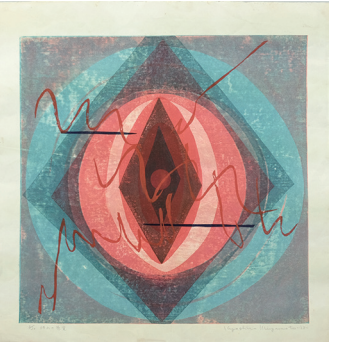
329　宮本匡四郎「点と線」　10,000
1976年　39.5×54.5　サイン
リトグラフ　作品を台紙に貼付
台紙にサイン・年代・タイトル記載
裏面マージン少シミ



331　宮本匡四郎「線　条」　10,000
1977年　37×52.5　EA　サイン
リトグラフ



334　宮本匡四郎「Le Point」　12,000
1976年　41×56　限1/30　サイン
リトグラフ　マージン少シミ・シワ



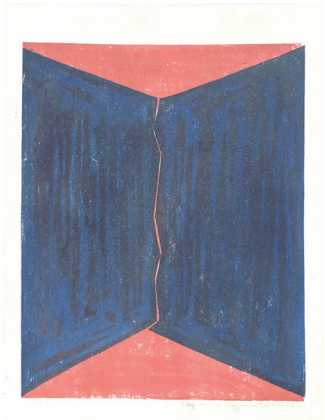
337　宮本匡四郎　15,000
「怖れの感覚」 1968年　50.5×50.5
2/30　サイン　木版　少ヤケ
画面左辺中央に摺りジワ
マージン少シワ・少シミ



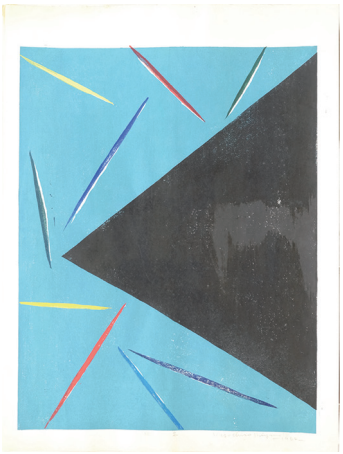
338　宮本匡四郎　23,000
「点B-2（図形）」　1973年　52×52
11/50　サイン　木版　少ヤケ
マージン左辺に少シミ



339　宮本匡四郎「渦」　10,000
1962年　60.5×49　サイン　木版
少シワ



340　宮本匡四郎「状況」　10,000
1964年　54.3×42.3　3/30　サイン
木版　全体に少ヤケ



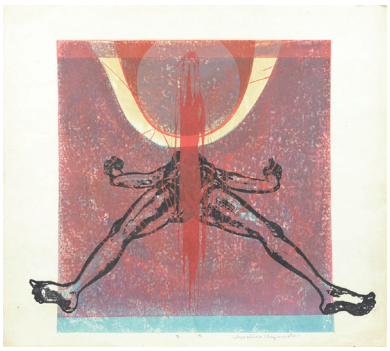
341　宮本匡四郎「概念」　10,000
1964年　54×42　サイン　木版
マージン少ヤケ　少シミ



342　宮本匡四郎「世界」　10,000
1964年　54.5×42　4/30　サイン　木版
少ヤケ



343　宮本匡四郎「意味」　10,000
1964年　54.5×42　3/30　サイン　木版
少ヤケ



344　宮本匡四郎「存在」　23,000
50×60　サイン　木版　少ヤケ
マージン少折れ　少シワ



345　宮本匡四郎　20,000
「TEXTURE 3」1974年　50×50　EA
サイン　木版　少ヤケ



346　宮本匡四郎　20,000
「Acte (A) 行為・A」　1975年
50×49.5　3/30　サイン　木版



347　宮本匡四郎　28,000
「作品 3　ー重さのイメージー」
1972年　54×53　3/50　サイン　木版
マージン少折れ　シワ



348　宮本匡四郎「作品」　15,000
54.5×54.5　サイン　木版　少シミ
マージン左辺に切れと折れ



349　宮本匡四郎「交流」　13,000
1962年　49.5×60.5　サイン　木版　少ヤケ



350　宮本匡四郎「動音」　13,000
1962年　61×49　サイン　木版　少ヤケ



351　宮本匡四郎「縮図」　13,000
1960年　60×50　EA　サイン　木版
少ヤケ　マージン左辺中央に弱い折れ



352　宮本匡四郎「立つ人」　15,000
60.5×49.5　サイン　木版　少ヤケ



353　宮本匡四郎「Night」　13,000
1963年　55×44　11/20　サイン　木版
少ヤケ



354　宮本匡四郎「歩く人」　15,000
1961年　60.5×49.5　サイン　木版
少ヤケ



355　宮本匡四郎「Image」　15,000
1962年　61.5×50.5　木版　サイン
少ヤケ



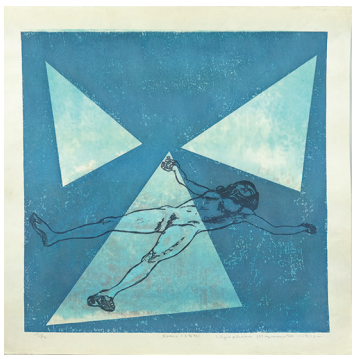
356　宮本匡四郎「乱舞」　18,000
49.7×50　サイン　木版　少ヤケ
マージン少シミ　裏面シミ



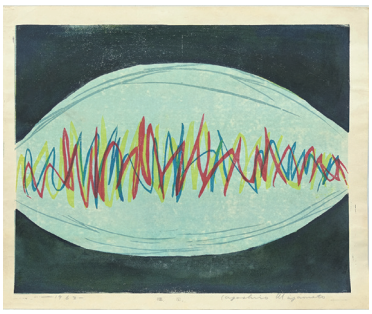
357　宮本匡四郎「無音 - 3」15,000
1973年　50×50　5/50　サイン　木版
少ヤケ　マージン左辺少折れ



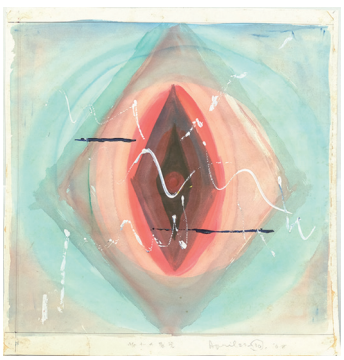
358　宮本匡四郎　20,000
「TEXTURE」 1974年　50×50　2/50
サイン　木版　少ヤケ



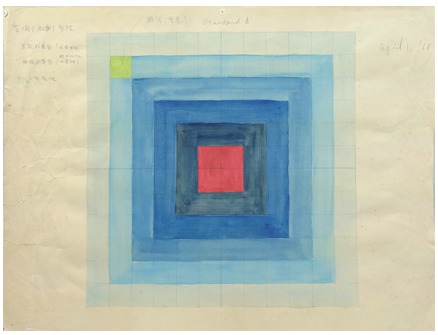
359　宮本匡四郎　25,000
「Space（三角形）」 1973年　52×52
10/50　サイン　木版



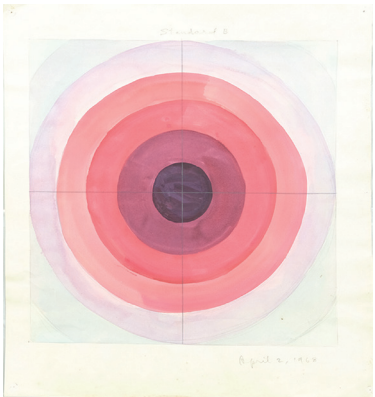
360　宮本匡四郎「構図」　10,000
1963年　44×54.5　サイン　木版　少ヤケ



361　宮本匡四郎　15,000
「怖れの感覚」 1968年　51×52
サイン無　水彩　マージン下辺中央に
切れ修復跡　少ヤケ　シミ　汚れ



362　宮本匡四郎　13,000
「Standard A」 1968年　54×72.5（紙寸）
サイン無　水彩　マージン左辺と右辺に切れ
少シワ　シミ



363　宮本匡四郎　15,000
「Standard B」 1968年　45.5×45
サイン無　水彩　少ヤケ　マージン少シミ
四角に画鋲跡



364　村井正誠「顔」
1984年　油彩4号（33×24）
サイン　キャンバス
裏面にサインと年代
165,000



365　百瀬　寿　50,000
「Square-NE, Seven Strips-BX」
1987年　油彩3号（28×28）　サイン
キャンバス



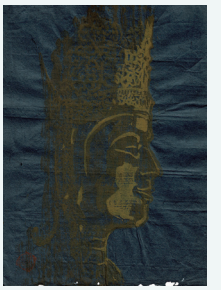
366　「不動明王（東大寺）」



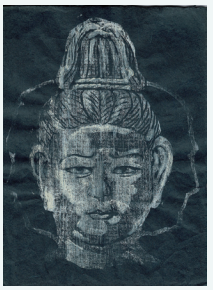
367　「阿弥陀如来」



368　「菩薩像」



369　「観音像」



370　「阿修羅像」



371　「如意輪観音像（観心寺）」



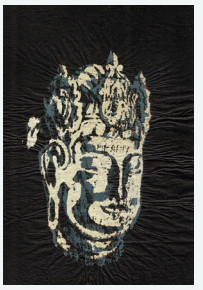
372　「弥勒菩薩（中宮寺）」



373　「弥勒菩薩」



374　「弥勒菩薩」



375　「菩薩像」



376　「金銅弥勒」



377　「薬師寺三重塔」

●森本木羊子
木版

366　「不動明王（東大寺）」
26×18　印無　**4,000**

367　「阿弥陀如来」
31.5×23.3　印　**6,000**

368　「菩薩像」
30.5×20.3　印　刷り
ジワ　**6,000**

369　「観音像」
31.5×23　印
刷りジワ　アタリ1ヶ所
下辺付近に小穴複数
下辺に千切れ
5,000

370　「阿修羅像」
32×23.3　印無　**7,000**

371　「如意輪観音像（観心寺）」
31.3×23　印　摺りジワ
7,000

372　「弥勒菩薩（中宮寺）」
31.5×23.5　印
刷りジワ
左辺縁に折れ　**6,000**

373　「弥勒菩薩」
32×23.2　印
刷りジワ　右下角折れ
6,000

374　「弥勒菩薩」
31×23.2　印　**6,000**

375　「菩薩像」
26×17.5（紙寸）印無
摺りジワ　**4,000**

376　「金銅弥勒」
18.5×13（紙寸）
印無　**3,000**

377　「薬師寺三重塔」
21×16　左辺中央から右辺下部に向って折れ　印無　**3,000**



378　山口八九子『京名所』　**25,000**
昭和9（1933）年　八九子作版画京名所頒布會　判型31×22.6　19.8×23.2／19×60（折り畳み）3点　16×23.5／18.5×7.5他
田中重吉摺　京都名所64景の木版入　限300　元タトウ汚れ・破れ・保存不良　作品は台紙に上辺を貼付　20点シミ多
他20点は少シミ　その他は良好



379　山口八九子『京名所』
昭和9（1933）年
八九子作版画京名所頒布會
判型31×27.5　23.5×14.7
24×15.5他　田中重吉摺
京都名所8景の木版入　限300
元タトウ汚れ・シミ
2点シミ多　他6点は少シミ
5,000



380　山中　現「空の夢」30,000
1989年　53.5×36.5　限25　サイン
木版　マージン少マットヤケ



381　山下新太郎　**50,000**
「黒部渓谷鐘釣温泉付近」
油彩3号（27×22.5）　サイン　キャンバス
画面少汚れ



382　山本豊市「裸婦」　30,000
昭和45年　43×36　サイン
コンテ画



383　山本　鼎「フランス田園の春」　　**2,000,000**

1912（大正元）年　24.8×33.5　刷込サイン　木版　1919年1月第1回日本創作版画協会展出品作　少ヤケ　少シミ
縦に僅かに弱い折れ有



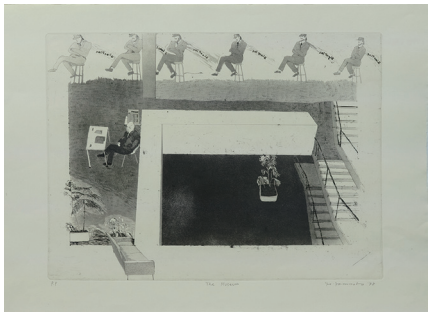
384　山本敬輔「作品」　135,000
1960年代初め頃　油彩12号（50×60）　キャンバス
裏面にサイン　画面少汚れと縮み有



385　矢柳　剛　12,000
「ミクロコスモス」 1966年
33×42　限20　サイン　銅版
少シミ　少ヤケ　額装マットシミ
裏面少ヤケ　テープ跡



386　山本容子　40,000
「mama's」 1975年　39.5×35.5
pp　サイン　銅版　マージン少シワ



387　山本容子「The Museum」　60,000
1978年　45×59.5　pp　サイン　銅版
マージン少シワ　裏面テープ跡有



388　吉岡　憲「花」　80,000
35.5×24.5　サイン　水彩　少ヤケ
裏面ヤケ



389　吉田遠志　10,000
「夜の東京　両國橋より」
昭和14（1939）年　17×23.8
サイン　木版　少ヤケ
マージン少汚れ



390　和田三造「炭抗夫」　3,000
『續昭和職業繪尽』より　昭和31年4月
京都版画院　27.5×36　毛筆サイン
木版　裏面テープ剥し跡



391　脇田　和「鳥・花・人」　200,000
油彩1号（22×15.5）　サイン　キャンバス



392　合田岬一「作品」5,000
25.5×12.5　木版
上辺台紙に貼付　シミ



393　渡辺洋介「自画像」10,000
油彩6号（41×32）　サイン
キャンバス



394　作者不詳「商業新報」挿絵原画か？　90,000
明治期　31×53　サイン無　絹本を額装裏板に貼付
少汚れ



395　作者不詳（やすよ？）
「少女」（仮）　25×19
サイン　鉛筆デッサン
少シミ　左上角破れ
上辺と左辺切れ各1ヶ所
ピン穴5ヶ所　裏面ヤケ　シミ
10,000



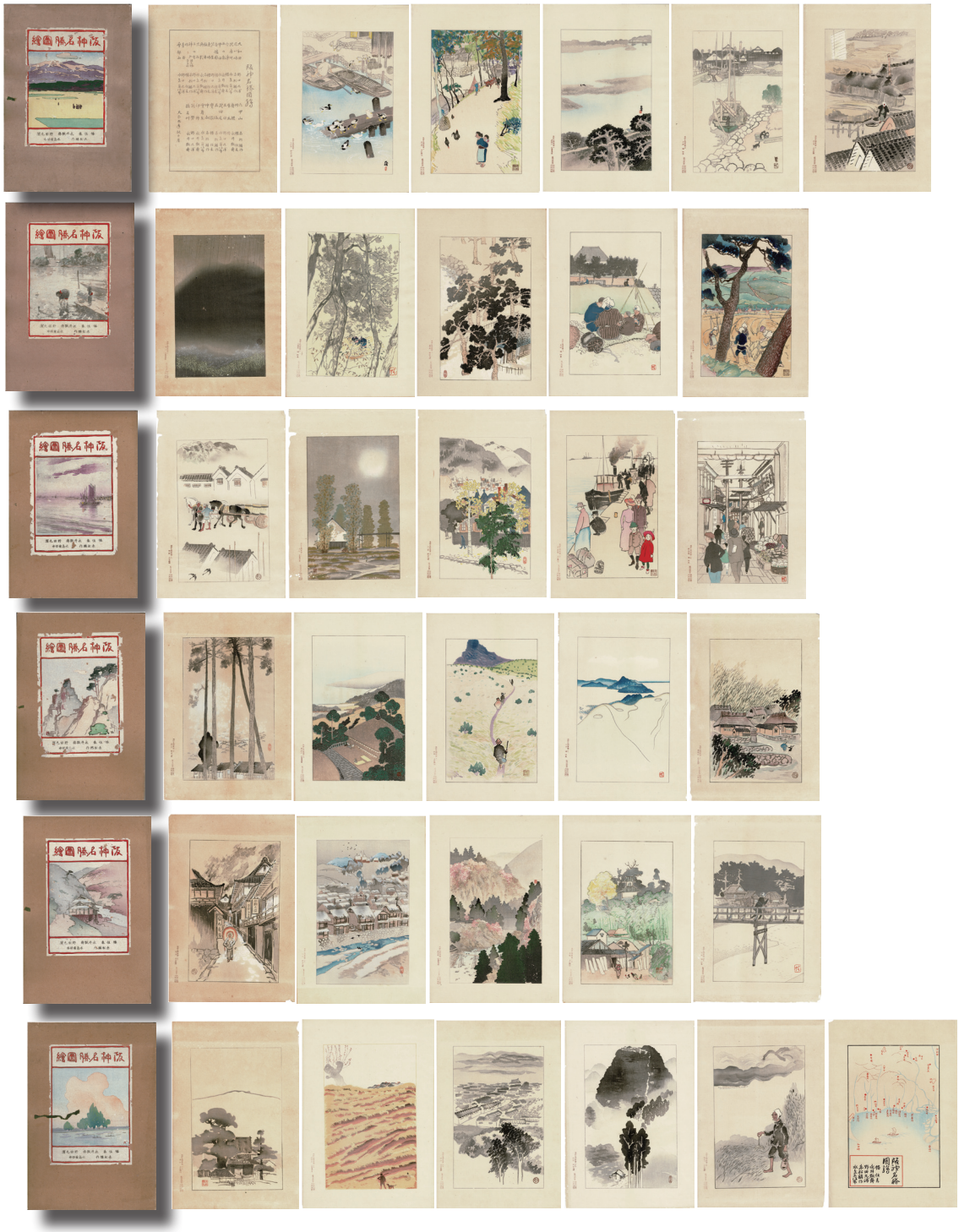
396　小山正太郎　12,000
『中等臨画』　第弐編～第六編（5冊）
第弐編（明治41年9月46版）／第参編（明治33年2月初版）／第四編（明治41年9月46版）／第五編（明治41年9月46版）／第六編（明治40年2月43版）
東京成美堂　判型18.7×26.2　各号石版10点入
第弐・第三・第四編右上角切れ　第四編と第六編背傷　各編少ヤケ　少シミ



397　小山正太郎『水彩画』第一～第五　15,000
第一（明治41年2月訂正3版）／第二（明治37年初版）
第三（明治41年2月訂正3版）／第四（明治41年2月訂正3版）
第五（明治41年2月訂正3版）
東京成美堂　判型26.5×19　各石版8点入
各表紙少ヤケ　第四と第五背傷み



398　精巧木版『水彩畫譜』　50,000
刊年不明　日本葉書會　判型30.5×22.3　三宅克己画・伊上凡骨刻・西村熊吉摺　「富士」「利根川の高瀬船」など木版6図入　各図少シミと貼付のパラフィン紙にシミ有

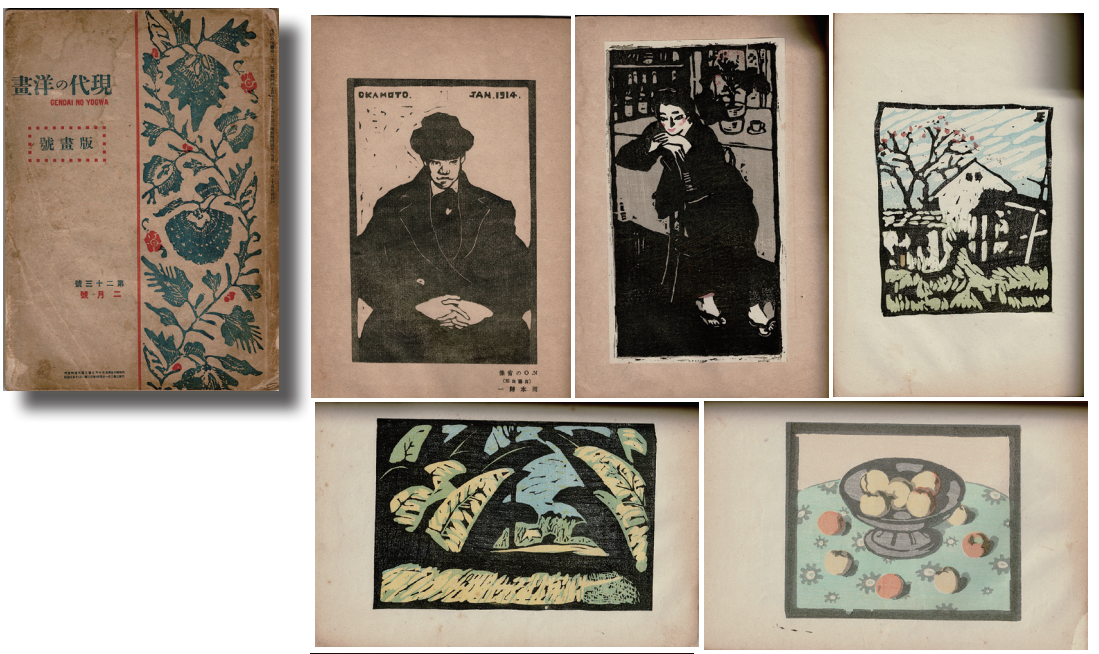


399 『阪神名勝図繪』 **250,000**

第1輯（大正6年5月）～ 第6輯（大正6年8月）（目次の年代は大正5年秋） 6輯揃 東京・金尾文淵堂発行
野田九浦/赤松麟作/水島爾保布/幡 恒春/永井瓢齋の5作家 各輯5図計30図 判型39.8×26.8（元帙）
・第1輯/1「大和田」野田九浦 2「尼が崎」赤松麟作 3「武庫川」水島爾保布 4「今津」幡 恒春 5「西の宮」永井瓢齋
・第2輯/6「甲山」水島爾保布 7「香櫨園」幡 恒春 8「芦屋」野田九浦 9「魚崎」幡 恒春 10「住吉」赤松麟作
・第3輯/11「御影」永井瓢齋 12「大石」水島爾保布 13「三の宮」野田九浦 14「神戸」（波止場）赤松麟作
15「神戸」（南京町）幡 恒春
・第4輯/16「青谷」野田九浦 17「摩耶山」水島爾保布 18「六甲山」赤松麟作 19「六甲山」幡 恒春 20「唐櫃」永井瓢齋
・第5輯/21「有馬」永井瓢齋 22「三田」野田九浦 23「武田尾」水島爾保布 24「名塩」 25「宝塚」幡 恒春
・第6輯/26「中山」赤松麟作 27「雲雀丘」水島爾保布 28「伊丹」永井瓢齋 29「能勢」野田九浦 30「猪名川」永井瓢齋
元帙の木版表紙絵に破れなど傷み 各輯タトウによる紙ヤケの作品6図とマージン傷みの作品3図有 保存やや不良



400 『白刀』（準備号１）　135,000
1910年頃　判型31.6×23.4　岡本帰一・菊地武嗣編　白刀社　清宮憲靖（木版）／馬渕録太郎（木版）／峰嶋尚志（木版）／菊地武嗣（木口木版）岡本帰一（木版）／江口建吉（木版）／本間 弘（木版）／菊地武嗣（木口木版）の8図入
（白馬会系洋画家の発行した同人雑誌）
横山啓直「雨」1図欠落　表紙・本文に弱い縦折少シミ汚れ　裏表紙に書込み有



401 『現代の洋畫』第23号（版畫號）
大正3年2月　日本洋画協会　判型25.7×18
太田三郎「カフェーの女」／岡本帰一「N.Oの肖像」「静物」（台紙右下角に切れ）「夕の街路」(台紙右辺水ジミ)「風景」／池田永治「早春」 の6図入　表紙・本文に水ジミ跡　全体にヤケ保存やや不良
200,000



402　萩原朔太郎 詩集『月に吠える』（第二版　アルス版）　70,000
1922年　アルス発行　判型19×13.5　田中恭吉口絵「画稿より」と恩地孝四郎挿画「抒情（願求）」の木版2点入　函無　背傷み　製本左下部に油性ジミ　製本の一部に綴じ金具から外れ数頁あり



403　『浮世繪藝術』十二月號（第二巻第十一號）
1933年　浮世繪藝術社発行　判型26×19.2
谷中安規木版「射手」入　少ヤケ　シミ　汚れ
50,000



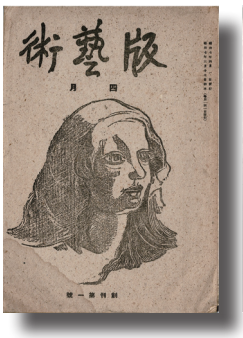
404　郷土誌『うとう』第壱號　5,000
昭和8年1月1日発行　青森郷土會　判型24.3×5.8　表紙/裏表紙・関野準一郎木版　口絵·関野準一郎木版「八戸八幡駒」(13.3×9)　口絵·松野武雄木版「尻もぢもぢの津軽繪馬」(9.5×13)　シミ　全体にヤケ・破れ・汚れ・保存不良



405　『新領土みやげ』　50,000
大正6年5月31日　金尾文淵堂　判型39.2×26　石川寅治「打狗港」(27.7×18.5)／中川八郎「漢江の春」(27.5×18.5　少シミ)／中澤弘光「慶州邑内の一」(27.5×18.5　シミ　左右辺折れ　左辺綴じ穴1ヶ所)／保田 稔「ヲロチョンノ娘」(28.2×18　下辺折れ　マットヤケ)の木版4点入　元タトウ汚れ　剥れ

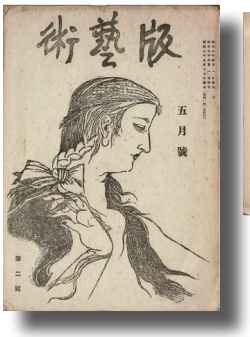


406　『さとぼろ』Vol. 2 No.1　25,000
大正14（1925）年1月　編集/発行・外山卯三郎　札幌詩學協會　判型26.4×19
表紙・扉裏表紙・伊藤義輝　伊藤義輝「風景」(18.9×13.7)／小野英一「夜汽車」(12.3×16　刷込サイン)／管野利助「風景」(19.3×12.2)／唯是日出彦「少女」(15×10.5)／西村眞琴「白鳥」(14.8×9.7)の木版5点入　表紙/裏表紙汚れ　背表紙破れ　本文左上角破れ　弱い折れ　版画は良好





407 『版藝術』創刊号
昭和7（1932）年4月　白と黒社発行
限500　判型28.5×20
前川千帆「林檎と娘」／恩地孝四郎「抒情（私は信ずる）」の手摺木版画2点入
表紙左下水ジミ　背少傷み　裏表紙左ヤケ
25,000




408 『版藝術』第2号
昭和7（1932）年5月　白と黒社発行
限500　判型28.5×20
棟方志功「花と少女」／料治朝鳴「影」の手摺木版画2点入　表紙少シミ　背少傷み
裏表紙左少ヤケ
25,000



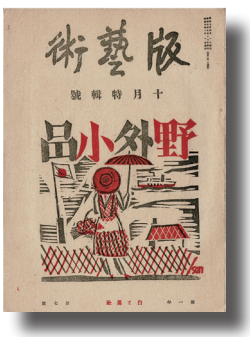


409 『版藝術』第4号　**20,000**
昭和7（1932）年7月　白と黒社発行　限500　判型28.5×20
前川千帆「小品」／「深沢索一「築地風景」の手摺木版画2点と棟方志功「蝶々」ほか機械刷木版入　表紙・裏表紙少シミ　見開き頁上部にラベル剥し跡





410 『版藝術』第6号（手摺号）　**80,000**
昭和7（1932）年9月　白と黒社発行　限500　判型28.5×20
棟方志功「蟹」／武藤完一「豊後臼杵」／谷中安規「少年時代」／小林朝治「無花果」ほか手摺木版8点入　表紙上辺折れ・少ヤケ　背少傷み　見返し頁右上にラベル剥し跡　裏表紙少汚れ




411 『版藝術』第7号（野外小品）　**15,000**
昭和7（1932）年10月　白と黒社発行　限500
判型28.5×20　前川千帆リノカット小品20点入
保存良好



412 『版藝術』第10号（平塚運一小品版画傑作集）
昭和8（1933）年1月　白と黒社発行　限500
判型28.5×20　平塚運一の「木崎湖」「机上小禽」「きつつき」「のげし」牡丹」の木口木版5点／前川千帆の手摺木版「だるま」1点とその他平塚ほか機械刷木版入　表紙上辺と裏表紙左辺に水ジミ　製本少傷み
20,000



413 『版藝術』第11号　60,000
昭和8（1933）年2月　白と黒社発行　限500　判型28.5×20
谷中安規「泥と雪」（台紙少シミ）の手摺木版画1点と川上澄生「雪」／勝平得之「雪国の子供」ほか機械刷木版入
表紙・裏表紙少ヤケ



414 『版藝術』第12号
（棟方志功版画集）
昭和8（1933）年3月　白と黒社発行
限500　判型28.5×20
棟方志功「蔵書票」「草花と竹」の手摺り木版2点と機械刷木版入
表紙・裏表紙少シミ
35,000



415 『版藝術』第13号（桜の号）　80,000
昭和8（1933）年4月　白と黒社発行　限500　判型28.5×20
棟方志功「桜」／谷中安規「祭り」の手摺木版2点と谷中安規『少年画集』ほか機械刷木版入　表紙左と裏表紙右下に水ジミ　本文下部角にも水ジミ　背少傷み



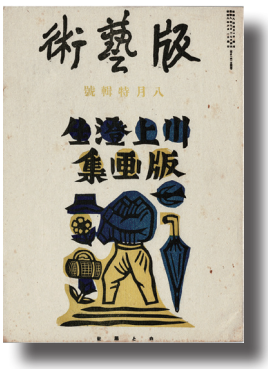
416 『版藝術』第14号
（学童版画集　季節詩風）
昭和8（1933）年5月　白と黒社発行
限500　判型28.5×20
川上澄生「はつなつのかぜ」（少シミ）と前川千帆「風」の手摺木版画と2点と機械刷の学童版画多数ほか入
表紙・裏表紙の上下角に水ジミ
35,000



417 『版藝術』第15号
（全国郷土風俗版画集）
昭和8（1933）年6月
白と黒社発行　限500
判型28.5×20　棟方志功／
川上澄生ほか24図入
表紙・裏表紙少シミ
10,000



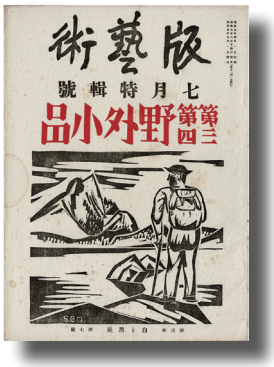
418 『版藝術』第16号　18,000
（戦争版画集） 昭和8（1933）年7月
白と黒社発行　限500　判型28.5×20
江南史朗の木版「雨の大手門」1点と「谷中安規集8点」「料治朝鳴集7点」ほか機械摺木版入　表紙・裏表紙水ジミ見開き頁上部にラベル剥し跡



419 『版藝術』第17号
（川上澄生版画集）
昭和8（1933）年8月
白と黒社発行　限500
判型28.5×20　川上澄生の機械刷木版16点入　表紙少シミ
本文と裏表紙にシミ有
15,000



420 『版藝術』第20号
（川西 英版画集）
昭和9（1934）年4月
白と黒社発行　限500
判型28.5×20　川西 英の機械刷木版20点入　本文少シミ
裏表紙左中央に汚れ
15,000



421 『版藝術』第28号
（第三第四野外小品）
昭和8（1933）年6月
白と黒社発行　限500
判型28.5×20　前川千帆のリノカット20点入　表紙・裏表紙・本文の中央端に水ジミ
15,000



422 『版藝術』第29号
（藤森静雄版画集）
昭和9（1934）年8月
白と黒社発行　限500
判型28.5×20　藤森静雄の機械刷木版20点入
表紙・裏表紙と本文に少シミ
15,000



423 『版藝術』第31号
（恩地孝四郎小品版画集）
昭和9（1934）年10月
白と黒社発行　限500
判型28.5×20　恩地孝四郎の機械刷木版画20点入
本文少シワと1頁に1ヶ所汚れ
裏表紙少シミ
30,000



424 『版藝術』第33号
（勝平得之版画集）
昭和9（1934）年12月
白と黒社発行　限500
判型28.5×20　勝平得之の機械刷木版20点入
表紙・裏表紙・本文に少シミ
10,000





425 『版藝術』第58号（年賀状版画集）　15,000
昭和11（1936）年12月　白と黒社発行　限500
判型28.5×20　谷中安規／棟方志功／川上澄生ほか機械刷木版年賀状29点入　表紙・裏表紙少シミ　本文7頁にシミ



426 『版』作品集　No.1
1969年　版画を作る会
判型25.8×19.8　船崎光治郎
島村黎子／飯森鉄雄／吉田文也
飯田淋也他木版23図入　台紙に
貼付　台紙にシミ　一部版画少
シミ　表紙タトウ紙破れ
20,000



427 『版』作品集　No.2　18,000
1970年　版画を作る会　判型25.8×19.8
船崎光治郎／安西七郎／笠井増五郎／別府
辰男／奥田二郎他木版21図入　台紙に貼付
台紙にシミ　一部版画にも少シミ



428　好刻會『東京見物』エハガキ　4,000
1932年頃　『東京見物』としては「魚藍坂」「佃島」「亀
戸」「山王」「震災記念館」「日本橋」等、他の絵葉書
が混じって木版計14葉入　ヤケ・シミ・少汚れ　袋
はシミ・汚れ・破れ　一部裏面に住所氏名が書かれ
たもの有



429 『於茂千也函繪葉書』　3,000
1931年頃　伊勢國富田町古川のおも
ちゃ店絵葉書4葉組　ヤケ



430 『神戸名所三十六景繪葉書』
1933年　紅葉會（高麗観水／横道
清鈴／岡本鞆之助）　木版7葉入
少ヤケ　一部に少シミ
裏面1葉に水ジミ　他少シミ
インクジミ
4,000



431　集団・版　オリジナル版画集『花鳥風月』'74　鳥の巻　20,000
1974年　集団・版事務所　判型38.8×28.8　限80　各サイン　秋山 静／稲田利行／金子哲夫／鯉渕健
治／佐藤貞夫／清水 百／助川義勝／富張広司／藤田伸一／松田ハルミ／宮本匡四郎／谷田川 卓／矢
山 透の版画計13点入（木版5点・シルクスクリーン5点・リトグラフ2点・銅版1点）
マージンシミ・少ヤケあり　タトウ（レイアウト・秋山 静）シミ・傷み



432　北野恒富『浮世繪の顔』　35,000
『新錦繪帖』壱の巻　吉井 勇・文　大正9年
大鐙閣　判型26.3×19　15×12　木版12点入
上辺本紙に貼付　表紙少傷み　本文ヤケ
製本綴じ修復跡



433　太田三郎
『傳説繪物語』
『新錦繪帖』貳の巻
長田幹彦・文
大正9年　大鐙閣
判型26.3×19
15×12　木版12点入
本紙に貼付
表紙少傷み　本文ヤケ
製本綴じほつれ
28,000



434　小川千甕
『イソップ喩譚』
『新錦繪帖』参の巻
小山内 薫・文
大正9年　大鐙閣
判型26.3×19　各15×12
木版12点入　本紙に貼付
表紙少傷み　本文ヤケ
28,000



435　ジェームズ・A・ミッチェナー　250,000
『創作版画　THE MODERN JAPANESE PRINT』
1962年　タトル商会　序文12頁　あとがき3頁　限510　各サイン　判型59×42　木箱入
平塚運一「Lakeside at the Byodo-in」／前川千帆「Lamp」／森 義利「Comic shinto Dance」
渡辺禎雄「Listening」／木下富雄「Faces」／島 珠美「Birds」／畦地梅太郎「Mountaineer in Snow」／岩見礼花「Winter Composition」／吉田政治「Earth」／巻 白「Ox」の木版10点入

近代日本版画家名覧
(1900－1945)

〈凡　例〉

1　作家の選択は、凡そ1900（明治33）年から1945（昭和20）年までに版画制作の記録が残る作家（アマチュアを含めて）を採録した。但し児童版画は含まない。

2、作家名については、典拠文献や参考文献を参照し、それ以外は一般的と思われる読みを採用した。

3、年記は西暦を基本として、生没年については（　）内に元号を表記した。

4、作品名は《　》、書籍・雑誌・作品集などは『　』内に表記した。〔　〕内は執筆者補記を示す。

5、　版種について、特に記載の無い作品は木版画とする。

6、　頻出する参考文献については以下のように表記する。

・加治幸子編著『創作版画誌の系譜』（中央公論美術出版　2008年）→『創作版画誌の系譜』

・『エッチング』（日本エッチング研究所発行／臨川書店復刻版　1991年）→『エッチング』

7、執筆者

岩切信一郎（元新渡戸文化短期大学教授）
河野　実（鹿沼市立川上澄生美術館館長）
西山純子（千葉市美術館学芸員）
森　登（学藝書院）
樋口良一（版画堂）
加治幸子（元東京都美術館図書室司書）
滝沢恭司（町田市立国際版画美術館学芸員）
三木哲夫（兵庫陶芸美術館館長）
山田俊幸（大正イマジュリィ学会研究員）

8、『版画家名覧』は、版画堂のホームページ http://www.hanga-do.com/ でもご覧いただけます。

戦前に版画を制作した作家たち（16）

【な】（後半）

永井瓢齋（ながい・ひょうさい） *1881 ～ 1945*

1881（明治 14）年 9 月 26 日島根県安来に生れる。本名栄蔵、「釈瓢斎」とも号す。東京帝国大学卒業後、1912 年大阪朝日新聞社に入社。社会部長、京都支局長を経て、大阪朝日新聞論説委員として 1924 年から約 10 年間「天声人語」を担当する。傍ら俳句･俳画をよくし､俳誌『趣味』を刊行。『瓢斎随筆』（人文書院　1936）､『評注嵯峨日記』（落柿舎保存会　1955）､『瓢斎俳画集』（人文書院　1943）など俳句・俳画・小説・随筆など多岐にわたる著作がある。版画の制作は、赤松麟作・野田九浦・水島爾保布・幡恒春と各 5 図ずつ原画を描いて刊行された木版画集『阪神名勝図絵』（東京・金尾文淵堂　大倉半兵衛彫刻　全 6 輯 30 図　1917.5 ～ 8）に《西の宮》《御影》《唐櫃》《有馬》《伊丹》《猪名川》の 6 点がある（同版画集の発行年については、第 1 輯に所載の目録では「大正 5〔1916〕年 10 月」とあるが､奥付では第 1 輯「大正 6〔1917〕年 5 月」､第 6 輯「大正 6〔1017〕年 8 月」となっているため、上記の発行年とした）。1945（昭和 20）年 8 月 6 日逝去。【文献】『阪神名勝図絵～市外居住のすゝめ～』展図録（芦屋市立美術博物館　2005）／石塚純一『金尾文淵堂をめぐる人びと』（新宿書房　2005）（樋口）

中田あや（あやこ）（なかた・あや／あやこ）

1933（昭和 8）年と 1935 年の 4 月に開かれた京都工芸美術協会の主催する京都工芸美術展の第 4 回展（「中田あや」の名で出品）と第 6 回展（「中田あやこ」の名で出品）に木版画が入選。続く 1935 年 10 月の第 4 回日本版画協会展（目録は「中田あや」）にも木版画《ばん茶》が入選した。この作品について前川千帆は、「中田アヤ子氏のばん茶は婦人らしい家庭的な画材であるが表現は又余りに男性的な粗硬なものである。表現力の強さと仕事の硬さとは別である点一考を煩すものである」（「応募作品の前に立つて」『日本版画協会々報』6）と評している。出品時は京都に住む。【文献】岡田毅「京都における創作版画運動の展開」『〔京都府総合〕資料館紀要』12（1984）／『第四回日本版画協会展覧会及日本現代版画米国展準備展観目録』（1935）／『日本版画協会々報』6（1936.1）（三木）

中田一男（なかた・かずお） *1907 ～ 1938*

昭和初期を代表する創作蔵書票作家。1907（明治 40）年 10 月大阪に生まれる。1932 年に「木内」と改姓。作品発表には「名方和郎」「奈加田」「木内一男」などの名前も使う。学歴などは不明。1927・8 年頃からか、独学で「創作蔵書票」の制作を試み、日本蔵票会の『蔵票作品集』や仕事の上で面識のあった斎藤昌三の『蔵書票の話』〔文芸市場社　1929 か〕などで研究を重ねた。中田は自身の「創作蔵書票」について、1935 年の記述ではあるが、「自画、自刻、自摺による創作版画の過程を〔で〕製作せられたものであつて、日本蔵票会華やかなりし頃の蔵書票は、主として画、刻、摺の分業による複製木版であつた。両者を混同さるゝ事は研究普及上不便不利であり、且国際的進出の便宜上と創作版画家としての立場より、エキス・リブリス又は創作蔵書票と呼ぶこととした」（「作家の立場より」『書物展望』45）という。1930 年 5 月に最初の蔵書票誌『エキス・リブリス』（未見、以下の蔵書票誌についての記述は『浪速書林古書目録』14　特輯　蔵書票集（1987.6）による）を創刊。創刊号（5.10 発行　限定 100 部　抒情社）に「名方和郎」の名前で 5 点､第 2 号（6.10 発行）から伊藤登も参加し、同号に 5 点・伊藤 3 点、第 3 号（7.20 発行）に 5 点・伊藤 3 点を発表。その後の詳細は不明であるが、一度中断し、第 6 年第 1 号（1935 限定 50 部　版画工房）から第 8 年第 2 号（1937.10.10 発行）まで刊行したようである。11 月に東京の詩と版画の雑誌『牧神』第 8 号（11.1 発行　東京･牧神詩社）に木版画《小女裸身》《創作蔵書票》を発表。12 月には「名方和郎改メ中田一男」とある木版の年賀状（藤森静雄宛　1931.1.1 消印）を制作。住所は東京市牛込区早稲田南町 44。1931 年 1 月埼玉県南埼玉郡越ヶ谷町 901 に転居。自宅を「版画工房」と名付け、蔵書票専門作家としての生活に入り、月刊蔵書票集『エキス・リブリス』（1 － 1 ～ 10 ／ 1931.1 ～ 10　限定 100 部　版画工房）を刊行。その後､「日本蔵票会」（1922 結成）に制作委員として参加。5 月に『創作蔵書票集』（1〔血涙版〕～ 5〔郷土玩具号〕／ 1931.5 ～ 1933.10　限定 100 ～ 30 部　版画工房）の刊行を始めた。6 月の第 1 回新興版画会展（21 ～ 25　新宿･三越）に《舞妓》《エキス・リブリス》を出品。8 月の『みづゑ』318 号に「創作エキス・リブリスの技法」を発表。9 月には日本版画協会第 1 回展に《エキスリブリス　5 種》を出品した。翌 1932 年の 2 月頃か、「木内一男」と改姓（ただし、作品発表は原則「中田一男」を使う）。大阪市港区尻無川北通 5 ノ 20 へ再転居。また、大阪で実父と 20 年振りに再会したという。4 月頃か、創作蔵書票頒布会（会費:1 ヶ月 1 円 30 銭　毎月新版 5 種、申込所：東京市牛込区肴町 60　大洽堂）の会員を募集。また、料治熊太の主宰する版画誌『白と黒』第 23 号（4.25 発行）に木版画《婦人像》を発表。この料治との関係は深く、その後も同誌第 24・25・27 ～ 30・37 ～ 40・42・43・45 ～ 50 号（1932.6 ～ 1934.8）､『版藝術』（3・4・6・8・9・18 ～ 24・26〔蔵書票大集〕･27･39･58 ／ 1932.6 ～ 1936.12）､『郷土玩具集』（1･2・4・5・7・10 ／ 1934.6 ～ 1935.3）､『土俗玩具集』（1 ～ 6・8・10 ／ 1935.4 ～ 1936.1）､『おもちゃ絵集』（1 ～ 10 ／ 1936.3.1 ～ 12）､『版画蔵票』（1 ～ 3・5・9・10 ／ 1937 ～ 1938）に版画・蔵書票・年賀状などを精力的に発表した。また、書票仲間である青森の佐藤米次郎の主宰する版画誌『彫刻刀』第 9 号（1932.4　夢人社）にも「木内一男」の名で《EX-LIBRIS》を発表。その後は「中田一男」の名で同誌第 11・12・14 ～ 16 号（1932.6 ～ 11）､『陸奥駒』（2・3・5・6・14 ～ 18・20 ／ 1933.2 ～ 1935.12）､『不那の木』(3 ～ 5･8 ／ 1935 ？)､『月刊蔵票』第 2 号 (1937.12) などに版画・蔵書票・ショーカードなどを発表している。またこの年（1932）、地元大阪で島田要・前田藤四郎らが結成した「羊土社」（1931 結成）に参加し､版画誌『羊土』第 2 輯（12.10 発行）に《マリオネット》を発表している。1933 年からか、大阪の柳屋画廊（主人・三好米吉）が発行している縁起物の宝船シリーズに米吉の息子である「柳屋第二世淳雄」「柳屋二世淳雄」の彫り込みのある木版画（1933 = 紙芝居宝船、1934 = 南蛮船宝船、1935 = スキー宝船、1936 = ヌリエ宝船、1937 = ダグラス機登場宝船）などを制作。また、蔵書票集『大阪の新名物　エキス・リブリス』（私家版　数種類あり）の刊行が始まるのもこの頃であろうか。同年（1933）10 月に静岡の『版画座』

第2年10号（10.10発行）に《十五夜お月さん》を発表。11月にはJOBKより「版画にした蔵書票とそのつくり方」を放送（16日）。12月に広島で開かれた創作版画講習会（9～10　広島市大手町増田方）の講師も務めた。1934年は、『版画座』第3年15号（3.15発行）に《裸婦》を発表。5月頃か、創作蔵書票頒布会（会費：A＝2度摺100枚・3円、B＝4度摺100枚・5円　申込所：自宅・版画工房）の会員を募集。6月に中田一男氏小品版画展（10日　大阪・二葉幼稚園）を開催。11月には前田藤四郎・島田要と「創作版画と蔵書票の会」（2日　大阪新町・金曜倶楽部ホール）を開き、講演と実技指導を行った。1935年は、3月の『書物展望』第45号（3.1発行）に「作家の立場より」を寄稿。中田の「創作蔵書票」に対する考え方、経歴などを知る上で貴重な文であるが、制作した作品数などにも触れ、「作家生活に入って五ヶ年間に蔵書票約四百点を製作し、作品集は「エキス・リブリス」も交へて約二十冊刊行した」という。4月には長野県須坂の小林朝治の主宰する『樸』（6～8、10／1935.4～1936.7）に参加し、年賀状・蔵書票などを発表。7月頃までに、西田武雄の日本エッチング研究所製エッチングプレス機を入手し、銅版画の研究にも着手したようである。1936年には4月の羊土版画展（会期・会場不明）、5月の関西版画協会展（上旬　大阪・心斎橋）にも出品した。1938（昭和13）年2月15日大阪で急逝。早すぎる死であった。なお、遺品の木版画道具類は佐藤米次郎が、エッチングプレス機は佐藤の世話で、青森の川口稔（八戸尋常小学校教員）が受け継いでいる。【文献】中田一男「作家の立場より」『書物展望』45（1935.3）／『版画CLUB』4-3（創作版画倶楽部　1932.4）／『みづゑ』327・347・352・353・358（1932.5、1934.1・6・7・12）／『日本版画協会々報』11・26（1936.6、1938.5）／『エッチング』33・76（1935.7、1939.2）／『浪速書林古書目録』14　特輯　蔵書票集（1987.6）／『昭和期美術展覧会出品目録　戦前篇』（東京文化財研究所　2006）／『創作版画誌の系譜』（三木）

中田幾久治（なかだ・きくじ） *1901～1982*

1901（明治34）年11月20日東京下谷に生まれる。川端画学校洋画科と本郷洋画研究所に学び、本人の言によれば岡田三郎助、石井柏亭、渡辺光徳、辻永よりエッチングの手ほどきを受けたという。1926年川端画学校を卒業し、凸版印刷株式会社に入社（彫刻課）。紙幣や証券の銅原版作成に従事するかたわらエッチングを手がける。1932年日本版画協会の第2回展に初入選、以後第3・5・7・8・10・11・13回展に出品。1932年には第7回春台美術展覧会にも《池の端》《自画像》《日暮里風景》を出品。官展でも1934年の第15回帝展に《勝関の渡し》が初入選、さらに1936年の文展鑑査展に《家鴨飼ふ家》が、1941年の第4回新文展に《出征を祝ふ漁村》が入選している。1939年の第26回光風会展にも銅版画1点の出品がある。1940年に日本エッチング作家協会の会員となり、第1回展に《家鴨飼家》を出品（文展出品作と同じか）、第2・3回展にも出品。1943年には日本版画協会会員となった。風景を専らとし、港湾や郊外の景色を緻密に、また陰影深く抒情的に描いた。戦後も日版会や光風会の会員として長く制作を続け、1971年には古希を記念して私家版で『エッチング画集＝中田幾久治』を出版、40年に及ぶ版業を回顧している。1982（昭和57）年9月2日逝去。【文献】中田幾久治「家鴨飼ふ家」『エッチング』49（1936.11）／「紙幣の模様を畫く 民間随一の彫刻技師 凸版印刷の中田氏」『経済マガジン』2月号（1939.2）／『エッチング画集＝中田幾久治』（私家版　1971）／『今純三・和次郎とエッチング作家協会 採集する風景 銅版画と考現学の出会い』展図録（渋谷区立松濤美術館　2001）／『創作版画誌の系譜』（西山）

永田錦心（ながた・きんしん） *1885～1927*

1885（明治18）年12月1日東京市芝区琴平町に生まれる。本名武雄。「武州」とも号す。西久保巴町の鞆絵小学校卒業後、画家を志し1901年頃小林清親門下の挿絵画家・田口米作に師事する。1903年米作没後は、白馬会研究所や寺崎広業画塾に一時期在籍するも、ほぼ独学で絵画を学ぶ。傍ら16歳の頃より琵琶に興味を持ち、1903年薩摩琵琶を肥後錦獅（ひご・きんし）に入門、1905年吉水錦翁（よしみず・きんおう）から「錦心」の号を受ける。1908年「一水会」という一派を創始、1915年には独自の「錦心流」を創設、旧来の薩摩琵琶をしのぐ大流行で、後に門弟が7000人を超えたといわれる。この間日本画家としても活動を続け、内国勧業博覧会や東京勧業博覧会入選を経て、1914年第8回文展で《野武士》、1917年第11回文展で《仏敵》が入選する。明治末から大正期にかけて琵琶演奏家・作曲家・日本画家として活躍した。1927（昭和2）年10月30日逝去。版画は、赤穂浪士の事跡を82図にまとめた木版画集『義士大観』（義士会出版部　1921　限300部）に《惣右衛門の壮》1図がある。【文献】『20世紀物故日本画家事典』（美術年鑑社　1998）／『山田書店新収美術目録』81（2008春）（樋口）

永田珠一（ながた・しゅいち） *1909？～1999*

生年月日は不明である。ただし「物故洋画家一覧・UAG美術家研究所」には「1909？-1999年4月13日」とある。1932（昭和7）年3月東京美術学校図画師範科を卒業。1936年からの1年間は熊本県立阿蘇高等女学校（戦後は高等学校　2012年廃校）に勤務する。日本エッチング研究所の西田武雄はエッチング普及のため、毎年学校の夏休みを利用してエッチング講習会を行った。1936年8月には3週間ほどの「九州エッチング行脚」を行い、8月20・21日は熊本県阿蘇内牧の久富季人宅において講習会（参加者10名）を開催。永田も参加し、その時制作した山の風景を描いた銅版画が研究所機関誌『エッチング』第48号（1936.10）に掲載されている。翌年、大分県別府市北小学校で開催された大分県師範学校主催の第3回エッチング講習会（講師：西田武雄　1937.8.　1～3　参加者27名）にも教員を辞職していたものの参加している。内牧エッチング協会会員（1936.9現在）。1939年の第3回新文展には油彩画《渓谷》で初入選。戦後は阿蘇内牧温泉旅館「蘇山郷」を創業。阿蘇北中学校育友会の初代会長や「阿蘇郷土の会」会長等、郷里の発展に尽力する。その傍ら阿蘇を描いて、創元会展に第20回（1961）から出品し、会員となる。1999（平成11）年4月14日（『第58回創元展目録』1999）に逝去。【文献】武藤完一「三度西田先生を迎へて」『エッチング』58（1937.8）／『昭和期美術展覧会出品目録　戦前篇』（東京文化財研究所　2006）／金子一夫編『大正・昭和戦前期の中等学校図画教員と出身美術学校の総覧的研究報告書　第2部　滋賀県～在外学校』（金子一夫　2016）／『エッチング』47・48・58／「物故洋画家一覧・UAG美術家研究所」（インターネット検索）（加治）

永田春水（ながた・しゅんすい） *1889 ～ 1970*

1889（明治 22）年 2 月 18 日茨城県北相馬郡藤代町に生まれる。本名は永田良亮。荒木寛畝・寺崎広業・結城素明に学ぶ。1913 年東京美術学校日本画科卒業後、国華社に入社、『国華』編集の傍ら古画の研究に従事し、1920 年敦煌発掘仏画模写のためロンドンに 1 年間滞在する。花鳥画を得意とし、文展（第 10･12 回）･帝展（第 10 ～ 14 回）･昭和 11 年招待展・新文展（第 2 ～ 5 回展）出品など官展を中心に活動する。また日本美術会・読画会にも所属した。1940 年東京女子高等師範学校で日本画の講師を務める。戦災で一時期郷里藤代に疎開、茨城県美術展の再興に尽力。1954 年東京に戻り、「如春会」を主宰する。1970（昭和 45）年 5 月 1 日逝去。版画は、荻生天泉・根上富治と競作の木版画集『瀬戸内三代』（大阪鉄道局　1935）に《五剣山暁色》1 図と中井版による木版画《金魚》（1950 年代頃）が知られる。【文献】『20 世紀物故日本画家事典』（美術年鑑社　1998）／『山田書店新収美術目録』93（2010.7）／ Ohmi Gallery homepage「JAOBD item details」（2017.5.6 検索）（樋口）

中谷健次（なかたに・けんじ） *1901 ～ 1985*

1901（明治 34）年 4 月兵庫県に生まれる。1925 年東京美術学校西洋画科卒業。光風会展（第 10・13 ～ 15 回）・中央美術展（第 2・4・5・10 回）・白日会（第 2 回展）等に洋画を出品。また東京市内に奉職の同校西洋画科卒業生で組織する「光言会」のエッチング講習会（1934.12 於日本エッチング研究所）に参加、『エッチング』10 号（1933.8）に女性たちの横顔を描いたエッチング作品が掲載される。当時は東京本郷の汐見校訓導で、1936 年には文部省図画教科書編集委員を務める。戦後は 1947 年石川寅治・奥瀬瑛三らが中心になって設立された「示現会」の創立会員として活動。1963 年武蔵野美術大学教授となる。1972 年アトリエ・フォンテーヌを主宰。1985（昭和 60）年 5 月 18 日逝去。【文献】『エッチング』10･15（1933.8, 1934.1）／『HOMMAGE À KEIICHIRO KOVMÉ（久米桂一郎－教え子による受贈作品集）』（久米美術館　1992）／『20 世紀物故洋画家事典』（美術年鑑社　1997）（樋口）

永地秀太（ながとち・ひでた） *1873 ～ 1942*

1873（明治 6）年 7 月 15 日山口県下松の酒造業有吉家に生まれる。結婚後永地姓を名乗る。徳山中学を卒業後、上京し、彰技堂で学びその後松岡寿に師事、1894 年明治美術会付属教場絵画科を卒業する。1898 年から 1920 年にかけて陸軍中央幼年学校の美術教員として勤務。傍ら 1902 年太平洋画会創立に参加。1909 年第 3 回文展に《静物》で褒状、1913 年第 7 回文展に《しぼり》で三等賞を受ける。1920 年文部省在外研究員として渡仏。1922 年に帰国し、前年に創立された松岡寿が校長である東京高等工芸学校工芸図案科教授となり 1941 年まで勤務する。聖徳記念絵画館の《下関講和談判》を制作。38 年には陸軍嘱託画家として北支方面に出張する。版画に 1936 年刊行の『新時代版画集　前輯』（日本新版画協会）に中村不折･石川寅治･三上知治･鶴田吾郎等と共に、多色木版《憩ひ》の原画を描いている。1942（昭和 17）年 12 月 14 日東京淀橋の自宅にて逝去。【文献】『日本美術年鑑』昭和 18 年版（美術研究所　1943　東文研アーカイブデータベース）／『山田書店新収美術目録 113 号』（森）

中西慎吾（なかにし・しんご）

札幌では北海道帝国大学の学生たちが中心となり「札幌詩学協会」を組織し、詩・版画・演劇の同人誌『さとぽろ』（1925 ～ 1929）を発行する。その第 4 巻 3 号〔17〕号（1927.5）に亜鉛凸版《凸版の色》を発表する。【文献】『創作版画誌の系譜』／『「さとぽろ」発見－大正・昭和・札幌　芸術雑誌にかけた夢』展図録（北海道文学館　2016）（加治）

中西忠節（なかにし・いさお）

1938 年頃に飛騨高山の守洞春が中心となって発行した版画誌『版ゑ』の創刊号（1938?）に《新道》を発表。「中学校の南から上野へ行く道です。旧道がぐねぐねとしてゐるので、今真直な道をつけて居ります。（中略）日向ぼっこをしながら此の工事を眺めてゐる人が何人もありました」とコメントを寄せている。中西は高山町西高等尋常小学校に勤務し、工業科（木工室・動力室・塗装室）の教育主任を担当。生徒からは「チュウセツ先生」と親しみをこめて呼ばれていた。授業に版画家守洞春を講師に招き、いち早く学校教育に版画を取り入れたり、子ども会の育成・同和教育などさまざまな分野で尽力を惜しまず、岐阜県高山市子ども会指導員も務めた。【文献】『創作版画誌の系譜』／山本弘「生涯にわたって教育を実践中西忠節」『広報　高山の文化』92（2005.2）（インターネット検索）（加治）

中西知己（なかにし・ともみ）

長野県西筑摩郡楢川村（現・塩尻市）に生まれる。長野県師範学校一部 2 年に在学中、同校生徒発行による版画誌『樹氷』第 1 号（1938）に《学校》、第 2 号 2600 年版（1940）に《日向ボッコ》を発表。第 3 号（1941）の目次には《風景》の記載があるが、版画の添付なし。1942 年に同校を卒業。【文献】『樹氷』1 ～ 3／『卒業生名簿　昭和 25 年』（信州大学教育学部本校　1950）（加治）

中西義男（なかにし・よしお） *1899 ～ 1965*

1899（明治 32）年 1 月長野県西筑摩郡楢川村奈良井に生まれる。平沢尋常高等小学校卒業。家業の漆塗りを手伝っていたが、毎年奈良井を訪れていた山岳画家茨木猪之吉の影響もあり、次第に画家を志す。1917 年茨木の誘いで上京し、太平洋画会研究所に学ぶ。1919 年帰郷し、小学校の代用教員になる。1920 年頃か、森山収治（のち北沢姓、1920 年 6 月から 1924 年 5 月まで福島町立尋常高等小学校の代用教員として勤務）を知り、交友が始まる。1924 年福島町立尋常高等小学校へ異動。翌 1925 年 8 月の「日本農民美術研究所」（設立者：山本鼎　小県郡神川村大屋）が小・中学校の手工科教師を対象に開いた第 1 回夏期工芸学校に参加。山本鼎から風景画と版画の指導を受けたことを契機に小学校を退職し、日本農民美術研究所の研究生として入所。10 月には所員らにより「九科会」（発起人：山本鼎･倉田白羊）が結成されたが、会友となり、第 1 回展（1926.2.1 ～ 8　日本橋・三越）に油彩画《早春》と白樺巻の木工品《巻莨入》《小物入》4 点を出品。また、1926 年から研究所による出向講習会（長野県小県郡青木村講習会：2.12 ～ 3 週間　講師：中西・村山桂次信濃人形の制作、長野県西筑摩郡鳥居村講習会：11.25 ～ 12.15、長野県下諏訪町講習会：1927.1.20 ～ 2.9　など）の講師も務めたが、1928 年 5 月頃か、研究所の事業縮小・整理（4 月末で研究生制度を中止）のため辞めている。

版画は、1924年頃に「農民美術の講師で木曽福島に来た平塚運一を知ったこともあり、木版画を始めるようになった」（森山明治）というが、その頃すでに版画を手掛け、日本創作版画協会展に出品していた森山収治の影響もあったと考えてよいだろう。ただし、その技法は未熟だったため、研究所入所後の1926年7月上旬には、研究所員の渡辺進とともに鼎の手配した東京の摺り師からバレンの包み方、水・糊の用い方などをみっちり学んだという。1928年1月の第8回日本創作版画協会展に木版画《かすみあみ》《どんどん焼》が初入選。会員に推挙され、2月に大阪で開かれた第8回〔大阪〕展には会員として《どんどん焼》《木曽風景》を出品。4月の第6回春陽会展にも《上田城趾》《少女》が入選。5月には北沢収治らと「淡交会」（長野市）を結成し、展覧会を開催（1934年までか）。翌1929年には第9回日本創作版画協会展に《上田風景》《ロクロ》《子供》、第12回松本美術展に《千曲川》ほか2点を出品。1930年の第2回九科会展（1.24 ～ 28　日本橋・三越）にも版画を出品か。また、中島重太郎の創作版画倶楽部から『風景版画絵葉書　第2輯　諏訪湖の冬』（5枚組）を発表した。1931年1月の日本版画協会の結成に参加（ただし、出品はなく、1937年12月に会員名簿より削除）。4月の第9回春陽会展には油彩画《初冬風景》《木立と皿〔丘〕》を出品したが、これが中央画壇への発表の最後になったようである。また同年の版画誌『きつつき』第3号（創作版画倶楽部　6.28発行）に《蘇民将来》を発表している。なお、1928年から1935年頃にかけて版画頒布会を催したというが、詳細は不明。1935年2月には倉田白羊の漢詩の木版詩集『半人三字文』（自費出版　50部限定）の彫版と摺りを担当した。

1936年からは山本鼎の紹介で、雑誌『キンダーブック』に童画の寄稿を始め、また1940年には山本鼎のごく近い弟子筋の人々の美術団体「催青会」（1938結成）にも参加した。戦後は、1947年に自ら「鹿苑会」を結成し、岡鹿之助を講師として不定期の講演会を続けた。1965（昭和40）年8月9日塩尻で逝去。【文献】森山明治「中西義男」「第8巻関係美術略年表」『長野県美術全集＜第8巻＞信州の水彩画と版画芸術―斬新な才気と多彩な美術運動』（郷土出版社　1993）／山越脩蔵編『山本鼎の手紙』（1971　上田市教育委員会）小崎軍司『夢多き先覚の画家　山本鼎評伝』（信濃路　1979）／『九科会の趣意』『九科会規定』（1925.10）／『九科会第一回展覧会目録』（1926.1）／『日本版画協会々報』24（1938.1）／『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所　2002）／『昭和期美術展覧会出品目録　戦前篇』（東京文化財研究所　2006）／『創作版画誌の系譜』（三木）

中野喜平（なかの・きへい）➡笹島喜平（ささじま・きへい）

中野五郎（なかの・ごろう）

1930年代の静岡では『かけた壺』（1931 ～ 1935）『ゆうかり』（1930 ～ 1934）といった版画同人誌が刊行されているが、同時期には浦田儀一・真澄忠夫らが個性豊かな版画誌『版画座』（1932 ～ 1934）を発行している。中野は創刊当初は参加せず、第2号から参加。第2号（1932.12）に《お蝶夫人》、第3号（1933.1）に《鶏》《画状》、第4号（1933.2）に《静物》《仕事場の友人》、第7号（1933.5）に《久能山風景》《わらび》、第8号（1933.6）に《剣戟ゴッコ》《馬》、第9号（1933.7）に《軍配団扇》、第10号（1933.8）に《お茶とみかんの葉》《かに》、第11号（1933.9）に《山》、第12号（1933.10）に《橋》、第14号（1933.12）に《城内》《画状》と生活に身近なものを題材に取り上げて発表を続けた。第7号の《わらび》については「（竹久）夢二氏にわけてもらうたことがある　わらび三本刻りましたそは榛名のふもとにあるといふ　（中略）五月になれば……あの頃を思ふ」と言葉を添えている。当時、静岡市院内町32に在住。【文献】『版画座』7／『創作版画誌の系譜』（加治）

中野春郊（なかの・しゅんこう）

『木版口絵総覧』（文生書院　2005）によれば「江州の人、本名は中野弘毅、山元春挙門人。重要な作家の口絵を手がけているにしては経歴がはっきりしない画家である」とし、『増補改訂　木版口絵総覧』（文生書院　2016）では、「出版本からみて大阪で活躍した画家と思われる。出版社は嵩山堂が多い。『風俗画報』にも描いている。クラブ化粧品のポスターに元祖「双美人」を描いた」とする。【文献】山田奈々子『木版口絵総覧』（文生書院　2005）・『増補改訂　木版口絵総覧』（文生書院　2016）（岩切）

中野晴司（なかの・せいじ）

明治期に発行された石版印刷業界誌『虹』第1巻6号（1908.7）に石版画《おさらへ》を発表。現在、『虹』は第1巻1号～第3巻6号（1910.6）のうち19号分が確認されている。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

長野正男（ながの・まさお）

徳力富吉郎が主宰する「丹緑会」が発行した版画誌『版・小品集』（丹緑社　1932頃か）に住宅の塀を描いた木版画《〔風景〕》を発表。長野は徳力の指導をうけていたと思われるが、井上豊久・和泉凡・秦徳三などの同人達とは異なり、第3回京都工芸美術展（1931.5　於・植物園・昭和会館）や関西創作版画展（1932.11　於・植物園大正記念館）など展覧会への出品はなかったようだ。（【文献】岡田毅「京都における創作版画の展開」『資料館紀要』12（京都府立総合資料館　1984.3）／『版画堂目録』112（2016.6）（樋口）

中濱慶男（なかはま・よしお）

西田武雄主宰の日本エッチング研究所機関誌『エッチング』第60号（1937.10）にエッチング作品を発表。東京での中学生時代に、エッチング研究所でエッチングを学び始めるが、まもなく関西に移住。大和ストーブに勤務し、練炭ストーブの製作販売に従事する傍ら、エッチングの制作に励む（「研究所通信」『エッチング』62　1937.12）。その後、『エッチング』第73号（1938.11）に「エッチングの鉄筆をとる自分の心理は、限定された微細な存在が宇宙大にある美と理想にあこがれてゐた結果に外ならない」などとエッチングに対する思いや制作態度などを「蛙のうわごと」として寄稿。第74号（1938.12）には「大阪美術家」として研究所製プレス機所有者欄に掲載されている。【文献】『エッチング』60･62･73･74（加治）

長原孝太郎（止水）（ながはら・こうたろう／しすい）

1864 ～ 1930

1864（元治元）年2月16日美濃国不破郡岩手村に生まれる。1877年上京。医学を志して1880年に東京大学予備門に進むが、絵の道に転じて退学。1883年小山正太郎に入門。1895年黒田清輝に就き、翌年第1回白馬会展に水彩画《森川町遠望》のほか「狂画」として水彩画《牛屋》

《焼芋屋》を出品。黒田の推薦で1897年東京美術学校助教授となり、1907年の東京勧業博覧会で油彩画《停車場の夜》が三等賞、翌年の第2回文展に《平和》が入選し、以後官展への出品を続ける。1916年に美校教授。1919年より帝展の審査員も務めた。そうした洋画家としての活躍のかたわら早くから挿絵や漫画・装幀を手がけ、坪内逍遥が1885年より執筆した『当世書生気質』では浮世絵調の挿絵に異を唱え、自ら志願して洋風の挿絵を寄せている（ただし新奇にすぎて不評を買い、2号のみで中断）。1893年には石版刷による漫画誌『とばゑ』を創刊し（1895年の3号まで刊行）、また1896年に森鴎外が創刊した『めさまし草』でも第3巻から36巻までの裏表紙に漫画を描いている。1900年創刊の『明星』でも表紙や木版挿画を数多く手がけ、『方寸』3巻2号（特別漫画号、1909.2）への三コマ漫画《無題》の掲載もある。雑誌の装幀・挿画はほかにも『中央公論』や『白百合』『早稲田文学』などがあり、装幀では森鴎外や島崎藤村らと組み、ブックデザイナーの先駆として数々の優品を世に送った。ここまであげた作例は版画というよりも戯画家としての、あるいは意匠家としての仕事であるが、多くは木版や石版で仕上げられて版の絵の魅力に富む。また自身浮世絵版画も収集していたといい、版に対する意識は高かったといえるだろう。1901年の第6回白馬会展に木版画《乗合船》《暮潮》《動物園、下女》《象》《猫、鶴》を出品した事実もある（『明星』の挿画か）。白馬会でいえば、とりわけ機関誌『光風』に掲載された、長原の水彩を原画とする木版画（彫師伊上凡骨、摺師西村熊吉）がその精美さで注目される。タイトルをあげると1年1号（1905.5）の《月の出》、1年2号（1905.7）の《わか葉》、1年3号（1905.9）の《朝詣》、2年2号（1906.3）の《雪後》である。晩年の1928（昭和3）年には第15回光風会展（特別陳列版画の部）に木版画1点（1902年頃の『明星』挿絵）、石版画1点（1894年頃の挿絵）を出品している。1930（昭和5）年12月1日東京本郷の自宅で逝去。【文献】森口多里「長原孝太郎－そのペン画と漫画－」『明治大正の洋画』（東京堂　1941）／牧野研一郎「長原孝太郎の美術批評」『研究論集』創刊号（三重県立美術館　1983）／『長原孝太郎：日本近代洋画の指導者』（タルイピアセンター・歴史民俗資料館　1995）／岩切信一郎「メディアとしての版画－近代版画揺籃期の考察」『講座日本美術史6 美術を支えるもの』（木下直之編、東京大学出版会　2005）／『長原のブックデザイン～挿絵のチカラ、装丁の美～』（タルイピアセンター・歴史民俗資料館　2007）／『創作版画誌の系譜』（西山）

中原淳一（なかはら・じゅんいち） *1913～1983*

1913（大正2）年2月16日、香川県大川郡白鳥町（現在）に生まれる。幼時からキリスト教の気圏にあり（家族が日本基督教団徳島教会に足を運んだという）、とりわけ横浜の共立女学校に進んでいた姉たちの受けたキリスト教による文化教養が、そのまま中原の制作の核を形作ったといえるだろう。音楽・文学・芸術・編集と多様な才能を持つが、少なくとも音楽の感性、詩の感性はこのキリスト教の気圏の中で醸し出されたものと思える。

1928年美術雑誌によく広告を出していた日本美術学校絵画科に入学。竹久夢二に心酔したのはこの時期だとされている。夢二は、かつての人気は衰えているものの、抒情雑誌『若草』の表紙などで仕事は続けていた時期である。時代としては、絵画だけではなく、藤井達吉や斎藤佳三らの影響で工芸にも時代の趣味が広がった時期にもあたる。中原が刺繍をしたりしたというのはその時代の趣味だといえるだろう。人形も同様だった。1930年17歳で上野広小路にあった高級洋品店のデザイナーとなる。1931年創作人形作家グループ「ＰＫ人形クラブ」に参加。中原の初期のキャリアはこの「人形作家」としてあった。1932年創作人形の個展「第一回　フランス・リリック人形展覧会」（銀座・松屋）で開催、話題となった。その折に取材に訪れた『少女の友』の編集者との話で、同誌に挿絵を描くようになった。人形の展覧会は続いて1933・34年と開催されるが、1934年の人形展は主催が『少女の友』となっている。翌1935年1月から、『少女の友』の表紙絵を描くことになり、名実ともに『少女の友』の顔となった。そんな幸せな時間が5年ほど続くものの、やがて戦争直前のこと、軍部の出版社への干渉と、出版社の自主規制で、1940年6月号をもって表紙絵を降板する。一般的にはこれで中原の仕事が減少したようにみられるが、実際はこの後、中原の多様な仕事が展開されるようになる。

ところで、中原は『少女の友』降板の前年、1939年4月に東京麹町四丁目に淳一グッズの販売店「ヒマワリ」を開店していた。おそらくは憧れた竹久夢二の夢二趣味の小物販売店「港屋」を思い描いてのものだろう。秋、銀座伊東屋六階に「ひまわりの部屋」を開設。1940年にはヒマワリ中野支店を出店。通信販売も始めている。「ヒマワリ」での仕事は、『きものノ絵本　夏のため』（1940）『きものノ絵本　秋から冬へ』（1940）『きものノ絵本　夏』（1941）『きものノ絵本　夏号』（1942）『花の日記』（1940）『子供ノ絵本』（1941）『衣服集』（1942）『皇軍慰問用　花ノ絵葉書』（1942）『慰問絵葉書』『慰問用　国民服絵葉書』（不詳）と続いていた。また、キヨト社から『慰問用うつし絵とシール』『慰問用淳一うつし絵』（不詳）、大阪の日出る国社から『娘絵姿』（不詳）、日本創作社出版部から『少女更生服絵ハガキ』（年不詳）の他、この時代には便箋・絵封筒などさまざまな仕事がある。発行途上の『きものノ絵本　夏』（1941）の最終ページには、「ヒマワリサービス部製品」との記載があるという。おりから、1941年11月には宝塚少女歌劇団の男役トップスター葦原邦子（本名・岡本英子）と結婚する。そんな充実した時の作品だ。1940年『少女の友』の降板は、中原にとってはおのれのさまざまな才能（インテリジェンス）を引き出す好機となった。中原の代表的な木版画作品集『娘十二カ月』が制作されたのは、この時期、1941年のことであった。

木版作品集『娘十二カ月』は、「ヒマワリ」が版元となって制作された。「一か月一枚ずつかいて、会員に届けた」のだという。構成は次の12枚である。《一月　鹿の子帯》《二月　如月の雪》《三月　紅屋》《四月　三味線》《五月　願ひ》《六月　蛍》《七月　七夕》《八月　影》《九月　雨》《十月　浮世絵やの娘》《十一月　鏡》《十二月　雪》。これらは戦時にかけての作品であることから、いずれも和様であるが、竹久夢二が『婦人グラフ』の表紙絵で行った版画作品を思わせもする。『娘十二カ月』は、中原がどう考えていたかは別として、自分の画家としてのイメージの集大成となり、結果的には夢二との決別の仕事となったと言える。中原の作家としての仕事のベースには、多くの抒情系挿絵画家同様に、最初から夢二がいた。1929年の吉屋信子『花物語』シリーズ（『花物語』上下巻、『小さき花々』『わすれなぐさ』など）の表紙は、夢二を思わせるし、『少女の友』の挟み込み付録の楽譜には、セノオ

楽譜の夢二表紙に似ているものもある（第32巻第7号「聖き鈴蘭」など）。そんな中で、『娘十二カ月』は、中原の画家あるいはイラストレーターとしての集大成となるだろう。これを分岐点として、中原は「絵（あるいは、イラストレーション）」から「デザイン」に向かっていったようだ。そして決別した次の仕事として、愛好者の趣味、大衆の支持を受け、独自のデザインの仕事が始まる。「中原淳一」という名のファッション・プレートの時代が始まったのだった。戦後の中原はデザイナーとエディターとで語るべきで、版画で語られる文脈はありそうもない。したがって、戦後については触れない。1983（昭和58）年4月19日逝去。

なお、中原の木版画作品としては、『娘十二カ月』以外に次のものを確認した。《風のたより》《ものをもひ》《つまびき》《をりつる》《むすび文》《雪》、以上は日本創作社版で、現物確認をした《ものをもひ》は、右上に《ものをもひ》、左下に「淳一絵」の版上サイン。台紙に貼り付けられ、台紙裏には「新日本木版協会」のシールと朱印がある。またもう一点「日本木版画工藝協會」のシールも貼られ、「規格」欄に「工藝版画」「小売価格　4円」とされている。これからすると戦時中に作られた「日本創作社版」の在庫が、戦後も売りさばかれていたものと考えられる。さらに小型の木版画『娘姿絵暦』4枚セットで、中原の絵を上に、下には12ヶ月のカレンダーが付いている、発行所は不明。【文献】『没後20年　中原淳一展』図録（横浜市・そごう美術館ほか　2003）／『山田書店古書目録』12（1990.12）／『山田書店新収美術目録』103（2012秋）（山田）

永原　廣（ながはら・ひろし） *1905 ～ 1993*

1905（明治38）年富山県東礪波郡出町に生まれる。彫刻家新海竹太郎に師事。日本美術学校を卒業。公募展へは、1926年の第3回白日会展に彫刻《H の首》が初入選。以後、1939年の第16回展まで毎回出品。その間、第8回展（1931）で白日賞を受賞。会友に推挙され、第10回展（1933）で会員になっている。また、1929年の第10回帝展に《秋》、1931年の第12回帝展に《初秋》が入選したほか、第2回聖徳太子奉賛美術展（1930）、大礼記念京都美術館美術展（1934）、第9回構造社展（1935）などにも出品。1935年の帝展改組後は、第三部会（1935年結成）・国風彫塑会（1940年「第三部会」が改称）を中心に、聖戦美術展第1回展（1939）・第2回展（1941）、大東亜戦争美術展第1回展（1942）・第2回展（1943）、国民総力決戦美術展（1943）などにも出品した。版画は、第13回白日会展（1936）に彫刻《花と娘》とともに木版画《キネマ街》を出品しているが、その他の活動は不明。戦後は郷里の砺波に戻り、1948年の第4回展から日展に出品。後に日展会友となった。1950年の第2回日本アンデパンダン展（主催：読売新聞社）にも出品。また、日展系作家による「日本彫塑家倶楽部」（1953年結成、のち「日本彫塑会」「日本彫刻会」）に属し、1962年の「日本彫塑会北陸支部」発足に際しては、副支部長を務めている。1993（平成5年）富山県砺波市で逝去。【文献】『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所　2002）／『昭和期美術展覧会出品目録　戦前篇』（東京文化財研究所　2006）／『白日会展総出品目録＜第1回～第59回＞』（白日会　1984）／『文展・帝展・新文展・日展　全出品目録　明治四十年―昭和三十二年』（日展　1990）／『日本彫刻会史―五十年のあゆみ―』（日本彫刻会　2000）（三木）

長船一雄（ながふね・かずお）

1936年発足の名古屋エッチング協会（会員8名）の事務局を務める。当時の住所は名古屋市東区杉村町西杉1－12。作品は未見。【文献】『エッチング』47（1936.9）（樋口）

仲町謙吉（なかまち・けんきち） *1920 ～ 2010*

1920（大正9）年12月10日大分県臼杵市大字江無田に生まれる。大分県師範学校を経て、1940年に東京美術学校図画師範科へ入学し、1943年に卒業する。卒業制作の油彩画《深田石仏》が第6回新文展に入選。以後、臼杵石仏を描くことがライフワークとなる。卒業後は佐賀県立佐賀高等女学校に、その後は大分県立大分中学校に勤務。戦後は母校の大分県師範学校で教鞭をとり、1949年からは大分大学に勤務する傍ら、石仏を描き、日展・光風会展を中心に作品を発表。1979年には教育学部長となり、1984年に退官。以後名誉教授となった後は、大分県美術協会会長、大分県芸術文化振興会会長などを歴任し、大分県の美術・芸術の振興に寄与する。その間、1978年に文化庁長官表彰、1994年に勲三等旭日中綬章などを受章。終生、油彩・水彩・素描を制作し、版画も手がけている。2000年と2007年には個展を開催。版画との出会いは、仲町が大分県師範学校に在学していた時期と考えられる。当時、師範学校の教師武藤完一が版画誌『九州版画』（1933 ～ 1941）を発行しており、その第17号（1938.5）「水」特集には木版画《大分城の濠》、第19号（1939.6）にはエッチング《橋のある風景》を発表。2010（平成22）年に逝去。著書に『郷土先覚者シリーズ』第4集「田能村竹田」・第9集「片多徳郎」（大分県教育委員会　1974・1979）がある。【文献】池田隆代「大分県における創作版画誌」（『大分県立芸術会館研究紀要』1　2002.9）／「郷土在住作家展 I 仲町謙吉展」（大分市美術館　2007）（インターネット検索）／金子一夫編『大正・昭和戦前期の中等学校図画教員と出身美術学校の総覧的研究報告書　第2部　滋賀県～在外学校』（金子一夫　2016）／『創作版画誌の系譜』（加治）

永松恒三（ながまつ・こうぞう）

1931年の夏に大分県師範学校で開催された版画教育講習会（講師：平塚運一　8.3 ～ 7）に参加し、版画制作を始める。主宰した武藤完一は、この講習会を機に版画誌『彫りと摺り』（1931 ～ 1933）を創刊。この講習会で永松が制作した《男と女児》はその第1号（1931.9）に掲載され、第2号（1931.11）には《とちかがみ》を発表した。一方、大分市以外からこの講習会に参加した同宿の永松を含めた10人は親睦と版画技術向上のために、版画同人誌『空巣』を発行する。『空巣』という奇妙なタイトルは、講習会のために泊まった部屋が学生のための下宿であり、夏休みで空き巣だったことからの命名である。永松はその第1号（1931）に風景を描いた木版画〔タイトルなし〕を、第2号（1931.12）に《水ほゝづき》を発表するが、『空巣』はその後、4号で休刊。1931年当時、大分県下毛郡桜洲尋常小学校に勤務。【文献】「創作版画講習会其他版画展等」『郷土図画』（1-5　1931.10）／池田隆代「大分県における創作版画誌」（『大分県立芸術会館研究紀要』1（2002.9）／『創作版画誌の系譜』（加治）

中丸忠雄（なかまる・ただお）

東京府下野方の沼袋にあった日本印刷学校の版画研究会は「常に印刷に関はってゐる関係上、石版、銅版など復興的な仕事をやってゐますが、創作の上にもい、作

品、作者が現れること、信じます」という思いで、『日本印刷学校　創作版画作品集』を発行する。その第2輯（1932.3）に≪エキス・リブリス≫を発表。創刊号は未見。『版画 CLUB』4年3号（1932.3）の「新刊紹介」欄において、評者藤森静雄は「大変いいものである」とこの版画同人誌を高く評価している。なお、「日本印刷学校」は社会教育者であり社会運動家の希望社・後藤静香が勤労教育実践のために印刷技術者の養成学校として設立したもの。【参考文献】『日本印刷学校　創作版画作品集』2／「勤労女学校や印刷学校も設立した希望社の後藤静香」（インターネット検索『神保町系オタオタ日記　2016-09-23』）（加治）

中溝フジ（なかみぞ・ふじ） *1889 ～ 1950 ?*

1889（明治22）年1月17日福井県に生まれる。「フジ」は通称か。ニューヨークのアート・ステューデンツ・リーグ及びクーパー・ユニオン・アート・スクールに学ぶ。1934年ニューヨークのモントロス・ギャラリーで個展を開催の他、アリゾナ・フェアー（1927）、ペンシルバニア・アカデミー（1934）、邦人美術展覧会（ACA ギャラリー ニューヨーク　1935）、ニューヨーク・ワールドフェアー（1939）、ワシントン・ナショナル・ギャラリー（1941）、ザ・ライブラリー・オブ・コングレス（1945）、日系米国人美術家展（リヴァーサイド美術館　1945 or 1946）、ナショナル・アカデミー・オブ・デザイン（1946）などのグループ展に出品、画家・工芸家・版画家として活動する。版画の制作は、《紅葉と牛小屋（コネチカット・リッジフィールド）》（1927）《ニューヨーク・シテイー》（1944）のほか、年代不詳の《〔室内風景〕》《〔夜の橋〕》のエッチング作品が知られる。1950（昭和25）年頃逝去か。【文献】『アメリカに生きた日系人画家たち　希望と苦悩の半世紀 1896 － 1945』展図録（東京都庭園美術館　1995）／『版画堂目録』34（1996.12）／『20世紀物故洋画家事典』（美術年鑑社　1997）（樋口）

中村兄彦（なかむら・あにひこ）

1927（昭和2）年当時、京都市安井小学校の教員で、美術雑誌『アトリエ』創作版画号（第5巻第1号　1927.12）に木版画《風景》が掲載される。また同号に「子供と版画」を寄稿。その一部を引用すると、「神戸の山口〔久吉〕のおぢさんから版画集を買つて子供に見せてやつたのは悪戯の盛に流行したことから考付いてであった。子供は面白さうに集つて見てゐた。印刀が子供に渡されスクヒ刀や三角刀も光つて來た。（略）版画スケツチに圓山公園や建仁寺や高臺寺の林などに連れて行つた。（略）小さいスケツチブツクは到る所の寫生で充たされ、私の前へ積上げられた。（略）ルーラーと石盤と謄寫用肉が用意されて生漉の和紙が子供達の机上に配られた。（略）桂の版木が布上に置かれて、バレンの音がかさかさと教室に鳴る。小さな彫師は今摺師になつてゐた。（略）子供は版画に對して非常な興味を持つて作つていつた。（略）河合〔卯之助〕先生が二日間に亘つて其中からいゝものを選び出して下さつた。河合先生のお家から先生の陶画集永瀬さんの版画、戸張さんのも平塚さんのも等々日本の創作版画家の人々の作品、新年の木版絵葉書等が借り受けられて藝術味のゆたかな参考室も出来、私の学校に子供の版画展覧会が催された。（略）それが一般に公開されたのが昨年〔1926〕の三月であつた」と昭和初期に京都の小学校で行われていた版画教育の様子を記している。また1932年に毎日新聞京都支局主催、市教育部・京都創作版画協会後援のもとに開催された「〔京都〕全市学童創作版画実技講習会」では指導員の一人として実技指導を行っている。【文献】『アトリエ』5 － 1（1927.12）／岡田毅「京都における創作版画運動の展開」『資料館紀要』12（京都府立総合資料館　1984.3）（樋口）

中村　岳（仲蔵）（なかむら・がく／なかぞう） *1909 ～ 1992*

1909（明治42）年、静岡県小笠郡大須賀町（現・掛川市）に生まれる。本名を仲蔵という。静岡郵便局に勤務するかたわら版画制作を試みる。1929年7月に私家版で、詩と版画『有加利樹』（名称は、通勤途上にあったゆうかりの木から取ったと言われる）を謄写版印刷によって刊行する。同年8月には栗山茂、小川龍彦らと「童土社」を創立し、10月の「童土社同人　第1回童土社創作版画展覧会」に《小学生》《風景》など17点を出品。最終の1942年の第13回展まで出品を続ける。同年12月には『再刊　有加利樹』（第3輯まで続く）を刊行する。1930年には栗山茂が主宰する版画同人誌『艸笛』に作品を発表するなどして、彼らとの交流を温めて行く。1931年には静岡県の創作版画運動の骨格をなす版画同人誌『ゆうかり』が、編輯兼発行人に小川龍彦を据え刊行し、第30号（1935.8）を以て刊行を終える。第27号（1935.4）以外は滞ることなく継続的に作品を発表し続けた他、「展評」「あとがき」などを執筆する。とりわけ表紙については半分を担当するなど本誌への係りの深さを示す。1931年には「童土社」とも関係が深い「白と黒社」の料治朝鳴が主宰する『白と黒』（第1次）の第11号（1931.2）から第23号（1932.4）に作品を発表する。更に料治によって1932年に創刊された『版芸術』第1・6・9号（1932.4・9・12）にも作品を発表した他、中川雄太郎が主宰する『かけた壺』第17・18・20・22号（1933.12 ～ 1934.6）、平塚運一編集の『きつつき版画集　昭和18年版』（1943）に作品を発表する。展覧会は、1933年の第8回国画会展に《石炭場》が入選。日本版画協会展は、1938年の第7回展に《緑衣童女》《海辺静物》が初入選。その後も第8回展（1939）に《夏》、第9回展（1940）に《春の賦》《赤い帽子の少女》を出品し、1944年には同会会友に推挙された。この間、1938年第4回静岡県美術協会展に出品した他、1942年には平塚運一を中心とするきつつき会企画の「きつつき会版画展」第1・2回（1943）展に出品している。中村岳の創作活動は基本的には静岡県内を中心に活躍し、作品は具象画による人物・風景・静物を描く一方、恩地孝四郎の影響を受けた抽象画も好んで描いている。1944年には野戦郵便局勤務のためにビルマ方面に派遣され、1946年に帰還。1948年の「静岡県版画協会」創立に参画。また「第2回静岡県美術展」に於いて知事奨励賞を受賞。その後も静岡県版画協会会員ではあったが、次第に創作活動から距離を置くようになる。1992（平成4）年11月24日静岡市に於いて逝去。【文献】『版画　第45回記念』展図録（静岡版画協会　1980）／『静岡の創作版画』展図録（静岡県立美術館　1991）／『栗山茂版画』展図録（島田市博物館　2000）／『創作版画誌の系譜』（河野）

中村岳陵（なかむら・がくりょう） *1890 ～ 1969*

1890（明治23）年3月10日静岡県下田に生まれる。本名恒吉。1900年に上京し、1902年野沢堤雨に琳派を、1904年川辺御盾に学んだ後、1908年東京美術学校選科に入学すると共に、「紅児会」に参加する。1911年内国勧業

博覧会に《薬草狩》を出品し三等賞を受賞、翌年の第6回文展に《乳糜供養》で入選する。1914年今村紫紅等と「赤曜会」を結成すると共に、再興院展第1回に《緑蔭の饗筵》で入選、翌年《薄暮》を出品し、同人に推挙され、以後、1943年の院展第30回まで出品する。1935年の帝展改組で参与として参画する。1949年には日展運営会理事に推挙され、翌年院展を脱退し、日展第6回展に《気球揚る》を出品、以後日展の重鎮の一人として存在する。1962年には文化勲章を受章し、同功労者となる。生涯にわたって多彩・多様な作品を発表し続ける。木版では、1930年山口蓬春・福田平八郎・石川寅治・中川紀元・牧野虎雄・木村荘八と結成した六潮会による『六潮版画"風"』（銀座三昧堂　1936）に伝統的な多色木版《春の微風》を寄せたほか、『現代名家素描集　第10輯（中村岳陵自選　植物篇）』（芸艸堂　1940）、『四天王寺壁画　中村岳陵木版画秀作撰』（毎日新聞社　1980）等がある。1969（昭和43）年11月20日神奈川県逗子市で逝去。【文献】『日本美術年鑑』昭和45年版（東京国立文化財研究所　1970　東文研アーカイブデータベース）（森）

中村亀次（なかむら・かめじ）

長野県安曇郡の小学校教師たちは、教育者・版画家として活躍していた郷里の先輩武田新太郎を顧問に迎えて黄樹社を組織し、版画誌『黄樹』（1937～1938）を発行した。その創刊号（1937.3）の会員名簿に掲載されているものの、版画の発表はない。当時、北安曇郡七貴小学校に勤務。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

中村　清（なかむら・きよし）

1931（昭和6）年1月に前田藤四郎、大阪桜宮小学校の教員島田要らと創作版画のグループ「羊土社」を結成。木版画を手掛ける。6月に版画誌『羊土』の第1輯（6.6発行）をまとめ、《扉　カット》《人物》（単色）《風景》（多色）を発表。翌1932年は6月の第2回日本版画協会展に《風景》を出品し、初入選。12月には『版芸術』第9号（12.1発行）「大日本版画家年賀状百人集」に《年賀状》、『羊土』第2輯（12.10発行）に《スペインの踊》《海岸風景》を発表した。なお、『羊土』は1933年にも第3輯をまとめたようであるが、詳細は不明。その後、1935年の第4回日本版画協会展に《寧楽、浅茅ヶ原》が入選。小野忠重は、「中村清氏の「浅茅ヶ原」は仕上げの美しさを考へる真摯な態度に好感を持てる」（「日本版画協会米国準備展の現代版画について」『みづゑ』37）と評している。翌1936年の羊土社版画展（4.15～21　大阪・金子彩陽堂）にも出品か。なお、1937年8月に広島で開かれたエッチング講習会（8.2～6　広島第一高等小学校　講師：西田武雄・武藤完一）の参加者名簿に「広島市己斐小学校　中村清」の名があるが、同一人である可能性もある。【文献】『昭和期美術展覧会出品目録　戦前篇』（東京文化財研究所　2006）／『みづゑ』37（1935.12）／『日本美術年鑑』昭和12年版（美術研究所　1937）／『エッチング』59／『創作版画誌の系譜』（三木）

中村研一（なかむら・けんいち） *1895～1967*

1895（明治28）年5月14日福岡県宗像郡南郷村光岡に生まれる。弟は洋画家の中村琢二（1897～1988　日本芸術院会員）。1914年福岡県立中学校修猷館を卒業。京都に出て、鹿子木孟郎の内弟子となる。1915年上京し、本郷洋画研究所に学ぶ。同年東京美術学校西洋画科予備科に入学。1916年父に代々木初台のアトリエを新築してもらう。学校では岡田三郎助に学び、在学中の1919年に第8回光風会展に初入選。1920年同校西洋画科を卒業。卒業後は帝展に出品し、第2回展に初入選。同年小倉の野砲連隊に入隊するも翌年除隊。1921年の第3回展で特選を受賞し、1922年からは無鑑査出品。1923年渡仏。一時帰国（1926）を経て1928年まで滞在。その間、1927年にサロンドートンヌ会員となった。帰国後は再び帝展に出品し、1928年の第9回展と1929年の第10回展で特選を受賞。続く1930年の第11回展で帝国美術院賞を受賞し、官展系の作家としての地位を確立。また、1929年には光風会会員となり、翌年から出品。1931・32年の帝展、1936年の文展、1937・38・43年の新文展の審査員を務めたほか、1942年の第1回大東亜戦争美術展に出品した《コタ・バル》では朝日賞を受賞した。

版画は、美術学校在学中の1916年春頃に、製版科の主任教授結城林蔵と助教授伊東亮次による西洋画科在学生のためのエッチング講義が1学期間あり、受講。卒業年の1920年に開いた個展（10.20～24　神田・流逸堂）に油彩画19点のほか、エッチング《早春》など7点を出品した。その後、フランス留学から帰国した翌年（1929）12月の「洋風版画会」結成に参加し、1930年5月の第1回展に出品（作品名などは不明）。1931年7月の第2回展には素描1点を出品したが、1932年5月の第3回展は不出品だったようである。また、1931年1月の「日本版画協会」の結成に参加。9月の第1回展に石版画《プロフィル》を出品。12月には版画協会がフランス展の準備資金の一部に充てるために企画した「自画石版頒布会」のために《鏡の女》を提供した。その後、1933年9月の第3回展に石版画《鏡の女（新作）》、1934年2月にパリで開かれた「日本現代版画とその源流」展に石版画《鏡の女》を出品。その後の出品はなく、1942年6月の会員名簿には名前が記されているが、その後自然退会したようである。

1945年空襲により代々木のアトリエを焼失。それまでの作品をほとんど失う。戦後は都下小金井町に移り、日展・光風会展に出品。日展審査員・参事・理事などを務める一方、1950年には日本芸術院会員に推挙されている。1967（昭和42）年8月28日東京都で逝去。1989年には遺族により敷地内に「中村研一記念美術館」（現・中村研一記念小金井市はけの森美術館）が開館した。【文献】後藤耕二編「中村研一・琢二略年譜」『中村研一／琢二　画家日記』宗像市史資料編　別巻（宗像市　1995）／『中央美術』6-12（1920.12）／草光信成「回顧」『エッチング』42（1936.4）／『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所　2002）／『昭和期美術展覧会出品目録　戦前篇』（東京文化財研究所　2006）／『資生堂ギャラリー七十五年史　一九一九～一九七四』（求龍堂　1995）（三木）

中村正三（なかむら・しょうぞう）

1937年、東京の城東小学校で開催された日本橋区教育会主催による木版画講習会（講師：平塚運一　11.25～29）に参加。講習会の記念に発行された版画集『日本橋版画』の第1号にあたる講習会記念号（1937.12）に《花》、第2号（1938.1）に《景色》を発表。教師対象の講習会だったことから、当時は日本橋区の教職についていたと考えられる。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

中村二郎（なかむら・じろう）

1932（昭和7）年の第10回春陽会展に《静物》〔木版画〕を出品。なお、春陽会目録には版画とは記されていないが、

展示された第10室は版画・素描を集めた部屋であり、目録の並び順（255・256＝武田由平、257＝内田静馬、258＝中村、259＝逸見享、260＝琴塚英一）から考えて版画と判断した。【文献】『春陽会第十回展覧会目録』（1932）（三木）

仲村親行（なかむら・しんこう）

大分の武藤完一が発行した版画誌『九州版画』第24号（1941.12）に掲載の会員名簿に名前があるものの、版画の発表はない。当時、徳島市住吉島本町　福永方に在住。【文献】『九州版画』24（加治）

中村善策（なかむら・ぜんさく） *1901 ～ 1983*

1901（明治34）年12月29日北海道小樽に生まれる。1916年海運会社に就職後、小樽洋画研究所に学び、1924年上京し川端画学校に学ぶ。1925年第12回二科展に油彩画《風景》が入選、1936年第23回二科展に《白い燈台》《独行船》を出品し、二科特待賞を受賞する。翌年一水会創立に参加し、奨励賞を受賞し会員となり、以後、同展に出品。安井曽太郎の影響を受ける。1936年新文展に《豊穣》を無鑑査出品し、戦後は一水会と日展を中心に出品し、1973年には日展常務理事を務める。明るい穏やかな北海道や信州の風景画を描いた。版画には、一水会の季刊誌『丹青』（第2巻第2号　1939）に《湖畔》（木版）が収録。また原画を基にした《風景》等の多色木版も制作されている。1983（昭和58）年4月27日東京で逝去。【文献】『日本美術年鑑』昭和59年版（東京国立文化財研究所　1986東文研アーカイブデータベース）（森）

中村洗石（なかむら・せんせき） *生没年未詳*

『木版口絵総覧』（文生書院　2005）で「富岡永洗の弟子であるらしい。経歴ははっきりしないが挿絵画家としての名前は処々で見つけることが出来た」とする。【文献】山田奈々子『木版口絵総覧』（文生書院　2005）・『増補改訂　木版口絵総覧』（文生書院　2016）（岩切）

中邨善太郎（なかむら・ぜんたろう）

1929（昭和4）年に横浜で創刊された版画誌『きくづ』（1929 ～ 1931 ？）の同人。現在確認されているもののみではあるが、同誌第2号（1929.12）に《南京街の裏にて》、第3号〔羽子板双紙〕（1930.1）に《凧あげ》《カット》、第4号（1930.2）に《自画像》、第10号（1930.8）に《立ばなし》、第2巻第1号（1931.1）に《山手風景》《麦藁帽の男》《居留地風景》と文「忘れられないムンクの版画」を発表。また、水彩画も手掛け、1929年に結成された「横浜水彩画協会」（6月頃か）の創立にも参加している。中央展へは、1930年1月の第7回白日会展に水彩画《弘明寺附近の梅林》と版画《南京街裏にて》《無題》を出品したのが最初のようであるが、翌1931年には1月の第8回白日会展に水彩画《山ノ手残雪》、《港裏ノ通り》（水彩か）、2月の第18回東光会展に木版画《信濃風景》、5月の第18回日本水彩画会展に水彩画《山手初夏》、9月の第1回日本版画協会展に木版画《山手の午後》と精力的に発表している。1932年の第19回日本水彩画会展で「レートン」賞を受賞。会員に推挙され、1935年の第22回展まで水彩画やテンペラ画を出品（ただし、第19・21回展目録は未確認）。また、構造社展にも1933年の第7回展から出品。旧構造社絵画部の立ち上げ展である1937年の新構造社第10回展で会員に推挙されたが、その後の活動は不明。ただし、日本水彩画会は1937年5月、新構造社は1937年12月頃の会員名簿に名前が掲載されているので、その頃までは所属していたと思われる。なお、1931年から1937年頃までの住所は「横浜市中区住吉町6丁目68番地」である。【文献】『みづゑ』294（1929.8）・183（1937.1）／『白日会展総出品目録＜第1回～第59回＞』（白日会　1984）／『二十周年記念日本水彩画会展覧会目録』（1933）／『日本水彩画会展覧会第二十二回展目録』（1935）／『日本水彩画会年鑑　昭和九年版』（日本水彩画会　1934）／『昭和期美術展覧会出品目録　戦前篇』（東京文化財研究所　2006）／『創作版画誌の系譜』（三木）

中村大三郎（なかむら・だいざぶろう） *1898 ～ 1947*

1898（明治31）年3月21日京都市に生まれる。1916年3月京都市立美術工芸学校を卒業し、4月京都市立絵画専門学校に入学、西山翠嶂に師事する。在学中の1918年第12回文展に日本画《懺悔》が初入選、翌1919年3月同校本科を首席で卒業し、同年第1回帝展から同展に出品を続け（第2回展と第4回展で特選）、新鋭画家として注目される。1925年24歳で母校京都市立絵画専門学校助教授に任ぜられ、翌1926年西山翠嶂の長女・都由子と結婚。同年第7回帝展に妻をモデルに描いた《ピアノ》を出品し帝国美術院賞候補となる。その後は新文展招待など官展系画家として活躍、帝展や新文展の審査員なども度々務める。1936年京都市立絵画専門学校教授に就任、没年まで後進の指導にあたる。近世・現代風俗の美人画を得意とした。1947（昭和22）年9月14日、50歳で急逝。版画は、京都の若手日本画家22名による木版画集『新進花鳥画集』（マリア画房　全36図　1931 ～ 33）に《鹿子百合》1図を制作。【文献】『近代日本美術事典』（講談社1989）／『大正シック展』図録（東京都庭園美術館ほか2007）（樋口）

中村忠次（なかむら・ちゅうじ）

明治期に発行された石版印刷業界誌『虹』第1巻1号（1908.2）に石版画《梅》、第1巻6号（1908.7）に石版画《帰省（避暑）》《炎暑》《夕立》《海水浴》を発表。また第1巻10号（1908.11）の石版表紙絵と第3巻1号（1910.1）の石版画《甲州御嶽新道虹の滝》では図案と製版を担当する。なお、第1巻6号（1908.7）では「中村忠」となっているが、絵柄から同一人と判断。現在、『虹』は第1巻1号～第3巻6号（1910.6）のうち19号分が確認されている。【文献】『虹』1-1 ～ 3-1 ／『創作版画誌の系譜』（加治）

中村仲蔵（なかむら・なかぞう）→仲村　岳（なかむら・がく）

中村　彝（なかむら・つね） *1887 ～ 1924*

1887（明治20）年7月3日茨城県水戸に生まれる。1901年名古屋地方陸軍幼年学校へ入学するが、肺を病む。1904年に同校を卒業し、東京の陸軍中央幼年学校に移ると同時に退学。その後、洋画家を志し、1906年白馬会菊坂研究所に入所。間もなく溜池研究所に移り、中原悌二郎・鶴田吾郎を知る。翌1907年太平洋画会研究所に移り、1908年の第6回太平洋画会展に初入選。翌年の第7回展の《自画像》で奨励賞を受賞。会員に推挙され、その後も第8 ～ 10・12回展（1910 ～ 12・1915）に出品した。また、文展・帝展へは、闘病をはさんで8回出品したが、初入選の1909年第3回文展で褒状を受けたのを皮切りに、第4回展（1910）・第5回展（1911）・第8回展（1914）

で3等賞、第9回展（1915）で2等賞、第10回展（1916）の《田中館博士の肖像》で特選と受賞を重ね、1920年の第2回帝展には生涯の代表作となる《エロシェンコ氏の像》（重要文化財）を出品したが、1924年の第5回展が最後の出品となった。1924（大正13）年12月24日東京で逝去。短い生涯ではあったが、病苦と闘いながら、レンブラント、ルノアール、セザンヌ、ゴッホ、エル・グレコなどの西洋絵画を研究･融合した独自の作品は、発表時だけでなく、今日においてもなお高い評価を得ている。

彝の版画に関する資料は乏しい。没後の1925年6月に福島で開かれた第4回福島洋画会小品展（27 ～ 29　福島県商品陳列所）に会員外作品として《自画像（版画）（中村氏最後の自画像）》が出品されているが、この出品は彝と交友のあった渡辺光徳によるものと思われる。また、12月には中村彝氏作品版画展（11 ～ 13　学水画房）が開かれているが、この展覧会の詳細は不明。作品としては、友人だった保田龍門旧蔵の銅版画《〔若き男〕》（8.9 × 6.9㎝）《〔若き女〕》（12.6 × 8.9㎝）《〔筆を持てる男〕》（17.8 × 13.4㎝）の3点が和歌山県立近代美術館に伝わっている。【文献】『第四回福島洋画会小品展覧会出品目録』（1925）／藤本陽子編「中村彝年譜」『歿後六十年記念　中村彝展図録』（三重県立美術館・神奈川県立近代美術館　1984）／三木哲夫「保田龍門旧蔵の3点の銅版画について」『生誕100年記念　中村彝･中原悌二郎と友人たち』展図録（茨城県立近代美術館他　1989）／村山鎮雄『福島の近代美術』（三好企画　1992）（三木）

中村 欽（なかむら・ひとし）

静岡では版画仲間が意気投合し、版画のグループ「童土社」を組織する。その同人の栗山茂の紹介で、1932年に第4回童土社創作版画展覧会（5.7 ～ 9　静岡市呉服町すみや楼上）に《よぼり（ママ）》《風景》を出品し、童土社同人となる。第5回展（1933.8.19 ～ 22　静岡市松坂屋画廊）には《大島元村》《伊豆遠望》《アンコ》の3点を、第6回展（1934.9.22 ～ 25　静岡・田中屋）にも作品を出品するが、詳細は不明。その童土社は版画展を開催する一方、版画と文芸の同人誌『ゆうかり』（1931 ～ 1935）を発行する。その第7号（1932.3）に《風景》、第10号（1932.9）に《相良の砂丘》、第13号（1933.2）に《冬の草原》、第15･16合併号に《牛》を発表。その後も第22・24 ～ 26・29号を除いて最終号となった30号（1935.8）の《女》まで毎号発表を続ける。また静岡で文芸同人誌として出発した中川雄太郎編『かけた壺』（1930 ～ 1934）は第14号（1931.11）から本格的に文芸と版画の同人誌として活動を始めるが、その第15号（1932.1）に詩を、第20号（1934.4）には木版画《襟巻》、第21号（1934.5）に《海》、第22号（1934.6）に《雉》を発表している。当時、静岡県小笠郡で教職に就き、小笠郡掛川町神明文化村に在住していた。木版画《襟巻》には「Kin」とサインあり。【文献】『静岡県版画協会　第50回記念版画集　－県版画50年の歩み－』（静岡県版画協会　1985）／『静岡の創作版画』展図録（静岡県立美術館　1991）／『創作版画誌の系譜』（加治）

中村弘志（なかむら・ひろし）

小杉寛・中村たゞを・加藤義夫らが発行した短歌の同人誌『橄欖樹』（三宅勇編集兼発行人　橄欖樹社発行所　1 ～ 4号まで確認　1915.4 ～ 7）の第1巻第4号（1915.7）の裏表紙に自画自刻の木版画を《羊歯》を制作（表紙は長谷川潔画）。【文献】寺口淳治・井上芳子「大正初期の雑誌における版表現－『月映』誕生の背景を探って－」『大正期美術展覧会の研究』（東京文化財研究所編　2005）（樋口）

中村裕彦（なかむら・ひろひこ）

1939（昭和14）年の造型版画協会第3回展に木版画《青の風景》《茶の風景》、翌1940年の第4回展に木版画《街》を出品。1939年の出品時は横浜に住む。【文献】『造型版画協会第三回展目録』（1939）／『造型版画協会第四回展目録』（1940）（三木）

中村不折（なかむら・ふせつ） *1866 ～ 1943*

1866（慶応2）年7月10日江戸京橋東湊町に生まれる。名はもと鉾太郎、のち画号の「不折」に改名。1870年長野県の高遠に移り、上京するまで同地や伊那・松本・諏訪・飯田に過ごす。呉服店への奉公や菓子職人修業、小学校の教諭などを遍歴するかたわら真壁雲卿に南画を学び、洋画を独習。1887年には長野町で河野次郎に洋画を学んでいる。1888年上京、小山正太郎の不同舎に入門。1890年の第2回展より明治美術会展に出品して次第に名を知られるようになり、1900年のパリ万博に送った《紅葉村》が褒状獲得。1901年渡仏、はじめラファエル・コランに、翌年からジャン＝ポール・ローランスに師事。1905年に帰国、翌年の第5回太平洋画会展に《八重の潮路》などを出品。1907年、東京勧業博覧会に出品した大作《建国粛業》が一等賞牌となるも、白馬会寄りの審査に抗議して返還。同年第1回文展審査員となり、以後官展と太平洋画会展を主な舞台に活躍、独自の歴史画を発表し続けた。1919年帝国美術院会員、1929年太平洋美術学校初代校長、1937年帝国芸術院会員。また書道を極め、書道資料の貴重な収集でも知られ、1936年には自ら書道博物館（現在の台東区立書道博物館）を開館した。一方、版の仕事も多く、若い頃には三間印刷の石版画の色つけや石版名所風景を手がけ、1890年頃より石版による図画教本を制作。長く続けたのは新聞の木版コマ絵で、1894年に浅井忠の紹介で正岡子規との親交が始まり、『小日本』での仕事に着手している。翌年には日清戦争に画工として従軍、戦地から朝鮮半島を広く巡り、そのスケッチの数々が紙上を飾った。1896年からは『日本』に、1905年以降は『東京朝日新聞』に場を移して描き続け、東京朝日を退社する1923年頃までに膨大な作品を残す。洋画の描法を基本に略筆で対象を捉える画風は好評をもって迎えられ、1934年には新聞挿絵を集成した『不折山人写生帖』『十二支帖』を出版している。雑誌の装幀・挿画では『めさまし草』や『ホトトギス』、『新小説』、『文藝倶楽部』、『馬酔木』、『中学世界』、『少年世界』、『帝国文学』など、こちらも夥しい数に上る。特に『ホトトギス』は子規とのつながりから縁が深く、作例も多い。書籍の装幀・挿画では、1894年に刊行された志賀重昂『日本風景論』に第3版より挿絵を寄せ、島崎藤村の『若菜集』『一葉舟』『落梅集』の表紙絵を担当。ほかにも大橋乙羽『欧山米水』や夏目漱石『吾輩ハ猫デアル』上編、同『漾虚集』、土井晩翠『東海遊子吟』などに挿画を寄せた。また明治末の翻訳物（博文館のシリーズ「世界歴史譚」など）や凸版印刷の略歴などの仕事もあり、挿画は多く石版で印刷されて美しい。自著には1909年の『俳画法』（俳句：河東碧梧桐）や1910年に始まる『不折画集』、1915年の『現代俳画集 春之部』（共著）などがあり、これらは瀟洒な木版による。1928年の第15回光風会展に1909年の《暦》

（石版）2点、1918・9年頃の《戸隠紀行》1点の出品歴があり、また1936年に太平洋画会のメンバーが結成した日本新版画協会から木版画《信州下伊那郡天龍峡之景》を版行している。版の仕事はいずれも、とりわけ初期のものは生計の手段という意味合いが強いが、1905年に執筆した「日本の木板」では台頭する機械印刷と衰退しつつある手仕事の版画にふれ、機械にも利点はあるが手仕事には手仕事ならではの趣味や美があり、日本特有の手工の美（具体的には木版術）も残すべきだとの見解を披露している。多くは「複製」に分類されるものであろうが、技法の限界や特質をよく理解し、想定したうえでの良質な仕事といえよう。1943（昭和18）年6月6日東京都下谷区上根岸にて逝去。【文献】中村不折「日本の木版」『學燈』9巻3号（1905.3）（初出は『日本新聞』）／『日本美術年鑑（昭和19、20、21年版）』（国立博物館編　美術出版社　1949）／『画家・書家 中村不折のすべて』（台東区立書道博物館蔵品選集　2013）（西山）

中村武平（なかむら・ぶへい）

1922年3月に東京美術学校西洋画科を卒業。1924年から1934年3月までは柳川の中学伝習館で、1934年6月から1943年頃までは県立長崎中学校の図画教師を勤めている。当時の長崎では郷土を愛する詩人や版画家が集まり「版画長崎の会」を組織し、版画・文芸同人誌『詩と版画』（1934.2）を創刊。第2輯からは『版画長崎』（1934～1935）と改題して巻号を継承する。その第5輯（1935.8）に木版画《ある街》を発表。長崎の上西山町78番地に在住。【文献】金子一夫編『大正・昭和戦前期の中等学校図画教員と出身美術学校の総覧的研究報告書　第2部　滋賀県～在外学校』（金子一夫　2016）／『エッチング』91（加治）

中村正臣（なかむら・まさおみ）

北海道名寄中学3年生在学中、西田武雄が主宰する日本エッチング研究所の機関誌『エッチング』第91号（1940.6）に松林を描いたセルロイド版の作品（題名不詳）が掲載された。当時、名寄中学校（現・北海道立名寄高等学校）には版画教育に熱心な松田操教諭がおり、自身銅版画を制作する一方で、セルロイド版を使って生徒への指導も行った。また、西田や小野忠重などを講師に招いて版画講習会も開催。『エッチング』にはその講習会の受講記や随筆などを寄稿している。中村は松田教諭の教えを受けて、セルロイド版を制作したものであり、「研究所通信」には「松田操先生から生徒の作品を沢山送って来られた」と書かれていて、中村の作品もその中の1枚である。【文献】松田操「名寄講習日記」『エッチング』70（1938.8）／金子一夫編『大正・昭和戦前期の中等学校図画教員と出身美術学校の総覧的研究報告書　第1部　直轄地～三重県』（金子一夫　2016）／『エッチング』91（加治）

中村義雄（なかむら・よしお）

北海道根室に生まれる。同地でプロテスタントの家に育つ。ウィリアム・ブレイクの『ヨブ記』（銅版画集　1825）に熱中した時期があったとされる。油彩画を制作していたが、1923（大正12）年頃に版画制作を中心に創作活動を展開させるようになる。その際、木口木版画に興味をもったが制作せず、エッチングやドライポイント、アクアチント、メゾチントを駆使した銅版画、石版画、木版画の制作へと向かった。1928年、それらの版種の作品を収める版画集を発行した。翌1929年東京市外下北沢に「創作版画工房」を創設し石版画、銅版画の設備を整えて指導した。1931年12月にはそれまで制作した版画の個展（5～9　神田・文房堂画廊）を開催した。深水正策はそのときの展覧会評で次のように記している。「「死と埋葬」から田園風景に移った彼の動きは全く面白い。／彼の風景画には武蔵野の春と秋とが実にリリカルに広重の版画を思はせるアクワチントがある。赭土の丘、夏草の茂、凡て柔から温かい自然の姿が選ばれてゐる。／その一面に、グロテスクな老木が蛇のやうにクネツてゐる／約(よ)百(ぶ)記『雅歌』ヨハネ黙示録の彼と田園風景のリリシズムとが如何なる発展をするか。」（『みづゑ』323）。個展の翌1932年の6月に、文房堂でブブノワ・河邊梅村・深水正策と「素描と版画展」を開催、フェレンツ・モルナールの戯曲「リリオム」に取材した石版画10点を出品した。展評で、黒田呵雪に「物語と作者と、その技巧とが之ほどぴつたりと融け合つて統一されたものは他に余り類がない」（『みづゑ』330）と評される。1935年杉並区堀の内1丁目にアトリエを新築し、「中村版画研究所」と名称を変えて引き続き石版画と銅版画を指導する。主要な美術団体への出品が確認できず、戦中から戦後の活動については不詳。【文献】『みづゑ』323（1932.7）・330（1932.8）（滝沢）

中村理想（なかむら・りそう）

日本各地の版画同人誌に作品を発表していた長野県須坂の小林朝治は、平塚運一を講師に招いて開催した「版画及び図画講習会」（須坂小学校）を契機に「信濃創作版画研究会」を立ち上げ、1933年8月に版画誌『櫟』（1933～1937）を創刊。当時、更級郡塩崎小学校に勤務していた中村は、その第2輯（1934）に《賀状》、第3輯（1934.7）に《堀添》、第8輯（1935.12）に《寒夜》、第9輯（1936.4）に《賀状》、第12輯（1937）に《賀状》、第13輯（1937.6）に《海辺》を発表した。第2輯の賀状では本名と思われる「中村利相」の名を使用している。【文献】『須坂版画美術館収蔵品目録2　版画同人誌「櫟」「臥竜山風景版画集」』（須坂版画美術館　1999）／『創作版画誌の系譜』（加治）

中村瞭一（なかむら・りょういち）

1929（昭和4）年に静岡で開かれた「童土社同人第一回創作版画展」（10.5～7　静岡・田中屋襯衣店）に木版画《丘》を出品。【文献】『童土社同人第一回創作版画展覧会出品目録』（1929）（三木）

中本桃代（なかもと・ももよ）

1936年頃の山口県宇部高等女学校では図画の時間に、エッチング制作を行なっていた。しかし一週あたり1時間という少ない時間であったため、1枚のエッチング作品を完成させるためには2ヶ月という時間がかかった。3年に在学中の中本は、人々の住んでいる家々を題材に銅版画を制作。図画担当の教諭尾藤武夫は、生徒や尾藤本人の作品を女学校でのエッチング事情や生徒の感想文と共に日本エッチング研究所の西田武雄に送った。それらは研究所機関誌『エッチング』第50号に紹介されていて、中本の作品も掲載されている。【文献】尾藤武夫「女学校のエッチング」『エッチング』50（1936.12）（加治）

中家一郎（なかや・いちろう）

現在の飛騨市古川町に生まれる。古川尋常小学校に学

び、1929年に15歳で岐阜師範学校に入学、1934年に卒業する。小学校に勤務した後、1936年には岐阜師範学校専攻科に再入学し、1937年卒業。高山西尋常小学校などに教師として赴任する。戦後は国府中学校や飛騨教育事務所指導主事などを経て、中学校校長や飛騨教育事務所の指導課長などを務め、母校の古川小学校の校長を最後に1975年に教職から退く。版画関係では飛騨高山の守洞春が中心となって発行した版画誌『版ゑ』第1号（1938?）に≪校庭≫を発表。『版ゑ』は第3号まで確認しているが、刊行年は不明。【文献】『創作版画誌の系譜』／三村真弓「岐阜県古川小学校におけるふしづくりの教育と指導法の特徴」『広島大学大学院教育研究科紀要』第二部第62号（2013）（加治）

永山五浦（ながやま・いづら） *1904～没年不詳*

1904（明治37）年に茨城県に生まれる。1926年静岡市御幸町加藤耳鼻科医院の副院長として静岡での生活を始める。1930年頃の静岡では『ゆうかり』『かけた壺』といった版画同人誌が数多く発行されるが、そんな中でも『版画座』（1932～1934）は個性豊かな版画誌であった。その第10号（1933.8）に木版画《風景》《花道》、第11号（1933.9）に《夜釣》を発表する。《夜釣》の「作品に添えて」では「版画をはじめて三ヶ月になります。幼稚園のヨチヨチ歩きですが、皆様のご鞭撻で何とか版画らしいものを作ってみたいと殊勝な心掛けで居ります」とある。それに続けて「郷里（茨木）の海岸です。先日郷里へ帰って来た母の話に依ると只今夜釣りが盛んに行われてゐるそうです」と記していることから、版画制作は静岡に転居してから始め、茨城県で生まれたことが判明。その後、第12号（1933.10）に《誘蛾灯》《伊豆風景》、第2年13号（1933.11）に《久能山風景》《古奈風景》、第2年14号（1933.12）に《雪霽れ》、第3年15号（1934.3）に《雪霽れ》、第3年16号（1934.6）に《憩ひ》《孫悟空》《無題》と発表を続けている。1934年には『版画座』の同人尾崎邦二郎、童土社の同人杉山正義、須坂の小林朝治らと版画誌『絵本』を創刊するが、尾崎の渡満により1号で休刊（未見）。その後、東京都江戸川区小岩4-1811に「小岩永山病院」を開業する。その傍ら、「日本画家の中村岳陵に師事し、日展作家となって常連」と中川雄太郎が『静岡県版画史話』に記しているものの、日展への出品については確認できず。【文献】中川雄太郎『静岡県版画史話』（童芸工房　1967）／『創作版画誌の系譜』（加治）

中山秋湖（なかやま・しゅうこ） *1879～没年不詳*

1879（明治12）年5月東京市深川区常盤町に生まれる。水野年方に師事して浮世絵派の筆法を学ぶ。1900年の日本美術協会に人物画を出品（銅賞）、1907年の東京勧業博覧会に《麗春》を出品。1912年の第6回文展で《秋の夜》が初入選、以後も翌年の第7回展に《笛の音》が、1915年の第9回展に《初島田》がそれぞれ入選している。美術研精会や巽画会にも出品した。大正期に木版画集『新浮世絵美人合』に参加、《5月 さみだれ》と《10月 紅葉》を制作。タトウには「中山秋湖画伯は、東都画壇に於て、歴史人物画、殊に美人画に於て、最も艶麗華美なる美人を描くに於て、その名声嘖々たり。殊に屢々文部省展覧会に入選し、その他諸種展覧会等に於て優賞を得ること、実に数十回の多きに及べり」と記されている。『新浮世絵美人合』は発行元として「新浮世絵美人合刊行会」「浮世絵傑作集頒布会」「人情本刊行会」の三者がタトウに併記され、編輯兼発行人は村上静人、摺師は漆原三次郎。秋湖のほか池田輝方や池田蕉園・北野恒富・山村耕花・鰭崎英朋ら若手の日本画家が下絵を手がけた。1924年の作とされるが、1916年の末から刊行され1918年のうちに全12図が完成したと考えられる。また『美術と文藝』11号（1918.5）に「現代風俗新錦絵」として「湯上り二題、處女と藝者」の記事があり、ほかにも木版画を手がけたと思われるが未見。【文献】『帝国絵画集粋 東京之部』（帝国絵画協会　1914）／『帝国絵画宝典 本文之部』（帝国絵画協会　1918）／『おんなえ 近代美人版画全集』（阿部出版 2000）（西山）

永山善策（ながやま・ぜんさく）

東京の文化学院専修科では肖像画・挿画・図案などに加えて、1933年4月からは石版・エッチングの講習会を始めた。エッチングについては第1回を1933年10月に、第2回を11月にそれぞれ1週間、講師に日本エッチング研究所の西田武雄を招いて開催。その第1回（1933.10.2～7）には在学中の永山を含め専修科の16名が参加し、永山らの制作した作品は西田主宰の研究所機関誌『エッチング』第12号（1933.10）に掲載されている。【文献】「文化学院第1回講習会」『エッチング』12（加治）

中山初枝（なかやま・はつえ）

札幌では北海道帝国大学の学生たちが中心となり「札幌詩学協会」を組織し、詩・版画・演劇の同人誌『さとぽろ』（1925～1929）を発行する。中山は学外からの参加で、文芸作品を中心に寄稿。その第11～27号（1926～1929）に毎号詩を、そして第13号（1926.11）には中山が彫った木版画《扉絵》が掲載されている。詩の作品では「葉津絵」の表記もあり。【文献】『創作版画誌の系譜』／『「さとぽろ」発見－大正・昭和・札幌　芸術雑誌にかけた夢』展図録（北海道文学館　2016）（加治）

永山富士太郎（ながやま・ふじたろう）

1937（昭和12）年の第6回日本版画協会展に木版画《九品仏》、1939年の第8回展に木版画《夜汽車》を出品。出品時は東京に住む。なお、第8回展の目録には「氷山」とあるも同一人と判断した。【文献】『第六回版画展出品目録』（日本版画協会　1937）／『第八回版画展目録』（日本版画協会　1939）（三木）

中山正實（なかやま・まさみ） *1898～1979*

1898（明治31）年1月2日神戸市に生まれる。16歳の頃から油絵を独学で始める。1915年神戸高等商業学校に入学、神戸洋画会会員となる。1919年同校を卒業し、東京商科大学（現一橋大学）専攻部に入学、傍ら川端画学校洋画科に学び藤島武二に師事する。1921年第3回帝展に《鉱山の夕》が初入選。1924年渡仏し、フレスコ壁画と銅版画の技法を学ぶ。1926年巴里郊外のオーボンヌ・カトリック教会で洗礼を受け（霊名フランソワ）、1927年帰国。同年第8回帝展から1931年第12回帝展まで連続出品するが、1932年からは神戸商業大学（現神戸大学）図書館壁画《青春》の制作を委嘱され（1935年完成）、完成後は同大学六甲台講堂壁画三部作の制作に着手（1938年完成）、さらに1939年には橿原市大和国史館万葉室壁画、1944年には江田島海軍兵学校壁画《海ゆかば》を制作する（終戦当日破壊）。傍ら壁画制作と並行して色彩銅版画の研究を続け、1935年日本における最初期のカラー

エッチング作品《信仰への道標》を制作する（未見）。戦後はGHQ通信隊の美術顧問として油彩画・リノカット・エッチングなどの指導にあたり、その後は彦根市、新宮市、和歌山市の各カトリック教会壁画を制作する。1957年頃からキリスト教を題材にしたカラーエッチングの制作に精力的に取り組み、1960年日本版画協会会員に推挙される。1978年神戸大学に1926年より描き続けた144点のエッチング作品を寄贈。1978年5月神戸大学75周年記念行事の一つとして学内で「カラー・エッチング展」が開催された。1979（昭和54）年1月7日逝去。【文献】『日本美術年鑑』昭和55年版（東京文化財研究所　1982）／『明治・大正　神戸生まれの芸術家たち』展図録（神戸市立小磯記念美術館　2001）／野邑理栄子「中山正美」（神戸大学企画部社会連携課　2009）（樋口）

永礼孝二・資朗（ながれ・こうじ／しろう） *1901 ～ 1975*

1901（明治34）年5月岡山県苫田郡東苫田村に生まれる。本名は矢山孝二（「矢山」は母方、「永礼」は父方の姓）。「永礼古典」「永礼那岐」「永礼資朗」などの画名も使う。地元の津山尋常小学校を卒業。1919年上京し、本郷洋画研究所に学ぶ。版画は石井鶴三に学んだというが詳細は不明。1929年第9回日本創作版画協会展に「永礼古典」の名で木版画《花》《酔漢》が入選。翌1930年には荒井東留・児玉篁と版画誌『刀の跡』（1930 ～ 1932.5　5冊か）を創刊。また、岡山で「永礼那岐創作版画展」（9.19 ～ 21　岡山県立図書館）を開催した。1931年の第1回新興版画会展（6.21 ～ 25　新宿・三越）には「永礼孝二」の名で《ケシ》を出品。1932年から日本版画協会展に出品するようになり、同年6月の第2回展に「永礼資朗」の名で《綾瀬の水門》が入選。以後、戦前は1944年6月の第14回展まで毎回出品。その間、1944年1月頃に会友に推挙された。その後、1945年5月25日の東京大空襲に遭い、郷里の津山へ疎開。戦後は一旦東京へ戻ったが、1949年頃からは津山を拠点に創作活動を再開。「永礼孝二」の名を使い、1947年の第15回日本版画協会展に《大和風景》《唐招提寺》を出品。会員に推挙され、1960年の第28回展まで毎回出品。また、国画会展へも1948年の第22回展（住所は渋谷区千駄ヶ谷四ノ四八）から出品し、第23回展（1949　住所は岡山県津山市川崎王琳五七九矢山方）・第24回展（1950）・第26回展（1952）・第27回展（1953　住所は津山市上之町六ノ九三）に出品。1952年からは棟方志功に誘われ日本板画院展に出品するようになり、第1回展に出品。1953年の第2回展で会友、1954年の第3回展で会員に推挙され、1974年の第24回展まで毎回出品した。その間、1961年の第1回日本版画会（日版会）にも出品。会友に推挙され、翌年会員になったが、1963年に退会している。1975（昭和50）年10月12日津山市で逝去。同年の第25回日本板画院展に遺作が並んだ。また、2005年には「没後三十年記念永礼孝二展」（勝央会場：10.29 ～ 12.18　勝央美術文学館、津山会場：11.19 ～ 12.18　津山郷土博物館）が開かれている。【文献】『没後三十年記念　永礼孝二展』図録（勝央美術文学館　2005）／『昭和期美術展覧会出品目録　戦前篇』（東京文化財研究所　2006）／『日本版画協会展出品目録』15 ～ 28（1947 ～ 1960）／『国画会展目録』22 ～ 27（1948 ～ 1953）／『創作版画誌の系譜』（三木）

名倉ちづる（なくら・ちづる）

本名は名倉鶴二郎か。生没年不詳。画歴としてわかっていることは、1910（明治43）年の白馬会第13回展に《寺の杉》《麓の朝》《白壁》3点の油彩画を出品。当時19歳だった岸田劉生も同展に客員として《冬の日》《春》など油彩画9点を初出品している。劉生との出会いについては不明だが、1912年に岸田劉生・名倉鶴二郎共著で『小品画集　黒猫』（発行者名倉ちづる　昭文館）を出版する。1909年初めから1911年夏の終わりまでの小品を集めたもので、名倉は《Bar》《青い闇の横町の女》など夢二調の作品30余図を載せている。同書〔あとがき〕には「近い中に第二輯（題名は未定）を出す時には比較的自信のある努力になった新しい作品を出す考へですから　それまで　SAYONARA（千九百十一年秋）」と記すが未刊に終わったようだ。また、夢二画集『櫻さく國　白風の巻』（洛陽堂　1911）に挿画《清人の暇》、同『櫻さく國　紅桃の巻』（洛陽堂　1912）に挿画《ひとりぼっち》《南の女》（目次には「絵 奈倉ちづる（ひとりぼっち）（南のおんな）」と記載）を描いており、「奈倉ちづる」とも称していた。そのほか俳誌『ホトトギス』第15巻第4 ～ 6·9·11号（1912.1 ～ 8）、第16巻第2号（1912.11）に「名倉ちづる」あるいは「名倉チヅル」名で挿画を寄せている。更に小沢武二編『草風帖』（光の会　1922）に挿絵《〔夜の女性の横顔〕》《食后》の2点を制作。『美術と文芸』第7号（柳屋書店　1916.11）の「新浮世絵」欄には、木版画の頒布と思われる「名倉ちづる氏　歌舞伎舞臺姿　小春治兵衛　二枚　十銭　二銭」の広告が載っているが、作品は未見である。

名倉亀太郎著『萬民重寶　永代大雑書大成』（1928）によると、同書の発行所について、扉には「名倉昭文館梓」、奥付には「昭文館」と記載があることから、名倉鶴二郎が1912年に出版した『小品画集　黒猫』の発行所「昭文館」（当時の住所は大阪市南区心斎橋南詰東）は、明治20年代頃より昭和にかけて大阪心斎橋で出版業を営む「名倉昭文館」と同一と考えられ、関係出版物の発行者は「名倉亀楠（南区玉屋町13番地）」、「名倉亀太郎（西区阿波座中通2丁目18番地）」、「名倉鶴二郎（南区心斎橋1丁目5番地）」などとなっている。また、発行者「名倉鶴二郎」名で1922年に出版された『現代歌人選集』（短歌同好会編　育文館発売）の奥付によると、当時名倉の住所は東京市（以下は未確認）で、上述の『萬民重寶　永代大雑書大成』には、発行所として「大阪市西区阿波座中通2ノ18」とともに「東京市神田区今川小跡2ノ6」の住所が併記されており、1928（昭和3）年には東京神田に「昭文館」があったことがわかる。以上のことから、名倉は、明治40年代初め頃には洋画家として、また夢二調の小品を描くかたわら、大阪で「（名倉）昭文館」の出版業にかかわり、その後東京神田に所在する昭文館の業務にもかかわっていたのではないかと推測する。【文献】『美術と文芸』7（柳屋書店　1916.11）／名倉亀太郎『萬民重寶　永代大雑書大成』（昭文館　1928）／『夢二画集　櫻さく国　白風の巻』·『夢二画集　紅桃の巻』（ほるぷ出版『初版本復刻　竹久夢二全集』）（樋口）

名倉鶴二郎（なくら·つるじろう）➡名倉ちづる（なくら·ちづる）

名越国三郎（なごし・くにさぶろう）

『浅井忠と関西美術院展』図録に付された「関西美術院入学者名簿（明治・大正編）」によれば、本名は名越忠男、1907（明治40）年3月14日に関西美術院入学。その時の住所は「丸太町通」とする。洛陽堂から刊行した画集に『画集　初夏の夢』（菊判・絵画50枚掲載）があり、『美術週報』第131号（1916.12.10発行）の広告中には〈著者は挿

絵画家として、我が新画壇に特異の地歩を領有するなり。本書は大阪毎日新聞に掲載して、その清新流麗の画風に江湖の士女を熱狂せしめたるもの也。「初夏の夢」は著者が若き日の思ひ出として熾烈なる生命の憧憬を描いた叙情詩的興趣の横溢せる芸術的収穫の一部にて、新しき情調の蠱惑と、飽く迄独特の表現によって描き出された、驚くべき著者が神経の敏感を遺憾なく発揮せる画集である〉とある。挿絵画家としての一例に、『サンデー毎日』特別号・小説と講談（1924.7.1 発行）では表紙絵を担当すると共に岡本綺堂の「一つ目小僧」に挿絵を描いている。挿絵画家仲間と結成した主情派美術会に参加し 1928 年に第一回展覧会開催。さらに『主情派現代風俗版画集』を 1929 年に発行し、第 4 回発表に《サーカスの名花曲立の図》（大錦判、本生漉奉書木版数十度摺）がある。また小判の現代役者似顔の作品や装幀の作例もある。【文献】『浅井忠と関西美術院展』図録（府中市美術館･京都市美術館･京都新聞　2006）（岩切）

那須愛子（なす・あいこ）

長野県安曇地方の小学校教師たちは、教育者・版画家として活躍していた郷里の先輩武田新太郎を顧問に迎えて、黄樹社を組織し、版画の研磨向上を目指して版画誌『黄樹』（1937 ～ 1938）を発行した。その創刊号（1937.3）の会員名簿に掲載されているものの、版画の発表はない。当時、北安曇郡七貴小学校に勤務。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

夏秋　静（なつあき・しずか）

東京で平塚運一が版画の研究と普及のために発行した『版画研究』第 1 巻 1 号（1932.3）に土瓶と湯飲みを描いた木版画〔タイトルの記載なし〕を発表する。当時、高等女学校 4 年生。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

夏目兼男（なつめ・かねお）

東京の料治熊太は『白と黒』など数多くの版画誌を発行したが､その代表的な版画誌『版芸術』の第 18 号（1933.9）全国郷土玩具版画集に手彩色木版画《金太郎と天神》を発表。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

名取春仙（なとり・しゅんせん） *1886 ～ 1960*

1886（明治 19）年 2 月 7 日山梨県中巨摩郡明穂村の生まれ。本名芳之助、号春僊（仙）。1887 年東京に移り、1892 年東京市立城東尋常高等小学校に入学。同期に川端龍子や岡本一平、仲田勝之助がいた。1900 年久保田米僊に入門、米僊の失明後は子の金僊に就く。1904 年東京美術学校日本画撰科入学。この頃平福百穂や福井江亭にも学び、百穂に勧められて洋画も習う。1905 年に美校を中退、新傾向の日本画を志向して 1907 年より无声会に参加、1915 年珊瑚会結成。1917 年の再興第 4 回院展に《潮盈つ珠潮干る珠》が入選するも、次第に本画制作から遠ざかり、挿絵や木版画に軸足を移した。1936 年の改組第 1 回帝展に《再挙》が入選し、1940・41 年の第 4・5 回海洋美術展への出品などもあるが、戦後は筆力が衰え、1960（昭和 35）年 3 月 30 日に東京青山の高徳寺で妻とともに服毒自殺した。

新版画の作家として知られるが、版の仕事はそれ以前からあり、17・8 歳の頃地方新聞の挿絵を描いたのが始まりという。書籍では広文堂書店の仕事を 1905 年頃から手がけ、青木苫汀『我や人妻』の扉と口絵が最も早いとされる（サインは「春川」）。1907 年に東京朝日新聞社嘱託となり（翌年入社）、二葉亭四迷「平凡」や夏目漱石「虞美人草」「三四郎」、島崎藤村「春」、森田草平「煤煙」、泉鏡花「白鷺」、長塚節「土」などの挿絵を描き、洋風を加味した斬新な作風で一世を風靡した。また装幀も得意とし、1910 年の石川啄木『一握の砂』や翌年の渋川玄耳『日本乃神様』を皮切りに、30 年ほどの間に書斎一杯ほどを世に送ったという（「装釘の思ひ出」）。そのほか俳誌『層雲』の挿画やカット、宮崎湖処子「自白」や佐藤紅緑「侠艶録」、小栗風葉「荒尾譲介」の小説口絵も残す。自著ではコマ絵を集めた 1910 年の『デモ画集』、1911 年の『漫画と訳文』（岡本一平・仲田勝之助との共著）、同年の『金色夜叉画譜』上巻（川端龍子と共著）が知られる。これらと並行して明治期末より役者絵を雑誌『演藝画報』に発表、1915 年に石井柏亭や山村耕花らと木版による役者似顔絵集『新似顔』を出版（似顔洞より、第 1 年初編～ 5 編まで）。1916 年、第 2 回劇画展覧会（於画博堂）に出品した《初世中村鴈治郎　紙屋治兵衛之図》が版元渡邊庄三郎の目にとまり、翌年本作をもとに《初代中村鴈治郎の紙屋治兵衛》を、1917 年に《六代目尾上梅幸のお富》を刊行。新鮮な長大判 2 点により山村耕花と並ぶ新版画の役者絵師としての活動をスタートさせ、耕花に比すればより対象に忠実な、端正な作風で人気を得た。ほかの渡邊版として 1925 ～ 29 年の『創作版画春仙似顔集』36 点、1929 ～ 34 年の『春仙似顔集追加』15 点、1927 年の《徳川頼貞侯》《高見廉吉像》、1928 年の《ゾルフ大使》、同年の『春仙美人三姿』（《浴後》《髪梳》《鏡の前》）､同年の《たわむれる仔猫》《みつめる黒猫》《三匹の猫》《四匹の仔犬》《まどろみの仔犬》、1933 年の『恵那八勝』、刊年不詳《深川金八》《仲之町千歳》などがある。戦後も 1951 ～ 54 年に『新版舞台之絵姿』『新役者絵』を制作した。渡邊版以外では、1930 年に版画倶楽部から『木版新似顔絵』第一輯として《早川雪州　ウォング》を刊行（第二輯の《三原那智子 無憂華》も予告されたが未見）したほか、1936 年の市川三升私家版《解脱》､同年の松本幸四郎私家版《勧進帳》などを手がけている。【文献】名取春仙「装釘の思ひ出」『書物展望』5-4（1935.4）／同「私の挿画回顧」『書物展望』5-10（1935.10）／同「私の純文藝挿畫時代回顧」『さしゑ』3（『名作挿画全集』附録　平凡社　1935）／『名取春仙』展図録（山梨県立美術館　1981）『名取春仙 浮世絵歌舞伎版画―最後の巨匠』展図録（櫛形町立春仙美術館 1991）／山田奈々子『木版口絵総覧 明治・大正期の文学作品を中心として』（文生書院　2005）（西山）

七尾善之助（ななお・ぜんのすけ） *1908 ～没年不詳*

1908（明治 41）年に青森県青森市に生まれる。昭和のはじめ､青森では洋画が盛んになり､七尾も洋画（水彩画）を制作する。1922 年に棟方志功が設立した美術団体「青光画社」（あるいは青光社、青光画会）に第 5 回展（1924）から参加し、第 9 回展（1926）まで出品。1929 ～ 30 年にかけて上京し、第 10 回帝展（1929）に水彩画《緑陰》が入選する。1930 年の光風会展、白日会展、1930 年協会展にも出品。郷里に戻り、東奥日報社が主催した「第 2 回東奥美術社展覧会」（1931.5.2 ～ 5　弘前市ほか青森に巡回）に会員となり水彩画《屋上より見たる風景》他 5 点、以後毎年出品する。一方、佐藤米次郎ら若い洋画家たちが創作版画研究会を立ち上げ、1931 年に版画誌『彫刻刀』（1931 ～ 1932）を発行する。七尾もその第 1 号（1931.6）に版画作品の発表を予定していたが、都合で不出品となっ

た。版画作品は未見。【文献】『東奥年鑑』昭和5･6年版（東奥日報社　1930･1931）／『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所　2002）／『創作版画誌の系譜』／對馬恵美子「大正期の青森の美術団体について（1）」『青森県立郷土館研究紀要』35（2011.3）（加治）

浪花贅六庵（なにわ・ぜいろくあん）

本名は浪花善三。「贅六庵」、「夜巣男」とも称す。友人のスクラップを見て蒐集熱が起き、大正末頃から土俗玩具・乗車券・名物レッテル・絵馬・木版年賀状・宝船・納札などを蒐集する傍ら、木版絵葉書交換会「日本紀葉会」、宝船絵葉書の交換会「玉葉会」、年賀状の交換会「日本年雅の会」の幹事や絵葉書同人の会「美葉会」、諸国風物意匠絵葉書交換会「二葉会」の同人など、昭和初期から10年代にかけて大阪趣味人のひとりとして知られている。また、小川茂麻呂〔麿〕画による木版賀状やデザイン性の高い乗車券・馬券・入場券・駅弁票などの蒐集品をコラージュに使った自画の木版賀状を制作。武井武雄主宰の版画による年賀状交換会「版交の会」第1回会員（1935）でもある。

職業は大阪道頓堀（大阪市南区西櫓町十番地）に「ナニワ子供洋品店」を営むほか、「ぜい六」「新興倶楽部」「大阪スタンプビューロー」などの趣味の店や喫茶「サンパウロ」、雀荘「新興」などを開いていたらしい。なお、第15回年賀葉書交換会（田中録紅主催1936）の会員名簿では「浪花夜巣男」の名前で、住所は大阪市南区道頓堀中座西となっている。【文献】『和漢楽〔ワカラン〕』（和漢楽会　1930.4）／橋爪節也「浪花贅六庵」『彷書月刊』6（彷徨舎　2007.5）／「浪花贅六庵蒐集ラベルコレクション」（関西大学　大阪都市遺産研究センター所蔵商標ラベルデーターベース　2014）（樋口）

鍋井克之（なべい・かつゆき） *1888 ～ 1969*

1888（明治21）年8月18日大阪市に生まれる。旧姓田丸。父は堺事件に連座し生き延びた土佐藩士田丸勇六郎（良也）。1908年天王寺中学を卒業、東京美術学校受験に失敗し、白馬会洋画研究所で長原孝太郎に学ぶ。翌年東京美術学校西洋画科に入学、同期に小出楢重、大久保作次郎がいる。1914年第1回二科展に入選、翌年の第2回展に《秋の連山》を出品し、二科賞を受賞。以後二科会に出品し、1918年の第5回展でも再度二科賞を受賞する。1922年2月ヨーロッパへ留学し、翌年5月に帰国し、1924年第11回二科展に滞欧作を出品する。同年、小出・黒田重太郎・国枝金三等と大阪に信濃橋洋画研究所を創設する。戦後は二科会を離れ、1946年中川紀元・黒田・宮本三郎等と第二紀会を結成し、以後二紀会に出品する。戦前戦後を通して大阪に居住し、関西洋画壇の指導者として尽力する。画作の傍ら、中学からの友人宇野浩二を通して広津和郎、葛西善蔵等と交流し、文筆を能くした一方、新劇運動にも関心を持ち、1914年永瀬義郎と共に美術劇場を結成している。作画の傍ら『自由な油絵の学び方』（聚英社　1921）『西洋画の理解』（中央美術社　1926）といった美術書だけではなく、『和服の人』（書物展望社　1934）『富貴の人』（小山書店　1940）『閑中忙人』（朝日新聞社1953）『大阪ぎらい物語』（布井書房　1962）等々の随筆集を上梓し、自著も含め多数の装幀・挿絵を手掛けている。版画にはデッサン社主催の1928年「第2回美術展覧会」に自画石版画《雪の小停車場》《バラ》が、1935年の同社主催「素描版画展覧会」に木版画《雪の停車場》が出品される。他に多色木版画《風景》《箱根冬の富士》（1942東京国立近代美術館蔵）等が知られる。1969（昭和44）年1月11日大阪で逝去。【文献】『日本美術年鑑』昭和45年版（東京国立文化財研究所　1960　東文研アーカイブデータベース）（森）

滑川　護（なめかわ・まもる）

東京の料治熊太は『白と黒』など数多くの版画誌を発行したが、その代表的な版画誌『版芸術』の第23号（1934.2）万国民芸土俗玩具号に《張り子人形（シャム）》を発表。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

滑川要吉（なめかわ・ようきち）

東京の料治熊太は『白と黒』など数多くの版画誌を発行したが、その代表的な版画誌『版芸術』第20号（1933.11）続々郷土玩具版画集に《牛》《まんじゅう食ひ》を発表。また、郷土玩具のみを題材に扱い、郷土玩具の図版カタログのような版画誌『郷土玩具集』の第2号（1934.7）にも《ずつちゃんちゃん（古賀）》を「滑川　要」の名で発表する。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

奈良善郎（なら・よしろう）

東京の料治熊太は『白と黒』など数多くの版画誌を発行したが、その代表的な版画誌『版芸術』第15号（1933.6）全国郷土風俗版画集に丸鑿のみで彫った《橇（雪国風俗）》を、そして第19号（1933.10）続全国郷土玩具版画集に《猿》を発表。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

楢崎栄昭（扶陽）（ならざき・えいしょう／ふよう）

（1864 or 1868）～ 1936

『版画家名覧』（山田書店版画部　1984）に「元治1（1864）～昭11（1936）、本名庸夫。永濯に師事し、大蔵省印刷局にキヨソネの助手として働く。大正期に「扶陽」の名で輸出用多色木版画制作。1932（昭7）年「栄昭」と改める。1921（大10）年印刷局創立50周年の功績者として表彰。」としている。補足すれば、『木版画目録』（渡辺版画店1935）には、「内閣印刷局在職中に伊国人キヨツネの助手として鋼版を作りし事ありて下図には巧なり。木版画は大正五年頃より扶陽と号して輸出版画の下図を画く、昭和七年より栄昭と改号して上梓す」とあり、版元渡辺庄三郎からの大判版画作品として《浅草観音堂内部》《帝国新議事堂》《明治神宮》《金龍山浅草寺側面》《朝鮮の山金剛立石浦》《鴨緑江鉄橋》《大阪道頓堀舟料》の題名が挙げてある。なお、出生年については、『よみがえる浮世絵』（江戸東京博物館　2009）の人名録では「1868（明治元）年」とある。【文献】『よみがえる浮世絵』（江戸東京博物館2009）（岩切）

奈良時雨三郎（ならしぐれ・さぶろう）

1914（大正3）年に日比谷美術館で「奈良時雨三郎信越旅行スケッチ展覧会」（12.5 ～ 9）を開催したほか、『美術週報』第2巻第17・22・31号（1915.1 ～ 5）の消息記事によると、1915年1月に木版画『新東京十二景』頒布の為に事務所を「下谷花園町二堀方」に置き、同年2月には鴨下晁湖・伊藤順三指導の下、横浜野毛山羽田稲荷内に絵画研究所を開設するも、2か月後の同年4月には種々の都合により絵画研究所は解散したという。詳細は不明で、版画の制作についても確認できていない。【文献】『美術週報』17・22・31（1915.1 ～ 5）（樋口）

成田一成（なりた・かずなり）

青森の版画家で、1938年当時エッチングプレス機を所有。但し作品は未見。【文献】『エッチング』64（1938.2）（樋口）

成田玉泉（なりた・ぎょくせん） *1902 ～ 1980*

1902（明治35）年青森県弘前に生まれる。本名は正実。警察官だった父の関係で小樽に移る。旧制高校を卒業し、時期は不明であるが小樽市立緑小学校の図画教員となり、また北海道庁立小樽中学校（1927 ～ 1937）でも教えた。日本画・洋画・版画を手掛けたというが、日本画の活動は不明。洋画は1927年の第4回白日会展に《盛夏静日》《運動会の群衆》が初入選。その後、1933年の第10回展まで連続入選している。版画を始めた時期は不明であるが、1927年、当時小樽中学校の1年生であった金子誠治は、成田から「平塚運一・恩地孝四郎・棟方志功の版画」を見せられ、木版画の実技指導を受けたというので、この頃までに版画を手掛けていたことがわかる。1929年夏には同郷で交友のあった棟方志功を小樽に招き、勤務先の小樽中学校で講演会を開催。金子や緑小学校からの教え子で小樽中学1年生の河野薫、自宅でデッサンや油彩画を教えていた斎藤清を棟方に紹介したが、三人にとっては、本格的に美術家を志す切っ掛けとなった貴重な出会いでもあった。1932（ｏｒ1929）年か、洋画団体「光土社」を結成し、展覧会を開催。1932年に開いた光土社展には、金子・河野・斎藤らも出品したという。また、1934年1月には小川信一・国松登らと「小樽市美術協会」を結成。自宅に美術研究所を設けた。その後、1937年に小樽市立緑小学校の図画専科教員の職を金子に譲り、棟方の勧めで上京。同年11月の第6回日本版画協会展に《忍路》《山熊》、1939年12月の第8回展（1939）に《慶州鶏林》《開城天摩山》が入選した。1939年頃は横浜に住んだが、その後、戦時下に入ったため、小樽に帰った。戦後は、時期は不明だが北海道版画協会（1959結成）に参加。また、棟方の呼びかけに応じ、1963年に日本板画院（1952.7結成）の会員（のち「同人」と改称）となった。なお、1963年当時の住所は札幌市南四条西21丁目。その後、1973年頃に浜松市三方原町に移り、1975年頃からは静岡県引佐郡細江町中川に住んだ。1980（昭和55）年9月16日逝去。【文献】「成田玉泉」『20世紀物故洋画家事典』（美術年鑑社　1997）／『昭和期美術展覧会出品目録　戦前篇』（東京文化財研究所　2006）／『白日会展総出品目録＜第1回～第59回＞』（白日会　1984）／『木のぬくもりから生まれる　金子誠治展』図録（小樽市立小樽美術館　1996）／『北海道美術の青春期　1925－1945』展図録（小樽市立小樽美術館・滝川市美術自然史館　1999）／星田七重「小樽創作版画の人々」『市立小樽美術館報』32（2006．3）（三木）

成田駿太郎（なりた・しんたろう） *1908 ？～ 1992*

1908（明治41）年頃の生まれか。1930年1月の第7回白日会展に油彩画《太海風景》、2月の第17回光風会展に油彩画《風景》が入選しているが、それ以前の経歴は不明。同じ頃、木版画も手掛けていたようで、1931年1月の第8回白日会展に《公園の一隅》《太海小景》、5月の第3回第一美術協会展に《桃の春》、9月の第1回日本版画協会展に《庭園》《五月晴れ》《麹町風景》が続けて入選。その内の《桃の春》については、「陰の調子を明るく甘く取扱つた傑出の版画」（N生「第一美術協会展入選作品評」『みづゑ』317）との評がある。翌1932年の6月の第2回日本版画協会展にも《牧場》《静物》《風景》が入選。また、『版芸術』第9号（12.1発行）「全日本版画家年賀状百人集」に木版年賀状（1930）を発表。1933年には4月の第8回国画会展に《下落合風景》が入選したが、平塚運一に「成田駿太郎氏の作品は色彩に見所があるが素描力が弱い」（「国展と春陽会展の版画」『みづゑ』340）と評されている。出品時の住所は「東京府豊島区巣鴨6ノ1470」。その後も同年9月の第3回日本版画協会展に《池畔》、1936年5月の第5回展に《帝大風景（東京百景の内）》を出品した。なお、日本版画協会展・第一美術協会展の目録は「駸太郎」、他の展覧会目録は「駿太郎」と表記するが、活躍の時期から同一人と判断した。1933年頃は「東京府豊島区巣鴨6ノ1470」に住む。俳句も能くした様であるが未調査。1992（平成4）年2月5日東京で逝去。【文献】『みづゑ』317（1931.7）・340（1933.6）／『第八回国画会出品目録』（1933）／「成田駸太郎」『20世紀物故洋画家事典』（美術年鑑社　1997）／『昭和期美術展覧会出品目録　戦前篇』（東京文化財研究所　2006）／『創作版画誌の系譜』（三木）

成田守兼（なりた・もりかね）

生没年・経歴ともに未詳。1931（昭和6）年、大阪市北区中野町の版画芸術協会（または眞美社）が版行した『創作版画艶姿二十四考』に大平華泉とともに参加している。同作の編輯兼発行人は山下関一、彫師は森黎明、摺師は内藤政治。これまで紹介されている図に《提灯》《ランプ》《紐（あるいは契り）》《髪梳き》《たび》《梅と裸婦》《雀柄着物美人》があるが、いずれも仮題と考えられる。【文献】『おんなえ 近代美人版画全集』（阿部出版　2000）／『よみがえる浮世絵―うるわしき大正新版画展』図録（東京都江戸東京博物館　2009）（西山）

成田幸雄（なりた・ゆきお）

青森での最初の版画同人誌『緑樹夢』（1930 ～ 1931）は、青森中学校の同級生であった柿崎卓治・佐藤米次郎・根市良三の3人によって発行された。同級生だった成田や田村清・福島常作・上崎正二も『緑樹夢』に参加。その第2号（1930.9）に《堤川スケッチ》《〔暑中御伺〕》を発表する（創刊号は未見）。その後、『緑樹夢』は第3号で終刊。1932年に青森中学校を卒業する。当時の青森では洋画が盛んであり、この『緑樹夢』は若い洋画家たちを刺激したようで、彼等は「夢人庵内創作版画研究所」を組織し、版画誌『彫刻刀』（1931 ～ 1932）を発行する。成田は『緑樹夢』第3号には発表していないが、『彫刻刀』には創刊から参加し、第1号（1931.6）に《ポプラ》、第2号（1931）に《招魂堂》、第3号（1931）に《真夏》、第4号（1931）に《堤川風景》、第5号（1931）に《花火》、第6号（1932）に《賀状》《海辺の秋》《工場地帯》《蔵書票》、第7号（1932）に《波止場》、第8号（1932）に《旧射的場》、第11号（1932.6）に《堤川風景》を発表。その後の版画制作は確認できていない。【文献】對馬恵美子「緑の樹の下の夢－青森県創作版画のあゆみ」『緑の樹の下の夢―青森県創作版画家たちの青春展』図録（青森県立郷土館　2001）／『創作版画誌の系譜』（加治）

鳴海かなめ（なるみ・かなめ）

東京の料治熊太は『白と黒』を初めとして『版芸術』等多くの版画誌を主宰し発行する。その代表的な版画誌『版芸術』の第9号（1932.12）全日本版画家年賀状百人集

に年賀状を、第 18 号（1933.9）に《鹿》、第 20 号（1933.11）に《猿》《鯛抱き》、第 [21] 号（1933.12）創作版画年賀状傑作集に《賀状》、第 23 号（1934.2）万国民芸土俗玩具号に《インデアン人形（アメリカ）》、第 24 号（1934.3）続万国民芸土俗玩具集に《ワーヤン人形（ジャバ）》、第 27 号（1934.6）に表紙絵《豊年うた》を発表。平行して出版されていた料治熊太主宰の版画誌『郷土玩具集』第 3 輯（1934.8）にも《鯛（名古屋）》を発表する。鳴海の題材は日本や世界各国の郷土玩具であり、表記は「鳴海要」も使用している。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

縄田　正（なわだ・ただし）

大分県師範学校の教師武藤完一が主宰した版画誌『九州版画』第 7 号（1935.4）に《窯業所風景》を発表する。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

南天光（なんてんこう）➡南部興鎮（なんぶ・こうちん）

南部興鎮（なんぶ・こうちん）

1925（大正 14）年 3 月から 1933 年の夏頃まで青森中学校に図画教師として勤務。雅号は南天光。1930 年青森では最初の版画同人誌『緑樹夢』（1930 ～ 1931）が青森中学校の生徒柿崎卓治・佐藤米次郎・根市良三の 3 人によって発行された。当時の青森では洋画が盛んで、この『緑樹夢』は若い洋画家たちを刺激したようで、彼等は「夢人庵内創作版画研究所」を組織し、版画誌『彫刻刀』（1931 ～ 1932）を発行する。南部は青森中学校の図画教師としてこの版画誌『彫刻刀』に賛助出品する。第 1 号（1931.6）に《疲れた踊り子》、第 2 号（1931）に《蕃地の山健を偲びて「山の幸」》、第 3 号（1931）に《裸婦》、第 4 号（1931）に《蛇》、第 5 号（1931）に《菊のある籠》、第 6 号（1932）に《賀状》《〔無題〕》、第 7 号（1932）に《支那料理》、第 13 号（1932.8）に《薬研》を発表。『彫刻刀』は 17 号で終刊。以後『陸奥駒』（1933 ～ 1935）と改題する。その第 9 号（1934.2）に《雪ふみ人形》を発表。その後の制作は確認できず。『彫刻刀』の発表では雅号「南天光」を使用し、『陸奥駒』では本名の南部興鎮を使用している。【文献】『緑の樹の下の夢―青森県創作版画家たちの青春展』図録（青森県立郷土館　2001）／『創作版画誌の系譜』／金子一夫編『大正・昭和戦前期の中等学校図画教員と出身美術学校の総覧的研究報告書　第 1 部　直轄学校、及び北海道～三重県まで』（金子一夫　2016）（加治）



恩地孝四郎「静物　K（りんご・黄）」
1922年　油彩8号（45.5 × 33.5）　サイン無
恩地邦郎シール付　キャンバス
画面に木枠のアタリ跡　縮みと割れ修復有
350,000

有限会社 **版 画 堂**

〒101-0051
東京都千代田区神田神保町 1-12　雅楽川ビル 1F
TEL 03（3219）2027 ／ FAX 03（3219）2026